岳山

第十九年
第二號

朝鮮

金剛山

金剛山略圖

凡例

△ 山岳
〰 山脈
卍 佛宇
∴ 瀑
● 景勝

長箭
水晶峰
鉢峰
奥万物相
王女峰
三仙岩
外金剛
温井里
三日浦
海金剛
觀音峰
内金剛
毘盧峰
衆香城
彩霞峰
新金剛
表訓寺
正陽寺
万瀑洞
普德窟
摩訶衍庵
法起峰
虎峯庵
望軍台
長安寺
末譚里
金剛川
百川江
白馬峰
紅勒峰
榆岾寺
三仙湖
神溪寺
三川溪
江原道

山岳

第十九年第二號　大正十四年九月發行

目次

朝鮮金剛山　大平晟……一頁

一、釜山より京城へ……四

二、京城……七

三、京城より金剛山へ……一〇

四、靈山金剛……一五

五、元山より京城へ……一三

六、京城より安東へ……一二

七、安東より下關へ……一五

圖版

○內金剛長安寺○內金剛望軍臺附近……對頁一六

○內金剛萬瀑洞噴雪潭○外金剛玉流溪の一部……三二

○內金剛萬瀑洞眞珠潭○外金剛仰止臺附近……四八
○海金剛（其一）○海金剛（其二）……七二
○外金剛九龍瀑○外金剛萬物相三仙巖……八八
○外金剛玉流溪連珠潭○外金剛與萬物相遠望……一〇四

雜錄

○神懸山○朝鮮金剛山の施設に就て（以上二項大平晟）

雜報

○アルプス登山道路○秩父宮三峰御登山○ローガン征服

○會員通信

會報

○第十八回大會記事○第二十八回小集會記事○橫幹事のロッキー登山○會務報告○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃

朝鮮金剛山

大平晟

目次

一、釜山より京城へ
二、京　城
三、京城より金剛山へ
四、靈山金剛
1、緒　論
區域、構成、景致、傳說、通路。
2、長安寺より望軍臺へ
長安寺、明鏡臺、水簾洞、兜率庵、望軍臺上の壯觀。
3、長安寺より摩訶衍庵へ
表訓寺、正陽寺展望樓、萬瀑八潭、普德窟、摩訶衍庵。
4、毘盧峯頭の偉觀

妙吉祥、一萬二千菩薩、蓮華潭。

5、摩訶衍庵より楡岾寺へ

白雲臺、內霧在嶺越え、隱仙臺、九龍沼。

6、楡岾寺

7、楡岾寺より高城へ

開殘嶺、三日浦。

8、海金剛

海萬物相、松嶋。

9、海金剛より溫井里へ

溫井里溫泉、嶺陽館。

10、溫井里より九龍淵へ

神溪寺、仰止臺、玉流洞、連珠潭、飛鳳瀑、九龍淵、上八潭。

11、萬物相

觀音瀑、蒼萬物相、新萬物相。

12、鉢峰、水晶峰

13、再び萬物相へ

奥萬物相。

14、溫井里より元山へ
長箭。

15、結　論
四季の風色、山容溪態、跋涉の難易、高山植物。

五、元山より京城へ
釋王寺、三防峽。

六、京城より安東へ
平壤、鴨綠江鐵橋、安東。

七、安東より下關へ

（終）

一、釜山より京城へ

予が朝鮮行は、金剛山探勝が主眼である。予を載せた關釜連絡船昌慶丸が、釜山第一棧橋に横附けとなつたのは、大正十三年六月二日午前八時晴れた朝であつた。

普通列車は、此の第一棧橋より四町程隔つた釜山驛から發するのであるが、急行列車には、直ちに第一棧橋から乘車せねばならぬ。急行列車時刻は九時十分であるから、尙一時十分の餘裕がある。然し予は此時間に於て、「金剛山探勝廻遊乘車船券」と銘打つた特別切符を求めねばならぬ。此の特別切符は、棧橋驛では取扱はぬから、四町程の間を駈足で往復したのである。加之驛の係員が金剛山方面の事情に不明であつたので、少からず手間取つた。不明の事情は、左の通りである。

予は大阪に立寄つた際、偶大阪朝日新聞を瞥見し、其廣告欄に、「鮮滿案內所」とあるのが目に入つた。これは南滿洲鐵道會社が、鮮滿旅行者に對し、便宜を與へるといふので、其取扱所が、東京丸の內丸ビル、大阪東區瓦町、下關驛前要通の三ヶ所である。

此の廣告に基き、早速瓦町二丁目に駈け着け、「滿鐵大阪鮮滿案內所」と横書に題した金看板を認めて刺を通じ、朝鮮鐵道旅行案內（滿鐵會社京城管理局編、定價二圓）朝鮮金剛山探勝案內（同上編、定價二十五錢）其他數種の參考書を得たが、而かも皆無料交附であつた。

右鐵道旅行案內（大正十三年一月訂正版）「內金剛に至る通路」の部に、「京元線平康驛から約三十五里長安寺に至る自動車便を唯一の通路とする、此の通路は、六月一日から十月三十一日まで毎日定期に、當社（滿鐵會社）直營を以て一往復以上の自動車を運轉してゐる」と記されてある。又金剛山探勝案內（大正八年五月訂正發行）に挿入せる付箋には、「平康長安寺間、及元山溫井里間に運轉する當社直營の自動車は、本年よりは、七月一日より十月三十一日まで、運轉する事にせり」とある。而し

て此付箋には發行の日附がない。所謂本年とは大正八年以後何年であるか、若し大正十二年以前とすれば、勿論大正十三年發行の鐵道旅行案内に依るべきである。

予は往路、平康驛から自動車にて内金剛に入り、内霧在嶺を越えて外金剛に出で、歸路長箭から汽船にて元山着、それから鐵路京城に入る豫定であるのに、六月一日からの運轉が、七月一日からと變更されては、非常な打擊である。そこで下關にて同所鮮滿案内所に就いて質問したが、係員も不明であつた。同所から貰ひ受けた、朝鮮鐵道旅行便覽（朝鮮總督府編、大正十二年十二月發行）「金剛山の通路」の部には、「六月一日より十月三十一日まで自動車が通じてゐる」と記されてある。

今釜山驛の係員に就いて、眞先に此件の質問を試み、特別券の請求をしたのである。數名の係員が打寄り、種々書類を取調べて見たが、矢張不明である。最近に於て、同驛から予と同一經路を取る乘客の切符取扱が、まだ無かつたとのことである。發車時刻が切迫してゐるので、兎に角予が請求通り特別切符を交付され、尙京城驛へ通知して置くから、異動があつたら、同驛で訂正を受けて呉れとの條件附であつた。先づ予が足の急行を豫習し、第一棧橋驛まで引返し、こゝで更に七十五錢を投じて京城までの急行券を需め、特別切符に「特割」の紫印を受け、辛うじて發車時刻に間に合つた。

右特別切符（金剛山探勝廻遊乘車船券）は、ミシン線にて、釜山より長安寺までの汽車自動車賃、長箭より元山までの汽船賃、元山より釜山までの汽車賃の三區に分ち、汽車自動車賃は三割引、汽船賃は二割引、通用期間は三十日としてある。釜山は朝鮮線の起點である。又亞歐を連絡する鐵路の大玄關であるので、此處から軌間は四呎八吋半（内地のは三呎六吋）となり、世界の標準軌間所謂廣軌式の仲間入りした驛で、座席は廣く、車體の動搖も少く、流石は車内既に大陸的氣分を帶びて、頗る氣持が好い。

車窓から見た、山川人家の特異な風色は、予が想像以上であつた。

四國、九州地方の森林多い中にも、殊に常綠樹の彌が上にも綠濃く枝葉密に茂れる有樣に、見馴れた予が眼には、一入其朝鮮味を感じたのである。打續ける山岳丘陵は、綠樹青葦の被服殆ど無く、層狀若くは不規律な節理の岩塊突兀として、所謂赤裸々たる肌を露はし、而も其色灰白、灰褐、或は黃褐、赤褐を呈し、極めて稀に稚松の點々たる樣、哀れにも亦淋しくもある。

山の麓、山の懷、遠く眺めて、恰も松茸の累々たるが如くあるは、これぞ都會地ならぬ田舍に於ける鮮人の家屋である。隆圓狀の屋根を、鳥羽樣の藁で葺き、其上に網形式に繩を掛け、古びたる暗灰色、而も割合に家屋の密集せる有樣は、如何にも大地を破りて現れ出でたる松茸さながらである。

凡て田舍鮮人の家屋は、入口甚だ狹く、窓も亦甚だ少いのは、溫突暖室の關係によるとの事である。斯る松茸式の軒頭に閃く日の丸の旗を、山の隈にも川の畔にも、沿道普く見受けたことは、東宮殿下御成婚奉祝の表徵として、嬉しく感じた。

鮮內三大市場の一として著れた大邱（ダイキウ）や、鮮內有數の農產地として長大足の發展を成した大田（ダイデン）など數十驛を過ぎ、京城に着いたのは、午後七時であつた。

京城驛に下車するや、直ちに釜山驛で交附された特別切符を係員に提示し、金剛山入に關する自動車運轉期間の件を質問したが、此處でも亦不明である。朝鮮首都の驛でもあり、而も金剛山には程遠からぬ當驛でさへ、尙此の始末、實に驚き入つた次第である。「何れ明日夕方御伺ひしますから、能く照會して置いて下さい、自動車が運轉するならば、四日午後一時、平康から長安寺までの乘車豫約申込み置き下さい」と賴み置き、驛前の二見旅館（篠塚タマ）に投宿した。

但滿鐵京城管理局は龍山に在るのである。

釜山から、汽車中予と向き合つて着席した、京城第二高等普通學校敎諭宇多川寬道といふ人がある。種々鮮內の情況を話され、參考となることが多かつた。二見旅館に宿つたのは、驛に近くて交涉の便

があるからでもあるが、又一には氏の推選にも基いたのであつた。館側の明き地に「二見旅館新築所」と書いた木標が見えた、近々大改築するとのことである。

二見旅館は、設備可なり整ひ、主婦始め番頭女中等の氣風も良く、頗る居心地の好い旅館であつた。女中や店員には、鮮人も使つてあるが、其服裝や言語など、毫も內地人と、區別が附かない程である、本館は茶代廢止である。

晩餐後附近を散歩し、山入準備として、罐詰、干葡萄、氷砂糖、菓子など購ひ、停車場構內の賣店にて、繪葉書や切手を求めた。此處で震災以前の調製にかゝる一錢五厘切手帳數冊を手に入れたのは意外の獲物であつた。

夜に入り、自動車といはず、電車といはず、日の丸の旗を交叉し、イルミネーションの花彩など施し、夜景の美觀は、晝間に優る實に數等であつた。萬歲仁和賀には、內地人は言ふも更なり、鮮人も打混り、老若男女思ひ思ひの扮裝も面白く、朝鮮名物の妓生連など、予が旅館の前で、歌舞を演じた。御成婚奉祝の餘慶を、復々此處で味つたのであつた。

二、京　城

六月三日　快晴。溫度、朝京城七〇、正午八五、夕京城七八。

此日午前は、總督府を訪ひ、金剛山入に關する便宜を受け、午後は、京城市內見學の豫定である。

總督府は、南山の中腹倭城臺にある。倭城の名は、文祿の役、增田長盛陣營の因から起つたのだと傳へてゐる。

朝の八時、二見館前から電車に乘り、黃金町通商品陳列館前で下車し、總督府に至り、守備嚴重な門衞を通り、受附所に於て、亦周到な警戒に接した。學務課視學官文學博士高橋亨氏に面會を求め、

同氏父君からの添書を示したので、俄かに鄭重な接待を受けた。震災以後、一部鮮人中には、特に不穩の行動を企つるものがあるので、斯くも警戒嚴密を極むるのである。

高橋氏は、公用を以て、咸鏡地方へ出張され、昨日歸府の筈ではあるが、未だ登廳されぬといふので、社會課調査係細川貞之丞氏に面會した。

高橋氏は、我鄕に近い長岡の出身で、朝鮮歷史の研究により、博士の學位を得、總督府に勤務すること十數年、鮮內事情には、至つて精しい人である。

細川氏には初對面ではあるが、いとも奇しき因緣を引いた人である、予は十五年前、北海道山巡りの途、眞狩岳（マクカリ）（蝦夷富士）を降り、室蘭新報社に氏を尋ねたことがある。予が敎へ子であつた佐藤鑑治君が、仙臺師團に服務の際、文筆を以て氏と交り深かつた關係から、佐藤君の添書を以て氏を尋ねたのであるが、當時氏は、既に同社を辭し、諸國漫遊の途に就かれた後で、面會を得なかつたのである。今朝鮮總督府に於て、相會し、互に奇緣奇遇を感じた。氏は佐藤君から、十五年前の事情を述べ、我が先生であるから、極力便宜を圖り吳れよとの書柬に接し居たればとて、種々の參考圖書類を提供され、便宜を得しこと、實に多大であつた。

總督府で、細川氏から晝飯として蕎麥の饗を受けた。午後細川氏の案內で、市內を巡り、昌德宮、景福宮を拜觀した。

昌德宮は、現李王殿下の宮居となつてゐる。其昌慶園には、松樹櫻樹が多い、予が乘つた連絡汽船は、此名を取つたのである。

園內にて屢々鵲（カサギ）を見た、ギャーギャーといふ鳴聲喧しく、大さ烏位で、黑色の翅に白斑がある、尾が頗る長いので尾長鳥とも云つてある、烏よりも尙敏捷で、捕獲すること容易ではないと、細川氏は語られた。「鵲の渡せる橋に置く霜の」の歌は、百人一首中納言家持によつて、幼時から聽いてはゐたが、

鳥其物を見たのは、今回鮮地に入つて始めてである。

牽牛、織女の二星が相逢ふといふ七夕には、未婚の女子が星を拜し、裁縫機織の上達を祈るといふ風習、今尙鮮地には行はれ、此日鵲は、銀河に橋を架けやうとして、悉く上天すと言ひ傳へてある。「月明星稀烏鵲南飛」といふ曹孟德の短歌行に徵しても、支那には鵲の多いことが察せられる。

景福宮は、元との宮闕で、域內の博物館には、三韓時代に屬する發掘物の珍品、新羅佛像、高麗陶磁器、歷代の古物書畫等が陳列され、考古學者の好資料と思はれた。

景福宮の前面に當り、巍然として天を衝く樣な偉觀を呈せる大建築物は、總督府新廳舍であつて、今は殆ど完成した、工費は約三百九十萬圓とのことである。

京城は、舊漢城といつた、高勾麗王の子溫祚、北漢山に登り地を相し、百濟の國を創め、南漢山は百濟の都となること百二十餘年、世は新羅と變り、高麗と遷り、李成桂が此處に都を奠めてから五百二十餘年、成桂は實に朝鮮李朝の太祖である。當時石築の城郭は、高さ二丈八尺、周圍四里二十六町に亙り、九門を設けたのであつたが、今は唯南大門、東大門の二大樓門だけが殘つて、昔時の面影を偲ばしめる。

南山公園に立つて北望するに、白岳即ち北漢山は、稜々天を衝き、花崗岩より成れる山容、其白閃々たるは、實に白岳の名に背かない、本山は又紅葉美を以て著はれてゐる。

今の京城は、龍山を併合して、人口約二十六萬中、內地人約七萬、外人約三千あるが、內地人は主として東南部即ち停車場附近に、鮮人は鐘路通を中心として、北西部に集中發展しつゝある。

市內主なる道路は、アスファルトである。

午後四時頃二見館に歸つた、夕方停車場に行つて、金剛山行自動車の件を伺つた、「差支ない、乘車の豫約も申込んで置いた」との回答を得て、始めて安心した譯である。

三、京城より金剛山へ

六月四日　快晴。朝京城七〇、夕長安寺六〇。

山入の旅裝を整へ、細川氏の見送を受け、停車場に行つた、此處は元と南大門驛といつたが、今は京城驛と改めた。

驛名標を見るに、中央には太い漢字、右側は平假名、左側は鮮字（諺文）、下部は羅馬字といふ仲々厄介なものである。

驛の係員は、既に予を見覺えたことゝて、笑顔を以て迎へ、壯快なる予が金剛山入りを祝して吳れた。

汽車は、午前八時十五分、京城を發した、京元線の汽車は、龍山まで行き、此處から京釜線と別れるのである。

龍山郊外から、線路は暫く漢江の右岸に沿うた、江畔には、婦人少女が、白衣の洗濯に賑ひつゝある數十人の群を、此方にも彼方にも見た。到る處の小流細溪、此種の景況に接することは、鮮地特色の一つであらねばならぬ。

清凉里驛には、楊柳の並木が多い、其鮮かな綠は、地名に相應しい感じがする。驛前には、大學新舍が、巍然として目に着く。

倉洞（ソウドウ）驛にて、左窗に當り、銀光燦然朝暉と相映發する雄姿を現すは、昨日京城で仰いだ北漢山である。

逍遙山麓にある東豆川驛から、全谷、漣川驛邊に亙り、碧流の屈曲、溪谷の靜觀、去來頻りである。山の綠、野の林が、始終目に入るのは、京釜沿線とは、光景の頗る異なるを感ずる。又野花にも

紅紫鮮かなアザミ、濃紫色のウツボグサ、ノハナシャウブ、其他イハフヂ、ニガナ、スミレ、タンポポ、コマツナギなどが瞥見された、此邊では、アカシヤの花が眞盛であるは、京釜沿線よりも、山地氣候の寒きを證してゐる。

草花を摘む少女の、萠黄や白の上衣に、黑や赤や又は萠黄の裳を着けたるが、綠樹の間に隱見する風致は、如何にも優しい。

京城發車の際には、內地人の乘客も、隨分多かつたが、北進するに從ひ、鮮人漸次其數を增し、遂には約九割をも占め、車中は白化して了つた。

偶大光里驛長同車して、逍遙山の紅葉美、三防驛附近の山水美、其他各種の參考資料を語つて吳れた。

峽谷を出で、茫々たる高地平原の中心である、鐵原驛に着いた、六萬餘町步の美田を開拓すべく、今や灌漑排水の大工事中である。

本驛は、金剛山水力電氣鐵道の起點であつて、金化、金城、昌道、新安、化川を經て、末輝里(マツキリ)及外金剛までにも、延長する計畫であるが、今金化までは、既に軌道の敷設を了つてゐる。此鐵道竣功の曉には、金剛山探勝者の利便は言ふまでもなく、荒草離々たる沿道地方の開發にも、甚大なる影響を及ぼすであらう。

金剛山入り自動車の發着驛である平康驛に下車したのは、十二時二十九分であつた。

京城驛から、豫め電話があつたのと、長い金剛杖を手にした予が旅裝の目立つので、驛員は早速予に向つて「昨日京城驛から金剛山行き自動車の豫約申込みは、貴下ですか」と質した。此處に下車した客は、數十人もあつたが、金剛山行は唯予の一人である、淋しい樣な又獨り自ら壯とする樣な、妙な感じも湧いた。

京城驛にも、本驛にも、金剛山案內繪圖の大々的揭標があつた。

午後一時自動車は平康驛を發した、內金剛の入口長安寺まで、路程三十五里强である、此自動車は滿鐵會社直營のことゝて、構造は頗る優良である。探勝期間每日一往復以上運轉してゐる。社外の自動車もあるが、賃金は不廉を免れぬ。終點長安寺までの乘客は、唯予の一人であつたが、發車間際に男子一人婦人一人乘車した、婦人は金化の手前にて下車したが、附近警官の家族らしい。

自動車は、人家稀少の廣野を走るのであるが、沿道には、彼方此方に田もあり畑もある。鮮人農夫が臥牛に伍して、自らも亦路傍に路身に休憩するもの、長煙管を銜へて橫臥するもの仰臥するもの、運轉手の警戒的一喝に接しても、頗る暢氣な態度であるは、如何にも鮮人式情調を發揮してゐるが一面には亦憫然たらざるを得ない。俚諺に朝鮮の三長といふことがある、鮮人の顏の長いこと、煙管の長いこと、氣の長いことである。成る程と首肯れる。

二時四十分、漢江の支流である大川に到着した。河畔には「一新橋」と題した橋詰の柱はあるが、橋は無い、昨年の水害後、まだ復舊工事を施さぬのである。川幅は約五十間もあり、深さも相當である。これまで川幅十間二十間位の小流には、自動車は客を載せたまゝ屢々涉つたのである、而も車軸までも沒して、飛沫四隣を拂ふ有樣、壯快でもあるが、亦不安の感もあつた。然し鮮地の河流は、概して花崗岩の分解から成つた砂礫である爲め、河床締りがあつて、泥濘車輪を埋む底の厄介は無かつたが、此處のは名に負ふ大川だけあつて、到底前例は履まれぬ。渡船を呼び、乘客も力を合せて、自動車を船に載せ、對岸に渡り着いた。對岸の橋詰に、「渡賃一人四錢、自動車往復五十錢、自轉車一錢」といふ警察署の揭示がある。河岸には巨大な柳も多く見えた、又信濃諏訪邊產の石板石に似た石材も多く積まれてあつた。

對岸は金城である。昌道では自動車は三十分も休んだ、大人も小兒も男も女も集ひ來り、珍らしげ

に乘客を見詰めてゐる、昌道は、平康から長安寺に至る路程の略中央に位置する。旅館には、內地人經營の昌道旅館がある、鮮人の旅館も多い、而も家屋の甚だ矮小なるにも似ず、皆「旅人宿營業」といふ大看板だけが目に着く。殊に沿道各所の旅館にも、普通人家にも、入口の柱や壁板などの數個所に、幅四五寸、高四尺位の白紙を貼り附け、墨黑々と吉祥的文句を書き附けてあるは、人目を引くのである。其文句には「立春大吉」「建陽多慶」「萬德圓滿」「不老長生」「積善有餘慶」「春滿乾坤福滿家」などあつたが、「愛君希道泰憂國願年豐」は頗る振つた方である。これは立春の日に書いて貼るのだといはれてゐる。

四時頃、西津江に架けた扶桑橋を渡つた、コンクリートの立派な構造で、長さは約七十間もあらう。平康から同乘した男は、化川で降りた、彼が車中で語る所によれば、明治四十三年韓國併合の當時當地方の警察事務に携はつたこと多年、後材木商となり、今此邊の河川工事に關係してゐるとのことである。

六時頃、左に「江原道種牛育場」といふ門標を見、自動車は幾十回か山腹を屈曲し、喘ぎつゝ登つた。運轉針路數寸を誤らば、左方は所謂千仞の壑、車も人も粉微塵。

海拔三千五百十五尺あるといふ墨坡嶺上に到れば、前面既に金剛連峯の英姿を拜し得るのである。漸次降り路となり、間もなく末輝里に着いた。

末輝里は、內金剛入口に於ける一小市街の形を成し、當地方物貨の集散地である。郊外金剛川に架けた金剛橋は、長さ約八十間、修築工事中なので、予は下車して假橋を渡り、自動車は遙か下流の淺瀨を涉り、頗る手間取つた。岸東に横はつた巨材に腰打かけて東望すれば、金剛氣分の愈迫れる感じがする。

昨年の水害にて、道路の缺壞や、小橋梁の修繕未了の所が多いので、下車數回を重ね、長淵里の小

部落を過ぎ、向仙橋を渡り、七時十五分、金剛山下の長安寺に着いた、末輝里から二里十三町である。長淵里には、高さ十五丈の大理石の五重古塔がある。彫刻精巧を極め、全山石刻美術の覇と稱せられてゐる、長淵里は即ち塔巨里である。

附近目に入つた植物には、オホミヤマバラ、テウセンウツギ、キンバウゲ、オホアザミ、ノハナシヤウブ等があつた。オホミヤマバラは鮮紅の花大きく、テウセンウツギは紫紅の色甚だ濃く、ノハナシヤウブは、濃紫色の小花を、七八寸の莖上に着けたる姿、甚だ可憐である。

此地には、滿鐵會社直營の長安寺ホテルがある、元と長安寺の一部を借りたのであつたが、今は長安寺から四町許下方、路の左手に、洋風の平屋建が新築中である、工事も略竣り、旅客の宿泊に應じてゐる。其宿泊料は、歐式米式の二樣がある、米式宿泊料は、一人一日七圓以上十四圓までの等級があり、朝晝夕の三食及入浴料も含んでゐる。歐式は、室料一人一日二圓以上六圓で、別に西洋料理の朝食一圓五十錢、晝食二圓、夕食二圓五十錢、外に入浴料五十錢を申受ける。又希望によつては、和食も料理し、日本室をも提供することゝなつてゐる。

又同社經營のバンガロー（貸別莊）五棟ありて、家族連れのものに賃貸しをする。

予は、長安寺ホテルの下方に隣れる內金剛旅館に投宿した。內地人の經營で、看板には宇土ハツとあつた、原籍は島原で、夫の人は、旅館營業や商用の爲め、始終末輝里の方に出張して居るとのことである。外に鮮人經營の旅館も、二三軒見えた、一泊一圓以下とのことである。

鮮人經營旅館の矮小なるは勿論であるが、予が宿つた內金剛旅館も亦頗る小規模で、客室は僅か五つである、而も皆滿員であつたが、主婦は特に予が爲に一室を明けたので、客は家人と雜魚寢をする有樣であつた、こは探勝の客ではなく、ホテルの工事監督員や、職工人夫の外に、附近の道路橋梁修築工事の爲に、多數の入込みがあつたのである。

予は節約主義として、此旅館に宿つたのであるが、二三泊の豫定であるので、若し情況不可なる場合には、ホテルに轉宿せんかと思つたが、宿の主婦が頗る氣も利いて居り、親切であつたので、轉宿の必要は無かつた、粗末ながら浴室もある。

予が投宿の後、自動車が二臺も來た、社營以外のものである、何れも皆道路難の歎聲を洩さぬは無い。予が乘つた自動車の如きも、三十五里强の路程中、三人客の內、一人降り又一人降り、殘るは唯予一人のみだ。金剛山宣傳主眼の社營であればこそだが、自動車本位では、到底算盤採れたものではない。「こんな道路の運轉手を勤めては、壽命が縮まる」とは、予を載せた運轉手君の正直な告白であつた。現今に於ける此道路が、如何に惡路であるといふよりも、寧ろ危險であることを感ずるのである。

偶面會した警官に、案內者の周旋を依賴した、其名刺に「淮陽警察署蘭谷警察官駐在所勤務、朝鮮總督府巡査、乾供太郎」とあつた、滋賀縣人だそうで、屢々予が宿に來訪し、便宜を與へられた懇情は、深く感謝する所である。

氏の談話によれば、昨年金剛山彙中で、虎兒二頭を獲たとのことである、加藤淸正によつて、幼少の頃から聽いてゐた、虎の本場だけあつて、今でも全く油斷はならぬ。

此旅館附近は、テウセンモミや、アカマツ、テウセンゴエフマツの森林相連り、巨幹天を衝き、枝葉空を蔽ひ、鬱々蒼々として、樹脂の香は鼻を襲ひ、淸流岩を嚙み雪を噴き、凉氣肌に迫り、既に仙境に入るの感じがする。此地海拔五百米である。

四、靈山金剛

1、緒論

區域、構成、景致、傳說、通路。

朝鮮の極北、滿洲の境上に於て、巍然として天を衝き、山巔千古の雪を戴き、紺碧の靈池を藏するものは白頭山である。白頭山は實に國境山岳の覇王である。

白頭山より一脈南に向ふもの、日本海岸に偏して縱走し、蔚山に達してゐる、所謂大白山脈にして、朝鮮の脊梁山脈である。脊梁山脈の中程、江原道の北部、咸鏡南道に接する所、奇峰峻巒の一大群がある、これぞ東洋第一の靈山、世界的の名山、金剛山である。

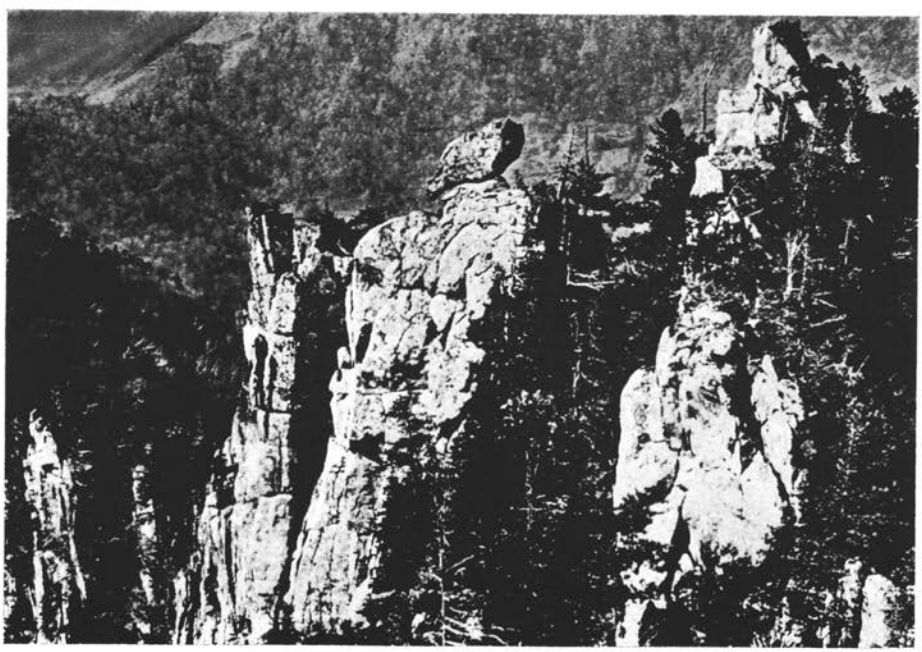
金剛山は、大約十里平方の地域を包括し、普通之を區分して、內金剛、外金剛、海金剛となしてゐる。即ち群峰の最高點毘盧峰（ビルホウ）を盟主とし、是より北に溫井嶺、玉女峰、柏田峰、南に日出峰、月出峰彌勒峰（ミロクホウ）、白馬峰、霧在嶺等、南北に亙れる脊梁分水脈を境界線とし、西側を內金剛といひ、東側を外金剛と稱し、又一支脈が日本海に沒する所、高城附近の海岸島嶼を海金剛と呼んでゐる。尙近來外金剛の一部を割き、赤壁江の支流百川江の上流、十二瀑附近を新金剛と唱へてゐる。

金剛山一帶の地域を構成する岩類は、太古界より新生界に亙り、可なり多くの種類を網羅してゐるが、內外金剛を形成する主要の岩石は、黑雲母花崗岩に屬し、外觀は極めて堅緻であるが、其石理割合に粗いので、比較的風化作用を受け易く、永年の侵蝕は、所謂神斧鬼鉞千態萬狀端倪すべからざる怪奇の山容岩體を現出し、峽谷を走る急湍は、瀑となり、潭となり、奇木翳し、珍草彩り、春花秋葉靑嵐白雪、四時可ならざるなく、實に造化の一大文章を提供し、雄大豪壯明麗淸淨の別天地を展開するのである。

山水美を以て天下に誇る金剛山は、又一面に於て、傳說美と建築美とを有する靈山である。

華嚴經に「東北海中金剛山あり、一萬二千峰曇無竭（ドンムカツ）菩薩常に其中に住す」とあり。三藏經に「八萬由旬一萬二千峰曇無竭常に其間に住す」と金剛山を說いてある。又印度月氏國から、五十三佛渡り來

内金剛長安寺　（二層造が大雄寶殿　遠景は釋迦峯）



内金剛望軍臺附近　（望軍臺頂上に近き岩　中央の奇岩は鷹岩）

て、九龍を逐ひ拂ひ、楡岾寺を創立したといふ傳說を存してゐる。

三韓時代には、內外金剛百八個寺の稱があつた位で、遠く支那印度方面から、巡禮者が來たらしい。其後屢々祝融の災に遭ひ、世故の變遷に伴つて、今日では僅かに往時の面影を存するのみではあるが、尙內金剛には、長安寺、表訓寺の巨刹、外金剛には、楡岾寺、神溪寺の大伽藍があり、其他幾多の末寺は、山中に點在し、塔石、佛像、什寶等、朝鮮美術の粹を觀察することが出來る。

金剛山には、涅槃山の別名がある、皆佛語から出たもので、堅固を意味し、不生不滅を意味する。

又金剛山は、四季風景の變化によつて、其特徵を意味すべく、種々の名を有する。金剛は全固有山名であると共に春季の名稱となり、夏は蓬萊、秋は楓嶽、冬は皆骨といふ雅號がある。標高を以てすれば、金剛山は、素より高山を以て誇るには足らぬ。陸地測量部の五萬分一圖によれば、連峰の最高點毘盧峰でさへ、海拔一六三八・二米、即ち五千四百餘尺である、山高きが故に貴からず、金剛の名山たる所以は、實に山容美、岩石美、溪流美、草木美に加ふるに、傳說美と建築美とであらねばならぬ。

名に負ふ一萬二千峰、金剛山の地域は頗る廣く、峰巒峻峭、溪谷複雜を極むるので、普く之を探るは容易な業でない、現今に於ける交通機關の狀態では、外金剛の探勝が、比較的便利であるので、短時日の探勝者は、此方面のみを擇ぶのが多い。予は出來得る限り、金剛全山に亙り、其優秀を探るべく、先づ內金剛に入り、內外金剛の分水界である內霧在嶺を越えて、外金剛に出る計畫を立てたのである。

滿鐵會社が提供せる、普通探勝旅程表には、內金剛のみの探勝ならば三日、外金剛のみならば五日、內外探勝を通じて七日間としてある。

2、長安寺より望軍臺へ

長安寺、明鏡臺、水簾洞、兜率庵、望軍臺上の壯觀。

六月五日　快晴。朝長安寺五三　夕同六五。

空には遠く杜鵑の一聲ならぬ二聲三聲鳴き渡り、梢には近く鶯のホー法華經を誦するを聽き、亭々聳ゆる樅の下、蹇々蟠れる松の傍、悠然逍遙曉氣を呑吐する、其爽快實に言ふべからずである。予は内金剛旅館に宿つて、早起散歩を試みた、當時の印象は、終生忘れることは出來ぬ。

林間や崖側に、テウセンコデマリ、テウセンシモツケ、ホソバオホリンダウ、オホミツバを見た、ホソバオホリンダウは高さ四五尺にも達し、リンダウ屬中、最大なること世界一と謂はれてゐる。

長安寺には、内地人で案内するものが無い。予が案内者は、乾巡査の周旋で、黄福天といふものを雇ふことにした。黄は日本語には練達してゐる。然るに黄は、昨日佛國武官とかいふ某氏を案内して黄泉洞方面に行つたのであるが、某氏は今日尚引續き、萬瀑洞（バンバクドウ）方面に案内を强要されるので、止むを得ず、自己の代理として、韓泰允といふものを伴ひ來て、予が承諾を求めた。韓は年齒二十二だと稱し、日本語には差支無いが、予が今日の日程である黄泉江方面には、一二回の經驗を有するも、安全を期し難いのと、名所傳説などの説明は、不可能だといふので、別に山内精通の老鮮人を同伴し、賃金は一人分で好いからと申し出たので、予も今日一日だけといふ條件の下に承諾してやつた。

此日予は、望軍臺上の展望が主眼である。

午前七時三十分、内金剛旅館を出發し、程なく雲住門を過ぎ、百川江（東金剛川）に架けた萬川橋を渡つた。橋長さ約三十間、清流に横はつた自然石を橋脚とした木橋で、此の仙境には相應しい構造である。雲住門の邊からは、綠濃かな圓覺峰を背景とした、長安寺の彩樓畫閣が、老松巨樅の間に隱見する。

萬水亭を右に、鐘樓を左に見て、水晶門を入ると梵王樓がある、額面には「金剛山長安寺」と題し、

柱掛には右に「臨濟圓宗」左に「第一伽藍」とある。

中央の大雄寶殿は、二層建の構造頗る壯麗を極め、瓦葺の屋根は、四隅が著しく反り上り、燦然たる碧檐朱楹や、殿外に夥しく相並べる柱掛の光景は、內地には見られぬ朝鮮味を感ずる。

大雄寶殿の柱掛は、ペンキの白地に、紺青の文字を註し、下部に蓮華の模樣がある。其字句を記すれば「如來智圓滿」「境界亦淸淨」「譬如大龍王」「普濟諸群生」「春山壘亂靑」「秋水漾虛碧」。他の樓閣の柱掛は、多くは白地に黑字であつた。柱掛は幅七八寸、長さ七八尺である。

殿前に植込んだ數株の牡丹は、花既に散りかゝり、芍藥の蕾は、まだ花瓣の色を見せぬ。紅花のウツギやオホミヤマバラが滿開であつた。

長安寺は、一千六百餘年前、新羅法興王の命により、眞表律師の創建にかゝり、金剛四大寺の一である。其後屢祝融の災にかゝり、法燈殆ど消えんとしたが、高麗の成宗、元の順帝の第二皇后奇氏の援助を得て、再興し、輪奐の美を極めた。然るに文祿の役、兵火にかゝり、久しく廢頽に委したが、李朝世祖の時、今の大雄寶殿を始め、六殿七閣一門を建てたのである。現に僧侶は、四十人許り居る。寺內の極樂殿は、元と滿鐵會社が改修してホテルとしたのであつた。

寺前に立てば、百川洞を隔てゝ、前面に鬱林の裾を纏へる長慶、十王、地藏、觀音、釋迦の怪巒奇峰が展開し、金剛山式を呈する。

長安寺を辭し、百川洞の左岸に沿うて上ること少時、右手の谷に入つた、此の溪流を黃泉江といつてゐる。

八時四十分、明鏡臺下に着いた、長安寺から約十町である。

明鏡臺は、矗立五丈餘の花崗岩である、扁平なる長方形は、宛然石碑の樣で、頂上には數點の矮松が見えた。岩面代赭色を帶び、橫に數條の節理はあるが、光澤を呈する平面は、天工の鏡とも謂ふべく、

影を玲瓏澄徹の深潭に蘸し、周圍は怪巒奇峰狹く相繞り、針葉闊葉の混淆樹林は、彌が上にも相茂り、眞に陰森の別天地である。黃泉江の水は、湛へて此處に深潭を作り、長徑十數間、岩床の色の爲にや水色著しく黃ばんでゐる、黃泉潭の名空しからずである。

潭に臨んで、其名の通りの龜岩と云ふのがある、長さは約十間もあらう。

潭の傍に、業鏡臺と云ふ岩石がある、地上に現はれた平面、直徑五間程の大さで、岩面に兩膝兩掌を載せた痕跡の樣な形がある、附近の岩面には文字の彫刻が多い。

此邊一帶は、地獄に象どられてゐるので、明鏡は、善惡を照す淨玻璃の鏡を意味し、黃泉江は、冥府の川を意味する。其他閻羅峰、十王峰、地獄門、牛頭峰、馬面峰、罪人峰、使者峰、判官峰、鬼王峰、童子峰等、明鏡臺を圍繞する山々は、皆此に因んだのである。

地獄門は、天眞峰の頂上にあつて、懸崖削壁より成る、門口は、罪人が空中から投げ入れられる所。十王峰は、陰霧靜寂の日、耳ヒ岩に當てれば、治罪の聲を聞くといふ樣な、それぞれの傳說を通辯韓君によつて、老鮮人から聽かされた。今も多くの鮮人達は、斯樣なことを信じてゐるらしい。此老鮮人は、黑々した倔强な男で、又能く辯じ、爽決流暢なアクセントは、英語會話を聞くの感じがした。

黃泉潭は、底深く冥土に通じてゐるとの傳說であるが、實は澄徹せる水底に、幾百千年の朽葉が黑く敷かれて、其深測り知るべからずといふ樣に見えるのだと、韓君は言つた、如何にも其通りである。

韓君は、平安北道の產である。中學を卒へたが、神經衰弱症にかゝり、一年餘の醫藥も其效が無いので、金剛山の靈境に於て、靜養せばやと思ひ立ち、此處に入つてから既に數ヶ月、今は餘程快方である。自分は案內營業者では無いから、無賃でお供したのである」などと告白し、行々自己の悲境を細かに物語つた。隨分淳朴の樣に見えた。

明鏡臺の裏、巨岩が兩方から食ひ合つて、天幕狀を作つた石門、所謂金剛門を通り拔けると岩壁に徑二尺許の深い穴が二つある、黃蛇窟、黑蛇窟といつて、亦傳說附きのものである。

附近に崩壞した石築の壁壘がある、一千年前、新羅敬順王が、高麗（王健）に降るに方り、麻衣太子慷慨に堪へず、部下を率ゐて此處に立籠り、山麓の邑民、之を擁護したと傳へてゐる。太子の乘馬が斃れて石に化したといふ馬頭石もある。石壘今は崩れ轉がり、朽木枯葉に埋もれて、葛羅纏綿し、唯縞栗鼠の枝から枝に飛び移るを見る。寂寥たる景致、轉た悽愴の感に打たれずには居られぬ。

古城址を辭し、尙も鬱蒼たる深林中を行けば、やがて岐路となる、「右靈源庵二十町」と註した標札がある。靈源庵は、靈源祖師が創立した修禪道場である。我等は左を取り、巨大の轉石累々たる溪流を縫ひつゝ進んだ。岩石は大體花崗岩であるが、往々靑綠色を帶びた古生層の岩塊もある、而も其形狀光澤の風致は、之を都會に持出さば、幾百千圓にも値するならんと思はれるのがある。

やがて思はず快哉を叫ばざるを得ぬ美觀が、行手に展開されてある。所謂水簾洞（スイレンドウ）である。時に十時三十分。

水簾洞は、瀑布としては傾斜餘りに緩かである、急湍としては水勢餘りに靜かである。銀白色を帶びた光澤ある花崗岩が、約四十度の傾斜面をなし、長さ十餘丈に亙り、溪一杯の一枚岩となつて、其岩面を纖々たる飛流が、而も極めて淺く擴がりつゝ、滑り滑つて深い瀧壺に落ち込んでゐる。瀧壺は可なり大きい、瀧の落口は、幅五六尺であるが、下部は漸次擴がり十數尺にも達してゐる、正に水晶簾を懸けた樣だ、水簾洞の名に背かずと首肯れる。瀧口に上つて見下せば、斜面を滑る水は波頭の樣な白紋を描きながら、遞次擴がり行き、龜岩と名くる巨岩の咽下に、奇しき音を立てゝ潛り落つる樣、更に亦一段の奇觀を感ずる。

瀧の落口には、自然に掘れた壺の樣な穴がある、口徑約三尺、深四尺許りである、流れ込んだ水は

始終渦を卷きつゝ溢れ落ちてゐる。此穴は洗頭盆と名け、昔時坐禪僧が頭を洗つた所だといふが、其中に數匹の蛙が居た、雨蛙程の大さで、背は非常に鮮かな濃い綠色に、多くの小黑點があり、腹は實に氣味惡きまでに鮮紅色を呈し、行動頗る遲鈍である。韓君捕へて瀧口に放てば、轉々綠紅を反復しながら、瀧壺に落ちて了つた。予は此種の蛙は、始めて見たのである。

瀧口の上に、餘り深くは無い一つの潭がある、其上方數十間に亙つて、緩かな勾配の岩床面を、淙淙たる音立てながら、白龍の樣な流水が、此潭に向つて落ちこんでゐる、陰林の裡、此溪流の上方だけが、僅かに明るく見える。

鳧峰（フホウ）の頂上に、鳧（カモ）が黃泉江に魚を窺ふの狀をなした岩がある、此鳧の爲め、此處より上流には、魚が棲み得ぬとの傳說がある。岩壁に「水簾洞」の大文字が刻まれてゐる。

崖側には、オホヤマレンゲが多い、綠滴る葉陰に、紅蕋白瓣を裝ひ、馥郁たる淸香は、吾人を襲うて、恍然脫俗の思あらしめる。

雪をも欺くオホヤマレンゲの純白に對照して、淡紅瀟洒たるクロフネツヽジも亦夥しい。又オホヤマレンゲやクロフネツヽジの大花なるに引き替へ、小花穗狀をなせる薄紫のテウセンライラックがある。而も瀧に翳して幽香を送る風情亦棄て難い。

樹木は、テウセンモミ、タウシラベ、アカマツ、テウセンゴエフマツなどの針葉樹、エンジユ、コナラ、ミヅナラ、アカシデ、ヤマザクラ、マンシウカヘデ、イタヤカヘデなどの闊葉樹がある。殊に水簾洞上楓樹の蔽ひ翳せる樣、錦繡織り成す紅葉期の美觀も想ひやられる。

明鏡臺附近から、水簾洞附近に亙つての原始的密林は、金剛山中に於ける、幽邃の極致といはれてゐる。

其他目に入つた植物には、シロシヤクナゲ、テウセンウツギ、テウセンハギ、テウセンコデマリ、

テウセンキンレイクワ、ヤマヲダマキ、ハルリンダウ、キケマン、ミツバハンショウヅル、コギバウシユ、オホサクラサウ、モリトリカブト、クロクモサウ等がある。コオニユリ、テウセンクルマユリは蕾尚固く、ウハミヅザクラはまだ花を存してあつた。

韓君は、シナノキの皮を剝ぎ取り、草鞋（鮮式）の修繕をした。

水簾洞の溪谷の奥に、百塔洞がある、洞中には、人工に成れる樣な自然石が羅列し、或は傘を立てた形を成し、或は竹筍の如く、或は石上更に石を戴き、五層乃至三十層の塔形をなし、所謂石林は、大小參差怪奇を極めてゐるが、徑路が頗る險惡なので、其探勝には、特に一日を費さねばならぬさうである。

我等は、內金剛第一の展望臺と稱せられてゐる望軍臺に登るべく、左手の崖側を辿つた、道の形とては殆ど無く、登るに從ひ、益嶮峻を加へ、或は藤蔓に縋り、或は自然の石階もあり、根段もあり、或は僅かに鉈にて足懸りの橫目を設けた獨木梯もある。足音に驚いて、逃げ出す雉の子もあつたが、まだ飛翔する程には、翅が伸びない。遠くには郭公の鳴聲も聞えた。

やがて兜率庵（トソツ）といふ廢寺に着いた、二間五間程の小庵である。年若い一人の僧が見えた、聞けば、修道の爲め、秋まで居るとのことである。長安寺から約三里の險路、而も海拔四千尺に位する無人の境を求めて、修道三昧に入るとは、唯々感心の外はない。糧食の運搬至難であれば、山草岩苔は、彼の命を維ぐ、好個の補助的食品であらねばならぬ。兜率庵は、長安寺の末寺である。

庵側の岩間からは、滾々涌き出づる清冽無比な金剛水がある。時計を探れば、十一時三十分であるので、修道僧に請ふて、庵內に休憩し、携帶せる團飯をしたゝめた、庵內は床板無く、唯一面に厚く青草を敷き込んだだけであつた。

修道の若僧は、こゝに起臥し、彼の清泉を唯一の飲料とし、多くは冷食であるといつてゐる、近頃

生水飲用强健法など、唱道するものあるが、深山修道の僧侶達は、既に遠き昔からの實行者である。屹とした尖峰の天界、花崗岩罅から涌き出づる、此處の冷泉こそ、生水飲用唱道者に取つては、眞に理想的純潔な靈水であらねばならぬ。

黄泉洞に入つてから、鬱々森々晝尙暗き密林の下、千古の朽木枯葉を踏んで來たのであるが、此處に登つて、眼界漸く開け、仰げば望軍臺の頂上は、近く手に取る許りである。

黄色なクサノヲウ、タンポヽの花や、黄褐色のヤマヲダマキの花が、庵前に咲き出でたる樣、聊か閑境の修道僧を慰むるに足らうか。彼方此方には、七葉乃至十葉を輻射狀に擴げた、テウセンクルマユリも見えたが、蕾はまだ餘程小さい。

兜率庵以上は、徑の形は勿論無く、益險阻を極めてゐるので、邪魔になる金剛杖や、手荷物などは庵に託して出發した。

テウセンハギ、テウセンウツギ、クロフネツヽジの今を盛りと咲き亂れた急崖を攀ぢ登ると、削つた樣な絶壁に、二層の鐵鎖が垂れてある。一は百尺、一は五十尺許り、外金剛新萬物相（シンバンブツサウ）の鐵鎖と共に全山中の名物難所となつてゐる。我鄕國の八海山（ハッカイザン）や、奥羽の湯殿山（ユドノサン）などの鐵鎖は、太くて且つ啞鈴狀の連續であるから、握るには甚だ便利であるが、此處のは一本の針金か、若くは二本の針金の綯り合せで、所々に結び玉がある位だから、强く握り締めた掌裡は、赤くもなれば痛くもあつた。

龍角（リュウカク）と稱する尖つた岩上に登つた、眼界益々開け、四周の奇岩怪石、眼も覺むるばかりだ。近く鷹岩といふのがある、鋭き眼で、水簾洞上の鳶岩を瞰下してゐる。其威壓的な狀態に因んだ傳說は斯うである、黄泉江に棲息する魚屬を、水簾洞上の鳶が、漁り盡さうとするので、佛の使鳥となつて來た鷹が、其殺生を戒め嚇すのだといふのである。

望軍臺は、咫尺の間に迫つてゐる。龍角から、臺上の一巨岩を仰ぎ見ると、餘りに雛の形其まゝで

あるので、雛岩と呼んである。予は寧ろ雷鳥岩と名けたい、靈山高峰には、それが相應しいからである。然し予は、金剛全山跋渉中、雷鳥は遂に認め得なかつたのである。

岩角に蝸附したり、岩から岩に猿飛びしたり、所謂輕業式藝當を演じて、望軍臺上天風に呼號することが出來た、時に十二時四十分。

幾千萬年の風化により、稜角を失つた巨大な花崗岩が、突兀として重なるもの四五。最高の岩上は、僅かに數人が坐し得るだけの廣さであるが、能く登り得るものは、甚だ少いといはれてゐる。予は韓君の手傳により、最高點上更に五尺二寸の高さを加へたのである、岩面には、登客姓名の彫刻もある。

五萬分一圖によれば、標高一三三一米即ち四千三百九十二尺强である。

新羅太子、數萬の敵軍に追はれて、靈源洞に避け、此の峰頭に登つて、敵の動作を望見し、其隙を攻めて、大捷を贏ち得たとの傳說がある。望軍臺の名は、之に基くといつてゐる。

臺上から望めば、峰々谷々は脚下に展開し、天工の美術は、到底人工藝術の企及を許さぬ。近く繞れる岩嶂は、千古の白苔を裝ひ、石筍の如く、劍戟の如く、怪を競ひ奇を爭うて相駢び、遠くは內外金剛の分水界上に帝座を占むる毘盧峰を始とし、北に永郎峰、凌虛峰、南に月出、日出、遮日、彌勒、白馬の諸峰。或は綠に、或は紫褐色に、銀白色に、虛空を劃して聳え立ち、雄大莊嚴の光景、正に內金剛第一である。西方峰巒の間からは、末輝里郊外、自動車の通路が明に見え、新羅太子が當年のことも偲ばれる。

岩嶂を飾れる樹木には、タウシラベ、テウセンマツ、トショウ、ニホヒネズコなどあるが、谷間にはナラ、カヘデ、シラカバなど、茂りに茂る新綠の鮮かさを瞰下す、其爽快な氣持は、實に喩ふるに物なく、秋季紅葉の美觀も亦想はれる。

頂上岩壁に、ヒメアヤメ、テウセンキンレイクワ、ゲンカイツヽジを見た。ヒメアヤメは本山の珍

品とする所、三四寸の莖上に、菫紫色の一花を着ける。予は此種のアヤメを、雪地に於ては、獨り九州の由布岳にのみ認めたのであるが、本山のは、全體更に矮小、玄綠な叢葉は、細くして石菖の如く、清瘦な花蓋は、極めて濃菫紫色を呈し、其氣品優雅高尙なること、彼は到底此に比すべくもない。殊に彼は火山砂土に生じ、芝草と相伍するに對し、此は千古の白苔蒸す花崗岩壁の裂罅に宿る、正に神仙の彩管に成つた、白銀屏風を展開する觀がある。テウセンキンレイクワは、ハクサンキンレイクワ（白山女郎花）に比すれば、是亦著しく矮小、葉は厚く、花冠割合に大きく、萼色も濃い。ゲンカイツヽジは、花容コメツヽジよりは稍大きく、九雄蕋長く、頗る濃紫紅色を呈する。普通アヤメの類は、稍陰濕の地に生ずるものであるが、由布岳のは、山腹向陽の火山砂礫乾燥地に蔓衍するさへ、既に異數の感があつたが、殊に本山のは、高空の絕巔、向陽の花崗岩面殆ど土氣無き所に生ずるは、靈奇の感に堪へぬ。想ふに本山は、雲霧の去來頻繁であるから、所謂雲衣霧餐の仙草と謂ふべきか。

此日は、非常な快晴であるので、花崗岩壁の銀白、谷間の鮮綠は、幾入の明麗さを呈したのであらう。

最高岩上に胡坐し、予が携帶した乾葡萄や、氷砂糖など、案內者に分配し、望軍臺上、望景三昧の境に入つたのである。

午後一時四十分、望軍臺上を辭し、水簾洞上に降り着いたのは、二時五十分であつた。

瀑上數十丈に峙り立つ花崗岩壁をば、點々たる朝鮮松の矮樹之を彩どり、岩面は日光に映じ、朝觀た時に比すれば、更に幾段の銀白を加へた、又前には氣附かぬマンシウカヘデの若芽が著しく紅褐色であるのが目に入つたが、これも日光照射の關係であつた。

四時十分、明鏡臺に降り、同三十分長安寺に歸着した。此時佛國武官の萬瀑洞から歸つて來たのに逢つた、後に案內黃の語る所によれば、昨日此武官は、水簾洞だけで、引返したとのことである。

望軍臺の嶮は、大抵のものは、辟易するであらう。

予は、今朝、記念帖に寺印を得べく、執事所を尋ねたのであつたが、住職不在の爲め、歸りにといふことにした。歸着の際、住職は偶來訪の役人と會話中であるとて、復其意を得ず、內金剛旅館に歸り、晩餐後再び出かけたが、來客尙去らぬので、待つこと一時間許り、漸く捺印を受け、夕闇を衝いて旅館に歸つた、寺でも予が根氣には、餘程感じたらしい。住職から貰つた名刺に「長安寺住持玄懿龍」とあつた。

又乾巡査の周旋により、金剛杖に本山の記念燒印も受けた、これで予が金剛杖は、名實共に眞正の金剛杖となつたのである。

案內料支拂に當り、一場の紛議が起きた、當時長安寺に於ける警察署の定めには、案內者である內地人は一日二圓、鮮人は一圓五十錢、宿泊の際は、案內者の食費は、雇主の負擔となつてゐるので、これは乾巡査から聞いてあつた。然るに予が望軍臺から、內金剛旅館に歸つた時、翌日から予が案內者となる約定の黃福天も來た、韓奉允君と附近鮮人旅館に同宿してゐるのであつた。黃は案內料に對し內地人同樣二圓說を主張した。旅館の主婦は、巡査さんの命令通り、一圓五十錢でなければならぬと諭した。黃は外金剛溫井里では、鮮人でも二圓であるからと引證した。主婦は溫井里と當地の生活程度が違ふからと辯駁し、不當の請求をしてはならぬと、予が爲めに頗る盡すのであつた。韓君は、唯予が思召で好いと言つてゐる。予は、內地山岳の案內料に比すれば、二圓としても、尙甚だ少額であるとは思つたけれど、警察の定めに頓着無く支給するは、累を後客に及ぼすの憂ありと考へ、老鮮人の案內者には一圓五十錢、案內無料と申込んだ韓君が、通辯並に懇切な世話に對し、別に慰勞として一圓五十錢を添へ、內譯分配は適宜にすること。翌日からの黃君の料金は、迷惑にならぬ樣、予にも考があるから、委せよといふことにして、段落を告げた。

黄福天は、木浦の產、年齒三十、曾て芝浦製作所に入つたこともあり、郵船會社の船員となつて、南洋に行つたこともあるといふ男で、日本語にも、內地の事情にも通じ、又頗る才幹もある。後日予を案內する途中、機を見て又も此案內料金の件を持出し、「日本政府が國際聯盟に人種平等論を主張するといふ時代に、此處の警察署が、同一の案內料に、內地人鮮人の差別取扱をなすは、矛盾ではないか」などと氣焰を吐いた。又毘盧峰の高さは、一萬六千三百八十二尺であるのに、內地の富士山は、一萬二千五百尺だといふから、毘盧峰の方が餘程高いなどと辯じたので、予が携帶の五萬分一圖を示し、「毘盧峰の所に記入されてあるのは、米突であつて、一六三八・二とある、君は單位の點を知らないのだ、富士山を米突で示せば、三七七八であるから、單に高さだけを言ふなら、本山はとても比較にはならない」など、予が各地實驗上の山岳美論を聽かされてからは、餘程態度が改つた。此男、通常の探勝客には、隨分自負的牽强附會の說を述べるであらうと想はれる。

當時內金剛には、案內に從事する內地人は無かつた、又鮮人案內者で、內地語に通ずるものは、極めて少い、殊に外金剛まで、繼續案內し得る者は、尙更少いのであつた。

本山の繪葉書や、圖書の販賣品も、此月の中旬頃には、到着するとのことであつた。

內金剛旅館の宿料は、三圓（外に晝食辨當料四十錢）であつたが、魚肉の刺身や、牛肉鷄肉などの料理もあり、晩餐には二ノ膳に、屢々支那料理の饂飩を大丼に盛つて添へるなど、餘程注意を拂つたのであるが、乾巡査の內意もあつたとのことである。

予は此旅館で、金剛山の靈域には相應しい岩茸を始めて試みた。又此旅館の膳に、「大峰山名物行者箸」と銘打つた白木箸の添へてあつたのは、今回旅行に、大峰山を跋涉し來た予には、少からぬ興味を惹き起さしめた。

附近散步の際、「內金剛特產燒酒製造家」とか、「理髮諸氏御來臨」とか、「內裁縫針所」などと書いた

看板が目に入つた。偶予が上衣の綻びあるのに氣附き、早速内裁縫針所の宅に就き、朝鮮婦人の手藝を求めた。言葉が通ぜぬので、五錢白銅二個を出したら、彼は其一個を取つて、滿足の意を表した。

燒酒とは、燒酎のことであらうが、飲酒無用の予は、試みる氣も無かつた。

3、長安寺より摩訶衍庵へ

表訓寺、正陽寺展望樓、萬瀑八潭、普德窟、摩訶衍庵。

六月六日　快晴。朝長安寺五八、夕摩訶衍五八。

昨日數回の往復にて、内金剛旅館の上方、二町許りの右手路傍に、清澄なる小溪水があり、岩塊の配置、水浴に可なるを認め置いたので、今日は例により、早起足馴らしの練習を兼ねて散歩し、全身の冷水摩擦を行つた。冷水摩擦は、予が平素數十年來の繼續であるが、深山溪流に於ける此快味は、實驗者に非れば、とても想像は出來ぬ。予は明治三十九年八月、針木峠露營の際、高頭式氏と共に、雪水の溪流に投じて行水した、當時の快味を常に想ひ起すのである。

水浴後、鶯鳥の奏樂を聽きつゝ、林中を逍遥すること數十分、昨日記念印の件により、屢々面會した若僧にも逢つた。

午前八時、内金剛旅館を出發し、長安寺に立寄つた。屋外には、高さ二三尺大小種々の甕が數十個並んで居る、味噌、醬油、漬物などを藏するのである。

長安寺から、百川洞の右岸に沿うて、緩かな道を上つた、路傍に黄花白花のタンポヽが咲き亂れてゐる。韓君は、昨日の謝意を表し、此處まで予を見送つた。

數町にして鳴淵潭がある、潭は即ち瀧壺で、百川洞の流れが、一丈許りの瀧となつて抉り掘つたので長徑約十間もある。潭中に巨岩が斜めに横はり、其岩に對し、丁字形に三個の小岩が列んでゐる。昔高麗の金同居士が、表訓寺の懶翁（ナンオウ）祖師と、佛像の彫刻で技を競べ、負けた方が自殺するといふ約束

した、居士の仕上げが三日遅れたので、約束通り、此潭に投じて自殺した。居士の三人の子供は、父の死を聞いて、外金剛から駈け戻り、悲哀の餘り、亦潭に投じて死んだ。其夜此潭から、俄かに恐ろしい唸(ウナ)りを生じ、金剛全山は、覆へる樣な鳴動がした。翌朝懶翁は急に熱病で死んだ。鳴淵潭の名は之より起り、大なる岩は金同居士、小なる三岩は三兒の化石であると、鮮人達は眞面目に傳へてゐる。本山各所に偉大な功績を殘した、懶翁祖師に對しては、餘り芳ばしからぬ口碑である。

迎仙橋を渡れば、三佛巖がある、高さ二丈餘もある巨岩の中央から梨割りとし、道の左右に門柱として置いたかの樣である。其一方に「三佛巖」と題し、丈餘の三佛像が彫られ、裏面に六十二體の小佛像が刻まれてある。三佛像は、李朝の初期、懶翁祖師、小佛像は、金同居士の作だといふが、何れも皆極めて荒削りの手法である。相對する一方の岩面には「表訓洞天」の大字、其他無數の語句や、姓名が刻まれてゐる。

一町許りにして、右手に白華庵の廢址があつて、數個の舍利塔を存する、塔の高さは五六尺位、釣鐘を伏せた樣な形をなし、唐草模樣があつて、構造頗る古雅精致を呈する。庵は三百年前、西山大師の創建にかゝり、藏する所の懶翁、清虛（西山大師）、惟政の畫像は、舍利塔と共に、著はれてゐる。以前本庵には、探勝客の宿所として、表訓寺ホテルを設けたのであつたが、大正四年溫突から火を發して燒失したさうである。

惟政は、姓は任、松雲と號し、賜禪號を四瞑大師といひ、文祿の役、清虛と共に僧兵を率ゐ、義を唱へて各所に轉戰し、蔚山の陣地に、加藤清正と會見し、後海を渡りて、豐太閤と交渉するなど、大に國事に奔走した人で、外金剛の楡岾(ユテン)寺は、彼が晩年修道した所であるとのことである。

舍利塔は、西山以下の墓である。

含影(ガンエイ)橋を渡れば、表訓寺である。時に九時十五分。

橋畔には、凌波樓がある、正門には「表訓寺」と題した額がある。

表訓寺は、一千二百五十年前、新羅文武王の十年、表訓祖師の創建にかゝり、李朝世祖之を重修した。金剛四大寺の一に數へられ、內金剛では、長安寺に亞ぐ大刹である。現在僧侶は四十餘人も居る。

本堂を般若寶殿といひ、丈六の金身法起菩薩を以て著はれてゐる。殿前の柱掛には「上界法雲來四衆」、「諸天花雨澄三飯」、「妙舌與青蓮同燦」、「無生妙諦度津梁」など書いてあつた。

樓閣は、右に左に續いてあるが、「開楓迎賓館」と題した高樓は人目を引く。

本堂の前には、黃花の木香薔薇の一品と、紅花の朝鮮空木（ウツギ）が、滿開であつた。

偶乾巡査の巡廻に接し、共に住職に面會し、記念帖に寺印を受けた。住職から貰つた名刺には「表訓寺住持金明旿」とあつた。

境內近く後に靑鶴峰を負ひ、前は百川洞を隔てて、五仙、七星、法起の諸峰、東北に重疊し、頗る好位置を占めてゐる。されど迎仙橋以來約三町に亙り、殆ど坦々たる平地である爲か、山奥に入りながら、長安寺よりも却て靜境の感じが薄い。

寺の後庭を出で、羊腸たる急坂、闊葉樹林の中を上る約八町、放光臺の山腹に正陽寺がある。海拔二千七百餘尺の高地とて、眼界は俄かに開ける。昨日望軍臺上から、本寺の屋根瓦が、日光に反射したのが見えた。

林下には、シロバナヤマブキ、シロバナウツギ、ムラサキケマン、クサノワウ、タカサゴサウ、バイケイサウ、モリトリカブト、ヤマヲダマキ、クルマユリなどが見えた、太いトグサが隨分多い。寺內の八角堂には、丈餘の石佛藥師が安置され、殿堂の丹碧燦として眩く、「藥師殿」と題した額を揭げ、堂の側面に、白象が彫刻されてある。堂前に、九層の古石塔がある、新羅時代の作、古色蒼然掬すべく、塔巨里の古塔、外金剛神溪寺の古塔と共に、金剛山中の三古塔として、著名な逸品である。

境内には、觀山の好位置として著れた歇惺樓がある、欄に凭り展望すれば、廣闊な深谷を隔てゝ、内金剛の峰巒は重疊し、遠きは淡く、近きは濃く、綠鮮かな密林は、溪谷を埋め、正に一幅の繪卷物を展開した觀がある。

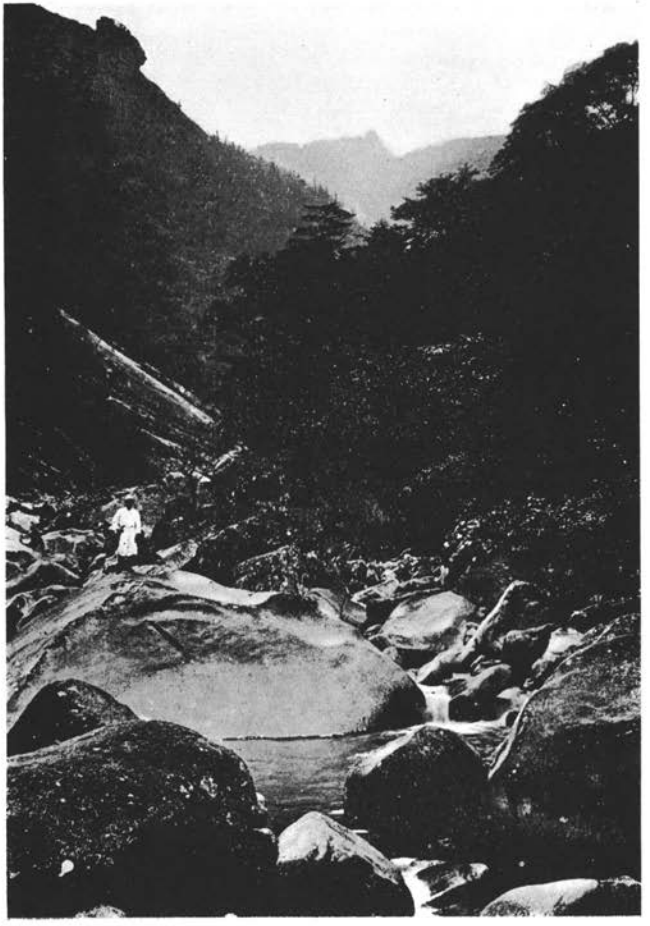
視界に入る峰巒は、永郎峯、毘盧峰、月出峰、日出峰、内霧在嶺、遮日峰、彌勒峰、白馬峰、龍虎峰等を外郭とし、其内部には、衆香城、白雲臺、法起峰、望軍臺、釋迦峰、地藏峰、十王峰、觀音峰、長慶峰等、波濤の如く重疊し、近くは香爐峯、青鶴峰、五仙峰、七星峰等、脚下に侍するのである。

凡ての山々は、皆其麓に、山腹に、或は胸に肩に、針葉闊葉の濃き淡き密林を裝へる樣、正に皓衣玄裳の觀がある。中にも最も人目を引くは、ピラミッド式の尖頭鋭く碧空に朝する白馬峰（一五一〇米）である、而も峰頭の著しく銀白な花崗岩を現ずるは、其名に背かずと首肯れる。

歇惺樓は、古來觀山の好位置を以て、知られてゐるだけ、視界に入る大景は、決して凡では無いが、之を望軍臺や、外金剛の玉女峰や、殊に内外金剛の覇王たる毘盧峰絶巔の展望に比すれば、標高が遙かに低いのと、四周の關係とで、其光景に於て、雄大壯嚴の感じが薄いのは、素より止むを得ぬ。唯此處は、經路も近く、上るには容易なので、苦勞せずに金剛の大觀に接せんと欲するものには、絶好の位置と謂はねばならぬ。我等が觀望中、内地人十人許りの探勝團體が上つて來たが、中には妙齡の婦女子も加はつてゐた。

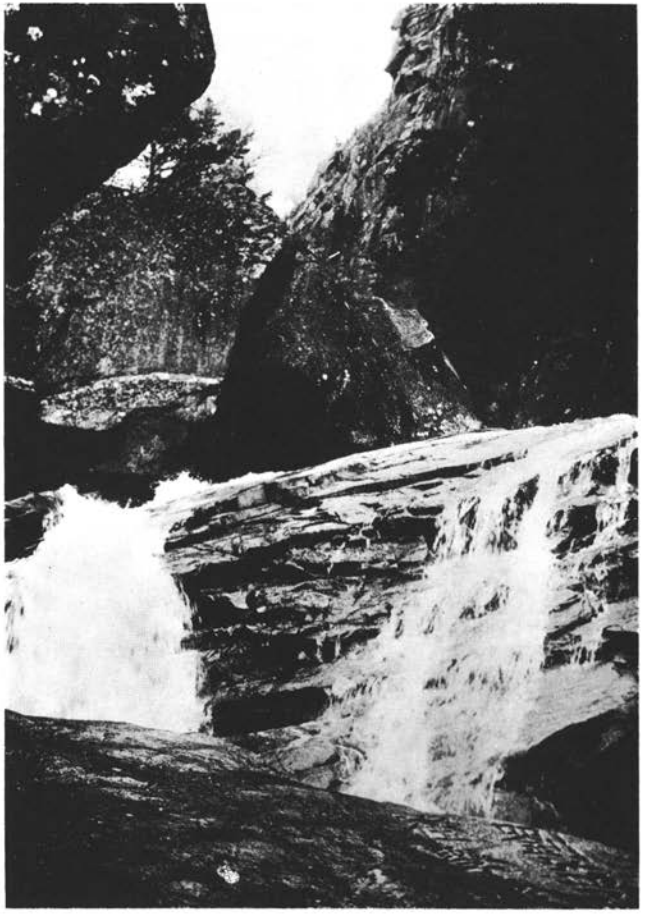
此歇惺樓には、西洋式の指峰臺がある、臺上に約四十程の山の名と、高さと、位置とを、圓錐形の木材で示してある、それは天井から垂れた一條の絲と、圓錐形とを、一直線に見通すと、其延長視點に當るものが、實物の山であるから、一々案内者の說明を待つ必要がない。

正陽寺に上つたのは、十時であつたが、携帶した菓子を食べながら、觀望に耽ること約三十分、降りには半駈足を以て、表訓寺まで引返し、再び百川洞に沿うて遡れば、金剛門がある、約十間もある



外金剛玉流渓の一部

正面中央に遠く見ゆるは彩霞峯



内金剛萬瀑洞噴雪潭

岩面に文字の彫刻彫しく見ゆ

巨大な二個の岩塊が、左右から倚り掛つて出來た自然の石門で、潜れば命が長くなると傳へてある。門を潜れば、有名な萬瀑洞（バンバクドウ）である。時に十一時であつた。

百川江は、毘盧峰と內霧在嶺から發する諸水の合流から成り、摩訶衍（マカイン）臺下に至り、法起峰麓の岩石に堰かれ、忽ち龍攘虎搏の勢を示し、懸りては瀑となり、湛へては潭となる。延長約十五町の間、所謂萬瀑八潭の奇勝を現出し、全金剛溪流美第一を以て推賞されてゐる。

兩岸は數百尺の懸崖をなし、清冽珠の如き溪水は、幾百千年の流摩作用によつて、磨き上げられた光澤ある白き花崗岩を傳はり奔流し、飛躍し、落ちては轟磕の響山谷を撼かし、忽ちにして深潭碧を湛へ、靜かなること鏡の樣である。欝蒼たる樹林は、溪谷を蔽ひ、濃き淡き青葉が玲瓏たる水石の美と、相映ずるの景致は、更に又錦繡織り成す秋の美觀を偲ばしむるのである。

樹木には、カヘデ、イタヤカヘデ、ナラ、シラカバ、ヤマハンノキ、アカシデ、ヤマザクラ等多く、アカマツ、テウセンマツ、モミ等が、其間に混つてゐる。

イタヤカヘデの秋季に於ける黃葉は、言ふまでもない。シラカバの黃葉は、之に比すれば稍淡いが明るい鮮か味は、寧ろ優つてゐる、而も御園白粉のそれにも優る銀白の幹枝と相待つては、山色情趣を深からしめる。此等の濃き淡き黃葉と、カヘデやアカシデ、ヤマザクラの紅葉、橙紅葉と、ナラの紅褐色と、とりどりに相錯綜し、針葉樹の深綠と相映發するは、此峽谷の水石美を更に大に美化する資料である。

萬瀑洞の景致は、雄大である、水簾洞に比すれば、峽谷は廣い、水量は幾倍多い、殊に峽谷一帶を構成する花崗岩は、兩岸の絕壁より河床に亙り、更に幾尋の深さを有する碧潭の底に至るまで、一大磐石の連續から出來てゐることは、此溪流美觀の主要點である。黃泉江の水色は、幾分黃ばんで見えるだけ、其岩石は一種陰晦の感じもするが、此處の溪水は、飽くまでも清澄透徹、從て岩石亦鮮かに

白い。溪間往々堆積した砂礫を見るが、而も其砂礫は、花崗岩の分解より生じた、白色美麗なもので一片の泥土を含まぬ。

我等は、此溪流に沿ひつゝ、光澤白銀を欺く磐石の上に歩を移す。眞に明麗の感に打たれる。約十五町に亙る萬瀑洞の經路は、概ね此の滑かな河床磐石の上を踏むのである。溪流に點在する岩塊も亦稜角を失ひ、如何にも圓滿の感じを與へる。唯欹立した左右の崖壁は、千古の鐵光色を帶びて、一種莊嚴の觀を添へる。

金剛門を潛れば、程なく左方青鶴峰と香爐峰との間から落ち來て、萬瀑洞に注ぐ、萬絶洞といふ溪流がある。此溪流を遡れば、青壺淵（チヤンホエン）、太上洞の幽谷を經て、降仙臺、須彌（シユミ）庵を迂廻し、摩訶衍（マカエン）庵に通ずることが出來る。青壺淵の幽玄、降仙臺の絶景を兼ねた此經路は、萬瀑洞と共に、內金剛に於ける雙璧と謂はれてゐるが、遠くして且つ險惡なる爲め、探るものは、甚だ尠いとのことである。萬絶洞と萬瀑洞との落合は、峽谷稍開闊で、露出した河床の大磐石は、數十丈にも亙り、水流に向つて、極めて緩かな傾斜をなしてゐる。其磐上に「蓬萊楓嶽元化洞天」といふ八大文字が刻んである。一字の大さ、方約六尺、字體蒼古、蛟龍飛動するかの筆勢を感ずるのである。

此八大文字は、四人の仙人の名で、四仙中の一人楊子彥（號蓬萊）の筆蹟である。四仙は此峽谷の美觀を賞し、萬瀑洞と命名し、悠々閑日月を樂んでゐる間に、此磐面を選んで、其名を刻んだ。其傍に「三山局」と題し、二尺四方位の碁盤の目が、克明に彫り附けてあるが、四人の仙人が、九月三日から三日三晩、碁を打ち續けたのだと傳へて居る。如何にも鮮人式長閑さを窺はれる樣ではあるが、實際此峽谷に遊ぶものは、仙化の感を起さずには居られぬのである。

金剛山到る處の岩石には、文字の彫刻を見るのであるが、萬瀑洞には殊に多い。四仙の八大文字、及び「天下第一名山」と刻んんだ、懶翁祖師の隸書は最も著はれてゐるが、其他崖側といはず、河床

といはず、轉石といはず、中には水底までも見るのである。又數十丈の懸崖の上方、足場造るだに、想像も及ばぬ處に、語句や姓名の彫刻がある。最近の彫刻にかゝるものには、往々俗惡の嫌もあるが概して書風彫刻頗る雅致巧妙を極め、却て水石美と相調和し、此峽谷の景致に、少からぬ情趣を添へるのである。

内地に於ては、山岳峽谷の名所に、殆ど此種の彫刻を見ぬのは、主として構成岩質の關係にも因ることゝ思はれる。其岩質は、概ね粗糙な火山噴出岩で、富士山頂上の胸突八町や、戸隱裏山の最高點高妻山(タカツマ)などに於て、僅かに緻密堅硬な安山岩を認めるばかりで、他は大抵集塊熔岩、凝灰岩である。妙義山、神懸山(カンカケ)、耶馬溪などはそれである。花崗岩質の山としては、木曾駒岳の寶劍岳(ホウケン)や、立山の劍嶽(ツルギ)などに於て、比較的巨大な岩塊が露出してあるが、其位置餘りに高く、且つ交通の不便も與つて、此種技術の餘裕を得ぬのであらうが、然し一面鮮人の氣長の點も窺はれるのである。予は備中豪溪(ゴウケイ)に於て、路傍の花崗岩壁に「天柱」といふ二字の彫刻を見たのであるが、其局面規模の小なるは勿論、其書風彫刻の技術に於ては、到底比較にもならぬ程見劣りがする。予が慶祠衍庵に宿つた時、偶同庵に滯在して、此彫刻に從事する石工が居た。聞けば通常大の文字彫刻料は、一字五圓乃至十圓で、特大のものは、數十百圓にも上るとのことである。金剛山は既に滿山是れ文字の彫刻である、此上更に好事的に、而も劣惡な濫刻を加へるのは、風致保存上、大に留意すべき事ではあるまいか。

崖側には、オホヤマレンゲ、テウセンウツギ、テウセンハギ、テウセンライラック、オホミヤマバラ、クロフネツツジ、テウセンイハモミヂなどの花も見え、水石の美に、更に一段の光彩を添へる。

予が八大文字に面して、其筆勢に見惚れて居た時、萬絶洞の方面から降つて來た、一人の探勝者がある。其古びた洋服は、千軍萬馬の間を往來した、彼の偉功を物語つてゐる。彼は年齒四十前後、體格は中肉中丈、顏面淺黑く、精悍の氣は、眉宇の間にも讀まれる。予が案内者黃福天と相見て笑つて

挨拶した、黄が過般十數日間、本山各方面の案内をしたといふ關係があるのであつた、共に磐石上に踞坐し、名刺も談話も交換したが、一見舊知の如く、頗る快活な男であつた。彼が名刺には「大亞探檢協會員、古川法信、號狄風、東京本郷區駒込富士前町江岸寺内（假所）」。福島縣須賀川の産だといつた。

彼は既に本山に入つてから四十日目である、最初は案内を雇つたが、地理の大體を呑込んだので、其後は單獨にて跋渉した、十數年來二食主義を實行してあるが、場合によつては、一食でも差支ない。鮮人家屋でも、廢庵でも、時には崖下に、眞の露營を夢みたこともあるなど物語り。普通の學生用鞄を肩にしただけで、如何にも簡單質素の輕裝であつた。

彼は人跡殆ど未到の地に於て、苔蒸す岩壁を拂へば、古風の語句や姓名の彫刻があり、所々に廢寺の跡をも認めたので、往時修道行者や、巡禮者の甚だ盛んであつたことを證し、又山奥には、普通人の知らぬ絶景佳境があることをも語つた。

彼は滿鐵會社が巨費を投じて、本山に洋式のホテルを設け、外人や贅澤者流の便宜にばかり沒頭してゐるのは、不都合である、大々的に宿料を低廉にし、一般探勝者の便利をも圖らねばならぬ。尚無用の費途を轉じて、跋渉者の爲に、徑路の手入や、名所の説明的揭標を設置するなどに、力を入れねばならぬと主張されたが、同感の點もある。

彼は本山だけの探檢に要する經費豫算を、二百圓としたのであるが、頗る剩餘を生じたなど、飾り無き談笑、口を衝いて出るのである。

彼はこれにて本山を切り上げ、蒙古に入り、西藏印度を經て、歸國する豫定であると語つて、別を告げた。其性格體格如何にも探檢家たるの資格を有する人と思はれた。

萬瀑洞は、左岸に法起峰、右岸に香城の奇峰、相迫つて欹り立ち、溪水其間を穿つて、所謂、黑龍

潭、白龍潭、碧波潭、噴雪潭、眞珠潭、龜潭、船潭、火龍潭の八潭を成すのであるが、尙其外に、觀音菩薩が頭髮を洗つたといふ洗頭盆や、觀音菩薩白衣の女像が、水面に顯はれたといふ映娥池や、其形が似たればとて琵琶潭などいふのがある。潭上には瀑布があり、潭下には奔流がある。而も此奔流は、頗る急勾配の岩面を瀉下するため、湍は即是れ瀑、瀑は即ち湍、萬瀑洞の名空しからずである。

噴雪潭は、八潭入口の方から數へて、第四番目にある、急湍は幾十層の小段階を成せる急傾斜の花崗岩面を瀉下し、巨岩を嚙んで、吹雪の樣な水煙を揚げ、夏尙寒きを覺える。傍に屋根の如く突き出た巨巖がある、十數人の雨除けに適する。例の四仙が時に雨を避けて休んだといふので、「四仙憩雨巖」の名がある。

噴雪潭から遙か右方に突兀たる奇峰が聳える、曇無歇菩薩が住すといへる法起峰である。其斷崖絕壁の中腹に、普德窟といふ小庵が、今にもまさに落ちかゝりさうな恰好で、數百尺の溪谷に臨んでゐる。下から見上げては、正に神仙の住する處で、人間界のものならぬ樣に思はれるが、溪流を涉り對岸の急坂に、微かに徑を認めるのである。花崗岩塊の崩れ重つた、天然階段や、僅かに人工を施した石段や、樹の根などに縋り、曲折迂廻して上り着いた。時に正午を稍過ぎたので、庵內修道の坊さんに請うて、休憩喫飯した。我は遂に神仙の仲間入りをしたのである。

庵は、高麗成宗の元年、僧普德（懷正禪師）が坐禪修道の爲め建てたので、建築の奇を以て著はれてゐる。上の建物は、九尺二間位で、臺所に大きな竈がある、竈の貼紙には「喫煙放歌嚴禁」といふ掟が見えた。下の建物が本堂で、方九尺許り、法起菩薩の小木像が安置されてある。予は記念の燈明料を供へた。本堂は、斜めに節理層を成した岩壁の斷面に、庇の樣に突き出で、土臺木の三隅は、岩上に据え、他の一隅は、下方約五十尺の崖側より、一本の銅柱を建てゝ之を支へ、更に數條の鐵鎖を上部の岩の間から延ばして、堂を釣り上げてある。一見危險千萬の樣にも見えるが、而も儼然暴風雨

にも耐へて來たのである。本堂から溪谷を瞰下す時は、餘りに凄味の感に打たれるのであるが、上手にある建物の前庭は、實に絶好の展望地で、地面は本堂の屋根と殆ど平である。後は近く法起峰の奇巖を仰ぎ、前は深い萬瀑洞の溪谷を隔てゝ、並び峙つ二つの奇峰に對する。高きは上香城、低きは下香城である、二峰とも著しく花崗岩の肌を露はし、辛うじて僅かに岩罅に根を保つた松樹の點々たるのが見える。下香城の一邊は、目覺しき大傾斜をなして、峽底まで延びてゐる。八潭の全景は、殆ど一眸の中に收まる。修道僧ならぬ我輩も、斯る仙境に於て、悠然修養せばやとの念が湧いて來る。谷風は檐先の風鈴を吹いて、凉しく清き音を送つた。

午後一時、普德窟を辭した。此の急坂には、金剛水がある、之を飲んで置けば、決して水中りせぬといふので、昇降とも腹一杯に詰めた。

普德窟には、「摩訶衍十町、表訓寺廿五町」と記した掲示があつた。

左岸の岩面に高く「法起菩薩」の四大文字が刻まれてある、表訓寺の發願にかゝるのださうで、其他「釋迦牟尼陀佛」、「天下奇絶」などの大文字も見えた。

稍下流に、廻轉巖といふのがある、一千年に一廻轉すと傳へてゐる。岩面に彫られてある文字は、時計の數字の樣に、放射狀になつて居り、澄み切つた水を透して岩底にも立派に刻まれた文字が見える、これは以前水面に現はれた部分に刻んだのが、流水作用の爲め、廻轉して方向變換をしたのだと想像される。

八潭中最大なるものは、眞珠潭である、下方から五番目にある。潭上の瀑は、萬瀑中に於て、最も壯觀である、溪水は幾十層の段階を成した斜面の河床を淙々として奔下し、遂に直下一丈五尺許りの瀑布となり、深潭に落ち込み、轟轟の音は、谷に響き、日光は水煙を射て、圓い虹を潭上に描いてゐる。瀑布の幅は十數尺である、左右に數條の狹い副瀑がある。瀧壺即ち潭は、直徑十數間に亙り、遠

く眺めては、紺碧の色を湛へ、近く窺けば、幾尋の水底、能く見え透いてゐる、眞に玲瓏珠の如しである。

潭側の岩面に「申在植、申韶、尹待敬」と姓名を刻んだ篆書の大字があり、又「水簾」といふ草書の大字もある。潭の正面岩壁の高さ五十尺許りの處に「李命源」と刻んだ見事な姓名の文字もある。

船潭は、如何にも精巧に出來た船の形を呈し、長約五十尺、中央部の幅は二十尺許り、頗る深い。落ち込んだ水は、舷の中央部よりも、稍船尾に寄つて溢れ落ちて瀑を成してゐる、磐石の傾斜面に「船潭」、「金九如」などと刻んである。

潭の傍に、藏經を重ねた樣な、藏經岩といふのがある。

船潭の右岸、混淆樹の密林の上に、獅子が岩上に踞つて顔突き出して居る樣な、獅子岩といふのがある。昔此處に居た獅子が、前脚が無いので、今にも轉げ落ちて死ぬかと、毎日毎夜啼いてゐた。谷の向ふ側の法起菩薩が、不憫に思ひ、一塊の岩を投げ與へた。獅子の前脚の部に、色變りの岩が挾つてあるのがそれだ。對岸の法起峰腹に、大きな穴が開いてゐるのは、その爲であると傳へて居る。

摩訶衍から、法起峰の頂上を眺むると、老松の茂れる間に、菩薩其まゝの姿した岩石が、端然と坐禪して居る樣に見える、是れ有名な法起菩薩で、鮮人達は、今尙此菩薩は、金剛全山に向つて、佛法を說いて居るのだと信じてゐる。

八潭中の最奥にある火龍潭は、峽谷迫り、密林蓊鬱として蔽ひかゝり、水は非常に深く、周圍の花崗岩は、殊に美しく、幾段の大きな長い横襞を成して、潭中に落ち込み、淸澄透徹の水は、光線の射入により、鮮麗な翡翠色を呈し、萬瀑掉尾の風光美を發揮するのである。

眞珠潭逍遙の際、妙齡の婦人を同伴した佛國人に逢つた。

火龍潭に於て最も狹まつた百川洞の峽谷は、此處を通り拔けると、忽ち開け、金剛二大高地の一で

ある摩訶衍の臺地に出る。我等が此臺地にある摩訶衍庵に着いたのは、午後一時三十分であつた。今日の行程は、頗る樂過ぎたが、明日は金剛最高の嶮山毘盧峰攀登の豫定であるから、大に休養を要するのだ。それにしても餘りに時間が有り過ぎるので、庵に就いて宿泊を協定し、荷物を託し、再び八潭に引返し、悠々散歩すること、二時間許であつた。

摩訶衍庵は、燭臺峰東南麓の高臺に在る禪刹で、新羅文武王元年、僧義相の創建にかゝり、現在の堂宇は、李朝純祖の時、月松禪師が重修したのである。長安、表訓二寺に比べては、規模は小さいが海拔約二千八百尺（八四六米）の高臺に位し、前は百川洞の溪流を隔てゝ、法起峰、穴望峰、觀音峰の奇峰、鋸齒の如く並列し、後は衆香城、白雲臺の秀峰に包擁され、右には法輪峰、獅子巖、燭臺峰を望み、左には七星峰、釋迦峰等屹立し、實に靜寂秀麗の淨地である。

本堂に向つて、左方に本庵附設の宿泊所がある、「摩訶衍旅館」といふ看板が掛つてゐる。然し客室は二つだけで、既に其一つは、李王親戚の某氏が、靜養の爲め、一週以前から借り受け居られるので、予は其隣室に宿ることゝなつた、何れも六疊敷位の大さで、入口に三尺障子があつて、採光と出入口とを兼ねてあるが、其他通氣用の窗一つも無い、唯隣室との隔壁に、三尺戸があるけれども、閉鎖してあつた。四壁は勿論、床も天井も、一帶に厚い油紙を貼つてあり、床下の溫突によつて、室内熱苦しく、とても堪へられぬので、係りの坊さんに交渉して、他に轉室した。此室の廣さも、矢張六疊許り、油紙貼りも、溫突の設備も、前のと同じではあるが、唯裏口に三尺戸があつて、必要に應じては、開放して通氣を圖り得ることだけが、比較的便利であつた。鮮地では、夏でも溫突を用ひるのは、濕氣を拂ふ爲だといつてゐる。

明るい内に晩餐の膳が出た、膳は長二尺、幅一尺位の、高い脚付きで、上には飯丼と豆腐汁と、其他副食物が九皿あつた、其副食物は、岩茸、大豆萠し、小豆萠し、雪海苔、大根干漬物、人參味噌漬、

漬菜、三ッ葉芹浸し、昆布天麩羅の九品で、一皿に一品づゝ盛つた、全部精進料理である。大根干の漬物には、胡麻や唐辛や、其他の香料も加つてゐて、何とも言へぬ風味がある、昆布の天麩羅は、毎食にあつたが、時には上面に厚さ一分位の白い衣があつた、糯の粉を煉つて塗り附け、油で揚げたのださうだ。味噌、醤油には、一種異樣の風味だか臭氣だかがあつて、感心出來ぬ。此處の豆腐は、評判の名物である。

飯は大丼に山盛りなので、餘程の大食家でも、容易に食ひ切れさうもない、予は毎に其半量でも尙過分であつた。案内者も時々多少殘した位である、たしかに軍隊の分量よりも多かつた。膳には眞鍮製の匙と箸が載せてあるが、鮮人は飯を匙で、菜を箸で食べてゐる。膳の傍に、水を入れた丼を添へてあるが、鮮人は食事中始終水を飲用してゐる。菜には時に種々の山草や、木の芽などもあつて、仙界生活の試驗には、好資料である樣だが、飯の大量のそれよりも更に多量で、其三分一を平げることすら、容易で無かつた。

宿料は、一泊一圓五十錢、案内者の方は一圓であつたが、交渉によつては、客の方も、一圓以下にもする。山行の時は、別に辨當料二十錢を取つた。予が携帶の佃煮類は、主にこゝに用ひた。

浴場の設備は無いので、予は庭前に筧で引いた水槽に就いて、朝夕冷水摩擦を行つた。非常に清らかな水で、氣持が好い。傍には地上に露出した花崗岩面の、二坪位のものがあるので、脫衣には便利である。

庭には「金剛水閣」と題した水事場がある、「泉味勝牛乳」と書いた掛札が目に着く。

便所は、頗る離れた崖に臨んで建てゝある、至極粗撲ではあるが、岩乘な造りで、內部の構造が大に振つてゐる、糞便は數丈の下に落ち、而も多量に敷き込んだ刈草の中に埋沒して、其姿を見せぬ、椽下は、日光の射入が自由であるから、通氣は言ふまでもなく佳良で、殆ど臭氣を感ぜぬのは、此仙

境には相應しい。入口庇下に「潔不淨云々」の句を記せるも面白い。

此朝、本庵の僧侶達七人が、日出（一五五二米）月出（一五八〇米）の二峰に登らんとて出かけたが、一行中の一人が、途中大負傷を受けたので、目的を果さずして、夕刻歸つて來た。聞けば、草叢の中を跋渉の際、熊捕りの機械を踏み、其彈機の爲め、大腿部に突傷を受け、歩行が出來ぬので、背負はれて歸つたのである。餘程重傷らしく、夜に入つて發熱苦痛もあつたとのことである。日出峰、月出峰は、毘盧峰と近く相連つた峻峰である。

此出來事のため、予が案内の黄福天は、俄かに怯氣だち、予に向つて、明日の行程である毘盧峰の變更を提出したり、或は他に尙一人の案内者を入れて、それに先導させ、此奇禍を免れたいなどと請求も出したが、遂には予が說諭に服したのである。

摩訶衍庵の枕は、約三寸角程の木材を、長さ七寸位に切つたのである。樹下石を枕にすといふに比べては、小言も出ぬ譯だが、予は脚絆とタオルなど卷き付けて我慢した。溫突室のことゝて、寢具は無い、「一等宿料のお客だから、何とか交渉して見ませう」とて、黄は種々周旋の上、漸く薄い小蒲團の樣なものを持つて來て、予に掛けて呉れた。一面は白布、他の一面は紅布で、まだ新調したばかりに見えたが、佛殿あたりの何かに用ふるものらしかつた。山中此の寺院ばかりでなく、鮮人旅館に宿泊しても、皆寢具は無いとのことである。予は成るべく荷物を輕減するため、毛布や空氣枕など、下關川卯旅館に預けた來たことを後悔した。

長安寺も、此處も、電燈はまだ無いので、石油ランプである。予は此の密封的室内に、油煙が立ち籠るを氣遣ひ、消燈して寢た、他日此溪山に、電燈線を引き入れる場合には、其天然美を損ぜぬ樣、特殊の設備が欲しいものだなど、偶考が頭に浮んだ。

夜に入つて、夥しい油蟲の襲來には驚いた、狹い室内に、大小何百匹と數知れぬ程、ぞろぞろと來

て、食品を入れた包物に群り附くが、夜明には、皆逃げ隱れて了つた。

4、毘盧峰頭の偉觀

妙吉祥、一萬二千菩薩、蓮華潭。

六月七日　快晴。朝摩訶衍五四、夕同六二。

早朝冷水摩擦の後、散歩を試みた。劍戟を並べ立てた樣な、衆香城の峰頭も、濃い朝靄に包まれてあつたが、東天紅を催す頃は、追々薄らいで、遂には千切つた眞綿の樣に、片々として消え失せた。願みれば、蠟燭を立てた樣な燭臺峰頭は、旭光に輝き、花崗岩の肌は、麗はしき淡紅淡紫の色彩光澤を放ち、其美觀眩くばかり、燭臺峰は正に仙界の燭臺である。摩訶衍に於ける曉景美として、予が終生忘れられぬ印象である。

金剛第一の高峰毘盧峰に登るべく、摩訶衍庵を出發したのは、午前六時四十分である。昨日日出、月出峰の攀登に、目的を果さなかつた、若い坊さん二人も同行した。

八町許りで、路傍左手に、妙吉祥といふ石佛がある、妙吉祥とは、文殊菩薩である。殆ど垂直線をなした、巨岩の絶壁面を利用して、彫刻したもので、懶翁祖師の妙作だと傳へてゐる。坐像の高さ五丈、膝部の廣さ約三丈、全山第一の大佛である。石佛の肩のあたり、岩罅から清泉涌き出で、靜寂味を添へる。一字徑約四尺もある「妙吉祥」の三大字は「尹師國書」と刻まれてあつた。佛前に昔時堂宇のあつたことが想像される。標札に「大正二年十一月七日、表訓寺」とあつた、附近一帶は、表訓寺の所有である。

此邊は約二平方里に亙る摩訶衍の臺地で、溪流甚だ緩く、テウセンモミ、テウセンマツ、ナラ、クヌギ、シラカバ、アカシデ、ヤマザクラ、ウハミヅザクラ、ニレ、エンジユ、カヘデ、イタヤカヘデ等の混淆密林が、鬱蒼として晝尙暗く、縞栗鼠は驚いて枝から枝に飛び移り、足元からは、屢々雉の

子も飛び出た。

四仙橋の稍手前で、百川洞に別れて左に入り、七時二十分、日出峰月出峰に登る徑との岐點に達した、No. 50 の小木標がある。左徑を取り、同四十分、寺庵の廢址に着いた。朽木枯葉に埋もれた、礎石や屋根瓦が散亂してあつた。觀音菩薩が楊枝の水を以て、衆生の熱惱を灑濯した遺蹟と傳へられる甘露泉があるが、是亦淋しく、朽葉の下に埋もれて、僅かに栗鼠や山鳥の飲料となつてゐる。

右手に毘盧峰の頂上が一寸見えた。

此邊からは、徑の形などは殆ど無い、大體は毘盧峰から發した溪流に沿うて造むのだが、所々積み重ねた小石を道標として、或は崖上に登り、河床に降り、或は僵れた朽木の上を乘り越え、下を潜り、往々先きに行く人の姿を見失ふといふ密林密藪であるが、唯信越地方山岳に淵蔓する根曲竹の厄介物が無いだけ、稍歩き易い。こん所に熊捕機械の仕掛があるまいかと、一行が屢々躊躇するのも無理は無い、然し實際、熊が主に通行するのは、細き谷川か、崖下に沿う窪み續きを取るものである。

雉の子が餘り澤山居るので、何時しか此危險も打忘れて、雉子狩が始まつた、獲物は幾羽なるか知れぬ程夥しかつたが、修道僧の打交れる一行のことゝて、追ふては捕へ、捕へては放つ、好奇的遊戯に止まり、料理の材料とならなかつたは、雉子の幸運である。僅々日光を洩さぬ深林の裡、幽玄靜寂を破る異樣の感じもした。

林下目に入つた植物には、ヤマシャクヤク、ヤグルマサウ、バイケイサウ、ヨフスマサウ、ヤマハタザホ、ユキザサ、フブキショウマ、ミツバハンショウヅル、カウモリサウ等がある。オホヤマレンゲ、クロフネツヽジの花は、萬瀑洞では既に稍凋落に近づいてあつたが、此邊では今正に滿開で、到る處夥しく、綠林清流を飾つてゐる。

七時五十分、溪流の崖に臨んで西向に造つた、藥草取の小屋に着いた、サルナシが夥しい。

黄案内は、此邊で萬參といふ藥草の根を掘り採つて予に示した。葉はアカザに似て柔軟、根は人參の樣な細長い紡錘狀で白い、靈効があるといふので、試みに嚙んで見るに、餘程粘り氣があり、特殊清凉な風味もあつた。此邊には野生人參があるとのことである。

花崗岩塊の磊々たる溪流を遡ること數町、八時二十分溪流の落合に出た、此岐路が、往々迷死者を生ずる所だと、案内者はいつた。巨岩の窪みに野宿焚火の跡がある。

正面衆香城の岩壁に展開する、一萬二千菩薩といふを、高く仰いだ。其明麗莊嚴、實に目も眩むばかりである。幾百千とも數知れぬ、銀白色を呈する花崗岩の、稜々たる突起が、所謂菩薩の行列の樣に駢び立ち、朝日に映じて、燦然たる壯觀は、とても人寰のものでは無い。黄はこれまで、案内として此處に來たのは、六回目であるが、幾度觀ても飽きぬと、頻りに讃美するのであつた。迷路の娑婆であるなれば、此菩薩の懷に抱擁されて往生するこそ、寧ろ本懷でもあらうかと思はれる程である。

此處から、右手の石溪を登ること數町、同四十分又岐溪に接する、今度は左手の石溪を取るのであるが、溪水に離れるといふので、充分腹にも詰め、水筒にも入れた。谷は益狹く、行手は愈急を加へる。

寶石採りの址がある、一行は隨分探索して見たが、連城の璧は、妄りに人手には入らぬのであつた。今朝出發以來、始めて日光に浴した、麗はしき鳴禽の奏樂も聞こえる。

一丈許りの岩面に「摩訶衍李在元云々」と刻んであつた。

九時二十分、谷稍開け、崖壁には、テウセンウツギ、クロフネツヽジ、ゲンカイツヽジが、濃紅、淡紅、深紫、滿開の裝ひを呈し、其幹枝は甚だ矮縮を極め、庭園家、盆栽家をして、垂涎九尺たらしめる。

此邊は標高隨分高いので、一昨日予が展望三昧の境に入つた、望軍臺も能く見えた。

左手の岩壁高く、白ペンキを用ひて、羅馬字で記した、外人の記念字句が目に着いた。

同四十分、本峰の名物、金梯、銀梯の嶮にかゝつた、又金磴、銀磴の名もあるが、金屬製の梯子でもなく、人工的の石磴でもない。崩壞した花崗岩塊が、非常な急勾配に積み重なり、岩塊は稜角を有し、大小錯雜、其大なるものは數十尺にも達する、岩面を彩どる地衣菌の色、前者は黃金、後者は白銀である、而も其地衣面には、鮮麗な綠點黑點が花模樣のやうに散布する光景、幾千萬年天風に梳り天霧に浴して、玆に此天粧を得べく、千古苔蒸すとか、古色蒼然とかいふ形容詞は、此境に適用して眞に價値ありと思はしめる。

此の磊々重疊せる岩塊の罅隙を縫うて、極めて僅かに、シラカバ、イチヰ、シンバク、ニホヒネズコ、テウセンマツ、トショウなどが散點する中に、ゲンカイツヽジや、シロバナシャクナゲの花も交り、而も此等は皆岩面よりは、餘り高からぬ程度に偃臥し、金梯銀梯に更に一種の莊嚴味を添へる、此處まで登ると、テウセンウツギやクロフネツヽジは、殆ど跡を絕つのである。

曩きに八時四十分、溪水に離れて以來、上方には水が無いと案内が言つたが、金梯の登り口には、滾々と湧き出る清泉があつた。此處で復此の甘露水に敬意を表し、邪魔になる金剛杖や、荷物を擔保に置き、愈神仙が製作した、金梯攀登にと取りかゝつた。

金梯銀梯を通じて、十町と稱するも、其實五町にも足らぬ程だが、非常に嶮峻を極むるので、右往左往、岩角を迂り、枝梢に縋り、實に一歩一喘流汗淋漓の體である。毘盧の峰頭は、近く當面に見えるが、足は仲々捗らない。唯此岩塊の累積が餘程强固で、動搖せぬのが、比較的安心を與へるのである。

銀梯に移り登れば、傾斜の度は僅かに輕減するも、岩塊は漸々大さを加へ、岩から岩に攀ぢ登るに益々困難を感じた。數町歩に亙つた、銀世界の光景は、金梯のそれよりも、遙かに壯觀美觀である。

銀梯の基部に No. 52 の小木標があつた。

金銀梯の岩面が、萬瀑洞河床の様に滑かであつたら、頗る危險であらうが、幸に風化作用のお蔭で石英の小突起を存するので、予は特に準備携帶した、鷹匠足袋を出す必要もなく、始終爪皮護謨底足袋で、通して了つた。此石英突起は、概して二三分大のものであつた。

毘盧峰の偉觀に憬れて來る探勝客が、此金梯銀梯の天關に辟易して、廻れ右するもの多いとは、無理ならぬことゝ思はれた。

銀梯の上部は、漸次緩勾配となり、之を卒業すれば、山の脊の鞍部に出る。此鞍部は、毘盧峰と永郎峰とが握手する連鎖で、右手には瑠璃天に連る日本海が見え始めた。

此處からは、勾配極めて緩くなり、左には緩傾斜の綠樹茂れる廣い谷を控へ、右は斷崖幾百丈の深谷を脚下に瞰下しながら、矮樹の間を縫ひつゝ、毘盧峰の絶巔に達したのは、十時二十分であつた。

頂上は馬背狀を成して、略南北に亙ること約二町、幅約二三間、岩塊磊々として起伏をなすも、跋渉にはさほど困難ではない。最高點は一千六百三十八・二米、即ち五千四百六尺强、實に全金剛中の覇王である。

頂上では、內外金剛の全部を展望することが出來る、所謂一萬二千峰悉く脚下に朝するのである。金剛全山の特色として、麓には密林の裳を纏ひ、峰頭は多く鋭く削つた氷山の如く、水晶の劍戟を駢べ立てた様な奇觀を呈するのが、獨り西方近く約十町の距離にあつて、全金剛中第二の標高を有する永郎峰（一六〇一米）だけは、全く頭部から青氈を被れるは、一異彩であらねばならぬ。本峰と永郎峰との間は、極めて緩傾斜の廣い谷を形作り、主にシラカバ、ヲノヲレカンバ、テウセンミネバリ、コナラ、ホザキノナ、カマド、ミネヤナギ等、矮縮した闊葉樹の密生を以て閉鎖し、金剛山彙中、比類なき高原的大窪地を呈するは、青葉の光景の既に一異觀を感ずると共に、亦紅葉期のそれをも想は

れる。

此大窪地は、北するに從ひ、漸次遞下し、峽谷となり、溪流となり、九成渦に落ち、遂に西して金剛川に注ぐのである。

南方約二里の直距に當つて、白馬峰があるが、正陽寺歇惺樓から觀たピラミッド式の尖峰は、全く其姿を變へ、極めて緩斜の側線を引ける鈍頭狀となつた。

近く其左肩に當る彌勒峰頭には、二巨人が仰いで天風に嘯く樣な奇岩が峙ち、尙近く南東には、將軍臺、月出峰、日出峰の奇峰相並び、內霧在嶺を經て、彌勒峰、白馬峰に連つてゐる。將軍臺上には所謂將軍が威儀嚴然と立ち、四周には、劒戟を捧げ持つた衞兵が擁護するかと想はれる樣な怪岩があり。月出峰上には、霜柱の樣に並列した岩峭が、放射狀に三出した奇觀がある。此等連峯の西側は、所謂內金剛であつて、地藏峰、望軍臺、法起峰など各怪奇を競ひ、谷々を縫うて走る、銀線の溪流は日光に反射するのである。

北方直距約二十町に當つて、槍ヶ岳式山容を呈するは、玉女峰（一四二三米）である。其左肩に當り遙かに外金剛の仙境、萬物相の峰巒が見える。毘盧峰頭馬背狀の北端に、新羅太子の墓と傳へられるものがある。

西側永郎峰方面が、靑琵的矮生密林の極めて緩傾斜を呈する、穩和な光景であるのに反し、東側は鐵光色を裝へる斷崖幾百尺、玉女峰に亙つて實に凄壯を極むる。斷崖には僅かに、朝鮮松、唐白檜（タウシラベ）、香檜（ニホヒネズコ）などの鐵葉樹が矮縮疎點する。其深谷の溪水は、外金剛の名物玉流洞の源である。

此日頗る快晴であつて、我等が本山頂上に登り着いた時には、內金剛方面に於ける景觀は、視力の及ぶ限り、展望の美に接したのであるが、東側には、雲霧常に去來し、深谷を鎖しては、所謂雲海の壯觀を現じ、遠望は爲に阻隔された。正午頃からは、雲霧は追々薄らぎ行き、深谷の底、僅かに千切

潭珠眞洞瀑萬剛金內

近附臺止仰剛金外

つた眞綿の様な殘雲が、低迷するばかりとなつた。

見渡す限り、渺茫たる青海原には、白帆點々として鷗の如く、打寄する浪は、汀に白銀の縁を彩どり、長箭(チヤンゼン)の港、高城の邑、海金剛の嶋々、水源端の燈臺。此方には、代赭色なせる小丘起伏する景觀、さながら紙製の模型地圖を見る心地がする。頂上の岩面、例によつて文字の彫刻數多ある其中に「李晟」といふ姓名が見えた、何時の年代か、何處の人かは判らねど、予が名と同じとは、奇しき感じも涌いた。又南面した岩面に「金永鈺」と姓名を刻んだのが、書風如何にも雄勁に見えたが、風化の爲め、第三字が不明である。

頂上主なる植物には、シロバナシヤクナゲ、コケモヽ、ゲンカイツヽジ、フサシモツケ、シヤウジヤウバカマ、ミヤマウスユキサウ、ヨツバシホガマ、ヒメアヤメ、カラクサザクラ、ミヤマダイコンサウ、テウセンキンレイクワ、ミヤマキンバイ、ハクサンイチゲ、ウラジロヒゴタイなどがある。フサシモツケは、世界的珍品といはれてゐる。岩上に踞し、麗かな日光に浴しながら、團飯を喫し、干菊菊、氷砂糖など分配した。坊さん達は、非常に珍らしがり、合掌深謝されたは奥床しい。毘盧峰頭の偉觀を縱にすること約三閲時、午後一時下山の途に就き、三時五十分妙吉祥に着いた。時尚早いので、案内の勸むるまゝ、通路から一町許り迂廻し、蓮華潭といふを見た。潭は淺い、幅四五間、長さ十間許りに亙り、花崗岩の河床に、球狀斑紋の模様、宛も蓮華狀を呈するので、此名を得たのだが、蓮華といふよりも、寧ろ菊目石式模様で、其模様には、直徑四五寸より尺餘に至る大小錯雜してあつた。萬瀑八潭の壯觀に比べては、素より小規模ではあるが、亦溪中の珍とするに足るのである。此球狀斑紋は、磐城大町產の所謂菊面石の大模様であらうか。

摩訶衍庵に歸着したのは、四時二十分であつた。案内黄福天は、予が年齡六十といふを聞いて居るので、毘盧峰の攀登には、餘程懸念したらしいが、本日の行程を了へた予が、脚力に尙大に餘裕ある

を見、歸庵後頻りに讃辭を呈してゐた。

庭前の筧に就いて、冷水摩擦に全日の汗を拂ひ、附近の散歩を試みた。坊さん達も多く來て、予が雙眼鏡を借り、眺望に餘念が無かつた。

七時過ぎとなり、夕陽は、法起、穴望、衆香城等、環壁の岩面に映じ、始めは淡紅白の光彩に輝いたが、漸次紅紫色となり、紫金色となり、紫褐色となり、紫紺色に移り、暗紫色と變り、遂に蒼然たる暮色の帳に入つた。而も山々には遠近あり、向陽の角度にも、それぞれ差異ある爲め、其色彩光澤刻一刻千變萬化を呈する幽麗崇嚴の景觀は、此境に入らずんば、到底想像は出來ぬ。此日予は、曉景美を讃美したが、今は晩景美を禮讃するの光榮に浴し得たことを感謝する。曉景美は、動的であり、明麗味である、晩景美は、靜的であり、莊嚴味である、何れを兄とし、何れを弟とする批判は躊躇する。摩訶衍に於ける晴天の日には、毎に此光景に接し得るとは定められぬ、勿論大氣中に水蒸氣を包含する程度の如何が、大なる關係を有するのである。

5、摩訶衍庵より楡岾寺へ

白雲臺、内霧在嶺越え、隱仙臺、九龍沼。

六月八日　晴。朝摩訶衍室外温突室内五七、七五　夕楡岾寺七〇。

摩訶衍の北西、迦葉洞の幽谷を經て、一千二百米以上の高所に、須彌庵の靜境がある、其近傍に神仙降り遊んだと傳へられる、降仙臺の仙境がある。黄は、望軍臺に比して、優劣何れとも定め難い、特殊の風光を有する佳境であるから、探勝せよと、頻りに予に勸むるのであつた。

降仙臺の名は、予は摩訶衍に着いて後、黄の口から始めて聞いたのである。五萬分一圖には、一二七一米の高距に、佛宇の符號はあるが、庵名も降仙臺の記名も無い、朝鮮鐵道旅行案内（滿鐵會社編、大正十三年一月訂正版）には、須彌庵、須彌峰、須彌塔などの記事はあるが、亦降仙臺の名は見えない、

然るに長安寺事務所で買入れた、鮮人金圭鎭（號海岡）著、金剛遊覽歌（大正九年十一月發行、朝鮮版）を披けば、卷頭の略圖に、降仙臺といふ景勝符號を記入し、本文中にも記事が見えた。

菊池幽芳著、朝鮮金剛山探勝記（大正七年七月發行）には、降仙臺の名も見え、須彌庵一帶の地を鮮人は內金剛萬物相と稱すといふ、賞讃的記事があつた。予は此降仙臺に對しては、頗る勃々たる遊心が無いでもなかつたが、鮮地に入つて以來、既に晴天五日も打續けることゝて、大氣中には、隨分水蒸氣も含み居ることなれば、此處に時日を費し、雨天ともならば、彌勒峰の攀登不能となるの虞があるので、遂外金剛に向つて出發したのであつた。後各方面に於て、此景勝を聽き、且つ溫井里で買入れた、金剛山眞景繪圖（滿鐵京城管理局發行）などを熟覽して、淸淨幽寂の須彌庵に一泊し、降仙臺の悠遊に、浩然の氣を養ひ得なかつたのを、深く遺憾に思ふのである。

此日は、內霧在嶺を越え、楡岾寺宿泊の豫定であるから、行路は約四里半、頗る簡單である。それで降仙臺を略した埋合せにもと、白雲臺を探て、後外金剛に向ふことゝした。

荷物を摩訶衍庵に託し、午前六時出發、山逕を登ること十五分時にして、左手に萬灰庵といふ小庵がある。前は深谷を隔てゝ法起峰を望み、後は燭臺峰の奇嶂を負ふ靜境である。庵名は、八萬四千の煩惱も消えて、冷灰の如しといふ意味によつたのだと云はれてゐる。

山逕は益ゝ急を加へ、斷崖の岩側、僅かに手がかり足がかりを求め、體を橫にして傳はる樣、所謂立式蟹行を演じ、次ぎには約五間許りの鐵鎖に縋り、白雲臺上に達したのは、六時三十分であつた。

白雲臺は、衆香城から南に延びた一脈の終點に位し、狹長扁平なる馬背狀臺地を形作り、南北に亙れる長徑は、一町餘なれども、幅は僅かに五六間に過ぎない。中程の凹地を界として、東臺西臺の名がある。標高一一〇五米。

後には岩嶂矗々として天に冲する衆香城の靈峰を負ひ、西南には燭臺、香爐等の奇岩を控へ、東南は萬瀑洞を隔てゝ、法起連峰の裏、遙かに望軍臺、白馬峰を望み、脚下は所謂千仞の壑に臨み、俯瞰肌粟を生ぜしむる。溪谷上部は、鍼葉樹が多いが、下部は蓊鬱たる闊葉樹を以て、深く廣い谷底を埋めあることなれば、紅葉の美觀は、全山無比の佳境たるを想はしめ、其展望の壯觀は、望軍臺に比べて、殆ど遜色なく、四周の風光秀麗なるは、寧ろ彼を凌駕する、而も其攀登は、比較にもならぬ程、甚だ容易である。

臺上からは、穴望峰頭の穴を通して、碧空を明に窺ふべく、萬瀑洞の火龍潭は、白銀の反射を送るのである。

南方の谷間、木の葉隱れに見える小庵は、世祖大王祈願の所と傳へられる佛地庵である。

華嚴經に、法起菩薩一萬二千眷屬を率ゐ、常に金剛衆香城梵天宮裏に住し、法を說いたとある。金剛一萬二千峰の名は、此に據ると傳へられる。

臺上四部から、北方急崖を降ること約二町にして金剛水がある、所謂金剛水は、金剛山中には、數個所あるが、此金剛水の樣な清冽甘美は、他に比類が無いといはれてゐる。泉水は、自然石が屋根の樣に重なつた中から、滾々と涌き出で、大旱にも涸れぬ。善人之を飲めば病蘇し、惡人飲まんと欲すれば即ち涸る。李朝五百年來、二次枯渴すと傳へられる。舊記に又此水甘きに似て柔軟、水色清きに似て白黑、終日飲用するも厭氣なく、炎熱の候と雖、氷雪の如く、之を飲むものは、萬病に效を得とある。惜い哉予が水筒は、摩訶衍庵に一時預けとして來たので、唯腹中に滿たすだけであつた。此溪谷を、玉女洞といつて居る。

臺上には、高さ二丈許りもある十數株の赤松と、矮縮假寢した數株の杜松とがある。テウセンハギ、テウセンライラック、テウセンキンレイクワ、ミヤマキンバイ、ゲンカイツヽジ、クロフネツヽジなど、

岩壁を彩つてゐる。

七時三十分摩訶衍庵に歸着し、荷物を受取り、直ちに外金剛に向つて出發した。四仙橋の稍手前までは、昨日に於ける毘盧峰行の復習である。四仙橋に着いたのは、八時十分であつた。

四仙橋は、三叉の谷が落ち合ふ溪流に、七八本の丸木を束ねて造つたもので、岩面に「四仙巖」と刻まれてゐる。橋下は、深潭藍を湛へた一佳景を呈する。

八時四十分「喜堂」と註された木標を、左手に見た。唯岩塊を積み重ねただけで、附近には、簑の河原式に、小石を積んだのが澤山ある。堂後に直徑五尺許の大樅がある、一位や唐白檜も見えるが、多くはナラ、ニレ、カヘデ等の闊葉樹林が、始終相茂り連つて、殆ど日光を洩さぬ。例により縞栗鼠は、枝から枝に飛び移り、鳴禽の聲は、谷川の音に和するのである。

此邊オホヤマレンゲは稀であるが、クロフネツヽジは隨分多い、其他ヤマシャクヤク、テウセンクルマユリ、ヤグルマサウ、ヲタカラカウ、キキャウシャヲン、シロバナツリフネサウ、カウモリサウ、エンカウサウ、ハシドヒ、ゴゼンタチバナ、モリトリカブト、コミヤマカタバミ、ヨフスマサウ、ミツバハンショウヅル、ミヤマハタザホ等が目に入つた。

オホサクラサウや、スズランも、ぽつぽつ交り始めた。

幅七八尺の淺い溪流を縫ふこと數回、九時頃、白華潭を右に見た。此邊から徑は俄かに急峻となる。路傍に金沙井といふ冷泉が湧き出で、飲用の爲め、白磁の茶碗を備へてある。

白華潭附近から十數町に亙つた、オホサクラサウの大群落は、予が曾て觀ざる所の壯觀である、其紅紫色の花には、濃淡種々相交はり、發育旺盛のものは、一莖十花以上を着け、花冠も亦大きく、葉は粗大である。我鄉國の遼華山、八海山、駒岳などに産するものは、此處のに比べて、全體甚だ小さく、殊にモミヂバ式を呈する葉姿の優しく雅なるは、品位頗る佳良に思はれる。

溪流と離れて程なく、內霧在嶺の頂上（約四千二百尺）に着いた。九時四十分である。溪間には僅かに殘雪を見た。

內霧在嶺は、毘盧、白馬の諸峰を連鎖する鞍部に當り、又鴈門嶺、內門嶺の名がある。內外金剛の境界であり、又分水界である。即ち東に落つる水は、日本海に。西に流れるものは、百川江となり、漢江に入り、黃海に注ぐのである。

頂上は、方一町位の平地に、芝草が茂つてゐる。今朝以來、頭上始めて日光を浴びた。左右に峰巒あり、前後に針葉樹があるので、展望は遮られる。

頂上に二本の標柱が建てゝある、一は、「楡岾寺賜牌定界標、北淮陽郡界、大正十二年六月日建之」、一は「杆城郡淮陽郡境界內霧在嶺、海拔一千二百七十五米、自此至楡岾寺一里三十町、自此至摩訶衍庵一里六町、大正七年八月建設」と書いてあつた。此頂上から東は、楡岾寺の所有であるのだ。賜牌とは、支配の通音雅字を取つたので、領地の意味であらうか。

頂上から東に下れば、程なく左手に小溪流を見る、楡岾寺までは、始終大體此溪流に沿うのである。森林は益々蓊鬱を極めて、晝尙暗く、朝鮮樅を主とし、朝鮮松、唐白檜などの針葉樹に、槭、楢などを交へる。而も原始的林相を呈するは、金剛全山第一といはれ、立枯の樹幹は、白龍天に登るかと疑はれ、僵木の苔蒸すは、蒼蛇地に蟠るかと怪まる。林間往々熊も出沒するが、妄りに人を害せぬといふは、內地のそれと同樣らしい。

此幽林の樹下、オホサクラサウ益々蔓延して、十數町に亙り、滿地を紅化するは、一異彩であらねばならぬ。ツマトリサウ、エンレイサウ、イチエフラン及びカモメランの一品も目に入つた。相變らず、クロフネツヽジの淡紅花が打續けるも、亦目を引いた。

クロフネツヽジは、長白山脈より本山に亙り、餘程夥しいといふが、內地の諸山には、未だ見ぬ所

である。

頂上より約一里下つた所に、點心片といふ、數十坪の小平地がある。點心とは、晝食といふ鮮語で、以前は此處に、旅客休憩の小亭があつたといふが、今は唯名ばかりである。

深山特有の山唸りの音を聞き得るは、金剛山中、此森林地のみだとのことである。

點心片から數町降れば、暫く溪流と別れるのである、時に十時三十分であるから、時刻はまだ早いが、飲料水の關係があるので、此水畔の岩に、腰打ちかけて喫飯した。此時十數名の鮮人が、米穀や雜貨などを「チゲ」に山の樣に積み重ね、汗水流しながら、內金剛の方に運ぶのに逢つた。東方數里の麓から、開殘嶺の嶮を攀ぢ、更に此內霧在嶺を越える、其勞苦は實に並大抵の事ではない。靈地巡禮らしい姿した男女の數名も、相前後して上つた。摩訶衍庵から楡岾寺までの途上、行人に逢つたのは、此一群だけであつた。

「チゲ」とは、背負梯子であるが、荷物の下抑へとして、後方に一尺許突き出た臺木に、自然の枝を利用したのが、鮮地の特色である。

十一時出發、同三十分頃、左手に樹林の間から深谷を隔てゝ、彩霞峰頭の奇岩が隱見した。靜寂を極むる幽林の下、千古苔蒸す山逕の情趣に、永く浸つた我身には、玆に復金剛山的氣分に接するのであつた。

十二時、本道と隱仙臺との岐點に着いた。標柱に「隱仙坮新金剛十二瀑之景、此處往復一時四十分、至楡岾寺二十五町、大正七年八月建設」とあり、又告示に「金剛山地域ニ於テ樹木ヲ伐採又ハ掘採シタル者ハ森林令ニ依リ處罰セラルベキニ付心得違ナキ樣注意セラルベシ。大正六年九月五日、金剛山保勝會」といふのがあつた。傍に幹徑四尺もある楢の老樹があつた。

此邊で屢々大きな蝮蛇を見た、黃は一匹捕へ、繩で括つて携帶したが、邪魔だとて程なく棄てた、

鮮地でも、蝮蛇を滋强藥劑に用ゐるとのことである。予が金剛山中で、蛇の御見舞を受けたのは、此處ばかりである。

緩傾斜の逕も、漸次急となり、遂には屢匍匐して攀ぢ登り、隱仙臺上に着いたのは、十二時五十分であつた。（標高約一千五十米）

此急坂には、所々にタカネキスミレの一品を見た、葉の表面は深綠、裏面は暗紫色を帶び、花色は鮮かな濃黃である。

隱仙臺上の景勝は、新金剛を代表する十二瀑を瞰下するにある、大森林の幽境を脫して、俄然金剛式氣分の眼前に展開するにある、所謂十二瀑は、峻峭を極むる深谷を隔てゝ、對岸即ち金剛第三の高峰彩霞峰（一五八八米）の腹壁斷崖を摩して、一條の水が、段階的に瀉下するのである。十二條の瀑布が、横に相並ぶのではない。

臺上から見得るのは、上部の九瀑であつて、下部は蔽遮される、一瀑の高さ、二十尺乃至百尺といふが、直距約七八町といふ遠さと、連日打續ける晴天の爲め、水量著しく貧弱であるので、所謂銀絲纖々として刺繡を作る的の美觀はあるが、雄大壯觀といふ感じは乏しい、予が新金剛の溪谷に、親しく足を入れて見やうかとの、副案的行程を放棄したのは、之が爲めであつた。

雙眼鏡によると、第一瀑は、岩下を潛り來た溪水が、岩壁の竅孔から、突飛的に迸つて、之を作れるかと想はれる樣な奇觀を呈し、瀑幅の廣きは、第四第六の瀑を推し、高さは第五第七を最とする。瀑下に瀧壺を認むるもの三つ程あるが、第八瀑のは、最廣く深潭藍碧を湛へてゐる。

隱仙臺上は、丸味を呈する巨岩磊々として相重なり、脚下は垂直的の斷崖を作り、彼此の崖壁には朝鮮松、槭、山櫻などを綴り、春花秋葉を想はしめ、左手は、七寶臺を經て、月出、日出、彌勒連峰との間に、直距約一里に亙つて、緩傾斜の廣い密林を見る。是亦紅葉期の壯觀を偲ばしめる。右手は

起伏せる丘陵を隔てゝ、日本海の碧波を望むのである。

臺上には、朝鮮樅か、唐白檜かの枯木が、象牙の樣に白く風化せるもの數株あつて、此佳境を仙化せしめ、テウセンキンレイクワ、ミヤマキンバイ、テウセンライラック、テウセンウツギ、テウセンハギなどの黃葩紫瓣は、此仙境に更に一種の光彩を添へる。

ミネカヘデの若葉が、著しく紅褐色を呈せるが、此方彼方にも見えた。

隱仙臺の展望は、予が外金剛に入つた、最初の印象として、頗る重要優秀の景致であつた。

臺上東面した巨岩に「李遂大」といふ姓名を刻んだのが、目を引いた。

午後一時二十分、隱仙臺を辭し、同五十分、本道との分岐點に歸着した。

二時十分、右手に家屋の樣な形した巨岩が見えた、其上方數百尺の高さに亙つて、花崗岩壁が鐵光色の肌を現はしてゐる。

同二十分、曉雲洞に入り、九龍沼に着いた。楡岾寺剏建の際、五十三佛に逐はれた九龍が、一時此處に潛み、後玉流洞の九龍淵に遁げ去つたといふ、口碑のある所である。

九龍沼とはいふも、泥沼では無い。急湍の穿つた深潭である。河床の花崗磐面には、內面螺旋狀を呈する、直徑二三尺程の穴が三個、半ば破損したものや、水中に埋沒したものなど數個ある、舊は九個あつたのだと傳へられてゐる。

西岸の斜面岩壁に「觀察使洪敬謨」と彫りつけた文字は、一字直徑二尺程もある。

溪流に臨んで、天女花（オホヤマレンゲ）、石南（シャクナゲ）の白花や、大深山薔薇（オホミヤマバラ）の紅花が、妍を競ひ、芳香を送るも心地好い。

清き淺い溪流に、群游する小魚も見える。

彌勒峰の別れ道を右手に見やり、石碑や舍利塔ばかり淋しく殘れる寺庵の廢址を路左に、般若庵を路右の高みに瞥見し、楡岾寺に着いたのは、正に三時であつた。

6、楡　岾　寺

楡岾寺は、一千九百年前の創建に屬する。寺の記錄によれば、新羅南解王の時、五十三佛月氏國から、安昌（今の高城）に上陸して、金剛山に入り、一池畔の大楡の枝に懸つた。時の高城郡守盧椿、鐘聲を頼りに、山中に入り之を發見し、國王に奏して、池を埋め寺を建て、佛を安じたのが、楡岾寺だとある。又五十三佛海を渡り來て、大澤の岸、楡樹の下に列坐す、時に九龍楡樹を拔き、倒に澤中に挿した、五十三佛身を翻し、楡根に登り坐し、道力を以て九龍を逐ひ拂ひ、澤を塡め、法堂を建つたといふ口碑が傳はつてゐる。現に高城から楡岾寺への沿道には、此傳說に因んだ古蹟が多い。即ち郡守が佛の蹤を慕ひ行く途中、普賢菩薩に方角を示された處が、普賢洞。山中道を失ひ、文殊菩薩に敎へられた處が、開殘の尼峙。嶺上に登り、梵鐘の音を聞いたといふ達音里。楡樹に懸つた佛を望み喜んだといふ歡喜峴などがそれである。

寺は、境內廣く、後に靑龍山を負ひ、前に南山を望み、溪流左を繞り、右には彌勒の峰頭を雲際に仰ぎ見る。創建以來、四十有餘回の火災に罹り、現在の伽藍は、李朝中世のものであるから、古雅の風趣には乏しいが、規模の宏大なること、金剛四大寺の第一に位し、現在僧侶百餘名、寺領一千有餘石、道內には六十餘の末寺を有つてゐる。「東洋首說大伽藍」と題せる大額を揭げた、山映樓を入れば廣い庭を隔てゝ、護持門には「關東第一禪宗」の額を見る。丹碧に彩つた本堂の能仁寶殿を中心とし、六殿三堂一門三樓甍を列べてゐる。

本堂の前庭に立つ、花崗岩の九層塔は、二百年前の築造といはれてゐる。

予は、名刺に添へて、高橋博士の紹介書を通じたので、早速導かれて住職に面會し、合掌の禮に接し、椅子に腰かけ、卓を圍み、案內者黃の通辯によつて對話した。住職は體格偉大、應接慇懃、溫容の中、人をして威重の感を起さしめる。住職から貰つた名刺には「金剛大本山楡岾寺住持、佛敎中央

敎務院理事、金一雲」とあつた。

饗應された菓子には、本山の名物、松の實菓子、松の實飴、昆布煎餅などあつた。住職は一々說明して頻りに侑められた。松の實は、本山の產、朝鮮五葉松の實であつて、補血長壽の效があるなど話された。

予は、歸途再び京城に立寄つた際、特に岡崎町の朝鮮製菓會社に到り、松の實菓子の數品種を試みたが、楡岾寺で食べたのが、優つた感じがしたが、境遇にも因ることであらう。

例により、記念帖に寺印を受け、案內せられて、本堂や寶物殿など拜觀した。本堂の五十三佛は、金光燦然たる小さな佛體で、楡樹の根に安置されてあるが、數年前、十一體は盜難に罹つたとのことである。前方一面に、金網が張られてゐる。

寶物には、一千九百年前のものと傳へられる、高さ八寸許りの金銅製の鼎形香爐や、高さ五寸許りの翡翠玉爵などあつた、此翡翠爵は、世界的稀品で、時價三萬圓以上といはれてゐる。懶翁祖師の眞筆である本寺の沿革誌は、珍品とされてゐる。

境內に、烏啄(ウタク)水といふ靈泉がある、五十三佛渡來の時、烏群石を啄み、泉を生じたとの口碑が存する。

一千九百年前の鑄造と傳へられる巨鐘がある、高約八尺、緣の厚約八寸、案內の坊さん、予が爲めに、ゴーンと一撞された、餘韻は、後巒前谷に響き渡り、莊嚴の感に打たれた。

寺の案內により、寺から二町程下り、本寺監督の下に經營する、山映館といふに投宿した。新築の建物で、六疊敷位の客室が四個並び、前には椽側が通じ、裏は六尺の障子戶を開けば、溪流を瞰下し居心地甚だ好い。予は一等客室に導かれた、「松雲石溪」と書いた額を、楣間に揭げてあつたは、如何にも相應しいと思つた。

館主崔泰圓は、曾て昌德宮の衞兵を務めた人とて、立派な體格風采を有し、應接振りは、頗る快感を與へた。

此處の食膳は、摩訶衍庵と同じく、高脚の長方形飴塗の膳で、矢張豆腐汁の外、九菜がついた。其品種には、味付淺草海苔、鹽鰹、卵蒸し、煎海鼠、椎茸、豆腐フライ、豆萌しなどあり、全くの精進料理では無い、岩茸もあつたが、料理法の優れた爲か、餘程結構であつた、殊に大根の切干漬は、風味甚だ佳良であつた。晩と朝では、料理品種に變化があつて、摩訶衍庵の千遍一律式の精進料理とは餘程違つてゐる。此處の料理の佳良なことは、黄案内からも聞いてゐたのであつた。

一泊料の二圓といふに對しては、餘りに待遇鄭重過ぎたが、金禪師からの内意があつたとのことである。

晩餐後、禪師は一寸來訪されて、山間の不自由を慰められたのである。

案内者黄は、寺で禪師に面會する時、用意携帶した、周衣といふものを、通常服の上に着た、周衣は、筒袖の長着で、下部は裾まで達し、長い幅廣の紐を胸で結んで、サラリと垂れる。彼れのは白色の麻布製であつた、周衣は禮服であつて、内地の羽織に相當するのである。

山映館は、溫突室であつたが、毛布を敷き、更に掛け用として、一枚の毛布を提供した、木枕ではあつたが、箱造りで内部が空虛の爲か、比較的感じが好い。

此處でも亦夜分油蟲の御見舞を受けたが、餘程僅少であつた。

便所形式は、摩訶衍庵と同じく、高架式であるのは、甚だ氣に入つた。

此地は、金剛二大高地の一で、西北直距約一里の天に、彌勒の靈峰を仰ぐの外は、四周の山容、皆圓味を帶びて、綠樹に包まれ、所謂金剛式氣分の感じは薄いが、六百八十五米の標高を有することゝて、朝鮮五葉松を主とする鍼葉樹の密林蔓延し、下草には、鈴蘭及細葉大龍膽の夥しきを見た。朝鮮

五葉松は、又單に朝鮮松とも稱し、植木屋連は、其葉が美しいので美女松といひ、五針葉乃至三針葉が叢生するので、五三松などともいつてゐる。葉の長さは三四寸、極めて深綠色で、內面白條を呈し、毬果は、長さ五六寸に達し、種子は、大豆の二三倍もあり、子實は、胡桃に松脂香を調和した樣な、如何にも禪味を有するのである。山地の子供は、採集して食べてゐる。

鈴蘭は、君影草、谷間の姬百合などいふ、優しい名もあるが、又其葉形によつて、馬耳蘭といふ蠻的な名もあり、花容によつて、米蘭といふ貴い別名をも有し、庭園樹下若くば盆栽として、近頃隨分歡迎され、花戶連は、之を北海道から移入するのである。或紀行に「內地では、北海道以外に、鈴蘭の花のあるのを聞かない」と書いてあつた。成る程北海道では、殊に十勝、釧路邊の原野には、一面に布いた樣に、此花を見る所もあるが、必ずしも北海道のみとは限らぬ、信濃八ヶ岳、淺間山、飯綱山や、我越後の蓮華山、飯豐山などにも、澤山見るのである。然し信越地方及び北海道の產は、獨逸種のそれに比べて、花冠が小さく、香氣が乏しい。然るに金剛山のは、花も稍大きく、芳香も亦頗る優れるを感じた。

楡岾寺は、土人は大抵「ユデンジ」と濁つて呼んでゐる、又金剛山も、概して「コンゴウザン」と濁つてゐる。

7、楡岾寺より高城へ

開殘嶺、三日浦。

六月九日　曇、雨。朝楡岾寺六〇、夕高城六五。

新金剛を探らんとするには、玉踰嶺の嶮を越え、約一里半にして、松林寺に至り、此處を根據とし、百川江に沿うて、究通極り無き峽谷に入るのである。所謂十二瀑が代表的主人公ではあるが、其他雙龍瀑、紫壁瀑、玉龍窟、虎影潭、潛龍潭、亂絲瀑、石門瀑、金剛瀑などあつて、奇勝幽境連續するが、

隨分冒險的準備を要するので、稀に此境に入るものがあつても、松林寺から約半里にある、十二瀑を見上げるだけで、引返すとのことである。

予は、昨日隱仙臺から瞰下し、其水量の餘りに貧弱なのに失望し、新金剛入りを放棄したのであるが、今日は、彌勒峰攀登の豫定であつた。

彌勒峰は、標高一千五百三十八米を有し、金剛山彙中、第六位ではあるが、其位置の上から、展望の雄偉なること、毘盧峰に亞ぎ、山巔に屹立した、砲彈形を成す、二個の巨岩は、高さ約五丈、遠く眺めては兎耳の如く、近づき仰いでは、名狀すべからざる怪奇を極むるので、名高い。鮮人達は、彌勒菩薩降臨の靈地とし、峰頭を三巡すれば、所願成就すと信仰し、山腹には、船潭、萬景洞の景勝がある。されど頂上近くに、壞岩磊積する急峻あること、毘盧峰と相似たる難關があるので、登る人は甚だ少いとのことであるが、予が總督府で、高橋博士と會話の際、博士は曾て金禪師の一行と共に攀登した經驗談を述べ、口を極めて其奇觀偉觀を賞揚し、新金剛や、海金剛の如きは略しても、彌勒峰は必ずと勸められたので、予も其豫定の日程を增補したのであつた。

然るに、彌勒峰攀登日程の今日、早朝屋外に出でゝ空を伺ふに、濃霧深く鎖して、彌勒の峰頭は愚か、近く低い山々までも見えぬ。朝食をすまし、結束して暫く天候の異動を待つたが、霧は益々濃度を加へ、殆ど小雨の模樣となつた。白雲臺や隱仙臺の如き小局面、若くは萬瀑洞や玉流洞の如き峽谷探勝ならば、斷行しても差支は無いが、毘盧峰、彌勒峰に至つては、無謀のこともならず、遺憾千萬ながら、遂斷念して、海金剛に向ふことに決したのである。

楡岾寺には、彌勒峰の案內をなすもの二三人あり、又寺の坊さんに同行を賴めば、彼等は寧ろ修行の爲め、快諾するとのことである。

此朝、予は冷水摩擦を執るべく、山映館前の小川に行つた。此處彼處霧に惱めるスヾランの風情、

一入の感を惹いた。

高城への行路は、案内者の必要も無いので、黄の雇入を解くことにした。黄は此處から長安寺に歸るには、一日行程として樂ではあるが、彼は遊びながら、溫井里の方を迂廻して歸りたいといふので同行した。

午前七時二十分、楡岾寺を出發した、路は溪流に沿ひ、歡喜峴、達音里までは、緩勾配の下りであつたが、此處からは緩傾斜の上りとなつた。路傍に四五軒の人家や、二軒許りの怪しげな鮮人の旅館も見えた。

開殘嶺の頂上は、標高七百七十六米あつて、眼界稍開け、東方には青海原を望むことが出來る、十數人の樵夫が、木材の伐り出しに從事してゐた。

嶺上から、羊腸たる急坂を降ること一里許り、往々岩面路身に現はれ、隨分難儀な厭な坂である、蛇曲的迂廻の煩を避くべく、黄は串通式突貫を試みては、屢轉げ落ちた。

九時三十分山麓に下り、「楡岾寺山監事務所」といふ大きな標札を掛けた建物を見た。嶺上以來、始終丁々たる伐木の音や、曳々たる人夫の聲を聞いたが、或は人夫の肩により、或は牛背牛車により、運び出された木材は、此處に山積してあつた。險惡な谷路、否殆ど路形も無い處を、大八車式の小形な、而も非常に厚い車輪の車に載んだ巨材を運ぶ、幾十頭の牛の、疲れ切つては、涎と共に油の汗を流し、喘ぎつゝ時々歩を留むる、脇からは鮮人の人夫が、ビシリビシリと鞭を加へる樣、從順な朝鮮牛なればと、一入同情の涙無きを得ぬのである。此附近數里に亙る山林は、楡岾寺の所有で、此伐木事業は同寺の經營たることが、推察されるのである。

十時十分百川橋里に着いた。開殘嶺からの溪流と、新金剛から來る百川江との落合である。路傍にイハベンケイサウの一品、センニンサウ、及びウツボグサを見た。こゝのウツボグサの樣な、深紫碧

色の花は、予は始めてである、淡紅白花のテリハノイバラは屢〻佳香を送つた。

普賢里に入り、左手に近く、小規模の校舍があつた、教授中で、鮮人兒童四十人許、教師範讀の下に、一齊讀をなすのが聞こえた。

ポッポッ水田もあり、彼方此方團を成して、苗を植ゑてゐる。右手には、赤壁江の上流南江が見える。

路傍松樹の下に踞して休憩の際、偶〻鞋商人が通りかゝつたのを、黃は呼び留めて、數足を買ひ求めた。朝鮮鞋は、スリッパと短靴との間の子といつた樣な形で、紐で結ぶのである。藁製のは、一足十錢乃至十五錢。麻製のは、二十五錢乃至五十錢位であつた。

予は咽が非常に渴いたので、路傍の農家に就いて、水を需めた、盲目の子供を背負つた、三十許りの婦人が、眞鍮製のピカピカと光る大井で、水を吳れた。仕事の手間潰しをさせたので、十錢白銅を遣つたが、辭退して受取らない。黃の通辯によれば「只の水を上げただけで、錢はとても戴かれません」との意味であつた。

松灘里（ソンダンリ）の手前で、黃は溫井里に向ふべく、左手の岐路を取つた。數日間に亙る山案内に、彼は頗る能く盡して吳れたので、定額賃金の外に、特に慰勞金を添へた。彼は大に喜び、溫井里の溫泉に浸つて歸るといつて、別れ去つた。

午後一時、路傍左手に「松灘警察駐在所」といふ標札を見た、傍に珍らしい大木の赤松の林がある。附近の情況を質問すべく、玄關に入り、刺を通じた。主任の警官は內地人で、外に鮮人の補助官二人居た。予が高城方面の質問に對しては、補助官の人が說明されたが、風采言語、內地人と殆ど異りが無い。主任の警官は、茶が下等であるといふので、妻君を呼んで、砂糖水を饗應された。

內砧里（ネイチンリ）の北部、神溪川の南江に落合ふ處、昨年の洪水によつて、頗る荒れ果てゝゐる。河原の中を

通る捷徑がある、偶〻後から來た洋服姿の內地人の勸むるまゝ、淺瀨を徒涉する程に、松灘里以來の霧雨は、遂に滂雨となつた。予は荷物を擔つてゐるので、路傍の民家に駈け込み、請うて休憩した。洋服の男は、高城の方に走つた。高城までは、最早十町程であるのだ。

此民家は、道路から七八尺も高い處にある、茅葺の一軒屋である、家族の外、椽に腰掛けた二三の人々も見えたが、予と同じく雨を避けたのである。主人らしい人は、煙草を取出して予に侑めたので、予は煙草を吸はぬといふことを、手眞似で辭退した。今度は朝鮮の名物だといふて、長さ七八寸もある飴棒を差出したが、予が稍躊躇したので、彼は其一端一寸許りを折り取つて、自らの口に入れ、其餘を復予に侑めた。毒味したといふ意味らしいので、予も其好意を辭し兼ねて口にしたが、彼は滿足の意を表した。茶屋營業者ではない、全く一種好奇的の樣な、而も純な人情味を認められたのである。此男高城附近に住することゝて、極めて僅かに內地語も使ふ樣であつた。

雨は少々小降りとなつた、前の街道には、例の小形な圓錐形の油紙帽笠だけで、小走りに通るもあり、荷物運搬の歸りにや、扇形に口を開いた、大きな荷籠を頭上に被つて通るもあり。漁村から來たらしく、鮮魚を大きな木鉢に入れ、大原女式に頭上に載せ、雨除け兼用宜しくといつた樣に、悠々として行くもあり。高さ一尺五寸、口徑一尺二三寸もあらうかと思はれる甕に、生魚を盛つた婦人も亦此大原女式を見せたのは、其熟練さ、其頭力の頑强さには、驚くの外は無かつた。後高城では、水を滿々と湛へた大甕を、頭上に載せて運ぶ婦人を見たこともある。頭上に釜敷樣の輪臺を置くは、大原女と同樣である。此形式は、寧ろ此方が本家かも知れぬ。

五萬分一圖に、廣橋とあるのが、此一軒屋であつた。

休憩約一時間、雨も小止みとなつたので、一軒屋を辭し、程なく路傍にある、三日浦案內の揭示を頼りに、左折二町許、丘側を巡り、浦畔に出た、三日浦の全景を、一眸に收むるには、丘上に上らね

ばならぬ。浦畔に迫り、西から北に亙つて、秀峯（一九六米）峙ち、南方には、奇岩の丘陵屹立し、東南の一隅のみ、僅かに低い。周囲約三里、峨々たる環壁の内に、紺碧の水を湛へ、靜なること鏡の如く、岬灣あり、三四の小嶋あり、深山湖景の感じがする。昔新羅の頃、永郎、述郎、南郎、安祥の四仙が、湖上に棹し、浩歌耽溺、三日間歸るを忘れたとて、三日浦と稱すといはれ、島嶼には、四仙亭の跡を存すとのことである。

菊池幽芳氏は、其紀行に「若し此三日浦が、長安寺の邊にでもあつたなら、金剛山の價値は、どれほど高まるかも知れない」といつてあるが、山岳趣味を有するものが、此湖に直面しては、誰しも其感を同じうするのであらう。金剛山は、峽谷に富んでゐると共に、亦溪流にも富んでゐる。惜い哉其水量が乏しい、殊に十里にも亙れる山域に、一の山湖をだに見出せぬ。望蜀の笑は受くべきも、移し得べくんば、予は此湖を、摩訶衍の高臺地にと望むのである、法起峰、燭臺峰、衆香城の怪巒奇峰を環壁とし、毘盧峰の雄姿を、其紺碧の湖面に蘸したいのである。

海濱に於ける湖沼は、猿間（サルマ）湖や霞ヶ浦や濱名湖の樣に、泥沙の岸を有し、遠淺のが普通である。稀には、洞爺（ドウヤ）湖、八郎潟、宍道（シンヂ）湖のやうに、丘陵を以て圍むのがあつても、其岸は斷岩絶壁的ではない。然るに此處のは、三日浦を始め、附近には周囲一二里の湖沼三四を數ふるが、殆ど皆屏風の樣な花崗岩壁を以て圍み、岩脚に迫つて、紺碧を湛へるといふ深みを有するは、所謂金剛山的形式を、此處にも亦發揮すと謂はねばならぬ。

雨は復降りだしたので、永郎の徒が、耽溺三日歸るを忘れたといふに、予は十分間許りで切上げ、半駈足にて、赤壁江の分流に架けた橋を渡り、程なく高城に入り、高城館（遠藤龜太郎）に投宿した。時に四時。楡岾寺から約七里である。

高城から百川橋里までは、特別註文によつては、自動車を運轉する。

夕方になつて、濃霧は尙四邊を鎖してあるが、雨は止んだので、各店を漁り、貧弱ながらも、金剛山の繪葉書數十枚を手に入れた。金剛の繪葉書は、京城驛構內賣店にも、長安寺にも無かつたので、此間繪葉書通信を缺いたのである。

久し振りで風呂に入つた、浴槽は直徑三尺許り、鐵製の釜形式なので、ふと石川五右衞門釜煎の段を想ひ出したのである。予は山中にても、常に冷水摩擦を執るので、風呂の無いのは、比較的困らぬ方であるが、然し疲勞の恢復には、溫浴の效は著しい。

高城は、赤壁江に臨んだ小都邑で、海にも近いから、河海の魚類に不足は無い。膳には、牛肉も新鮮な魚肉の刺身も上つた。

久し振りで、柔かい厚い夜具に入り、木枕の難を免れたので、雨戶打つ風聲雨聲を他所にして、快く安眠が出來た。

8、海金剛

海萬物相、松島。

六月十日　曇、晴。朝高城六五、夕溫井里七〇。

夜來の風雨は止んで、如何にも靜かになつたが、濃霧は尙濛々として、四邊を鎖してゐる。溫井里ならば、溫泉に浸つて、連日の疲勞恢復を圖つてもよいが、此處に一日の蟄居をなすは堪へぬので、運を天に任せ、荷物は宿屋に預け、海金剛に向つて出發したのは、午前八時であつた。

自動車が通る程の立派な道が、高城郊外、新開中の田畑や、松林の裡を、一直線に海岸に達してゐる。そこが海金剛で、此間一里弱である。南には稍離れて赤壁江の本流、北に其分流の後川が緩く注いでゐる。

後川出口の左岸に、立石里（リツセキリ）といふ小漁村がある、氣の利いた旅亭も茶屋もある。右岸には、原茂一

といふ茶屋があつて、海金剛遊覽船の世話をなすことになつてゐる、偶主人は、約半里許りの生簀(イケス)の方に用達しに行つて、不在であつたが、程なく歸るであらうからとて、茶を予に侑めたまゝ、其妻君は迎へに出かけた。

賃金掲示によれば、海金剛遊覽船には、モーター及び屋形船あり、乘客三人まで一圓八十錢、松島まで巡れば三圓。即ち三人乘れば前者は一人當り六十錢、後者は一圓であるが、若し乘客一人の場合には、三人分を拂はねばならぬ。

庭前にある休憩小亭に、腰打ち掛けて、繪葉書數十枚に、萬年筆を走らせた。時に朝霧は拭つた樣に消え失せて、旭光は麗かに白砂を照らし、海面は靜なること鏡のやうである。やがて主人は、妻君と共に歸つて來たが、先程溫井里から、電話がかゝり、外人からも、廻遊船の申込みがあるから、暫く待つて呉れとのことである。

待つこと一時間許り、客を載せた自動車は來た、若い夫婦連れの英人であつた。夫は三十前後に見えた、隨分快活の方で、緩い日本語で、予と對話した。

赤松の生へた渚の小丘を、幾つか越えて、舟に乘つた。舟は岸に沿うて、嶋々を縫ひながら、北に進んで、海萬物相に着いた、渚を緣どる丘陵も、海中に亂立する島嶼も、全部花崗岩の稜角が取れた隆圓狀を呈してあるが、萬物相だけは、稍稜角を有し、矗々たる岩嶂は、殆ど垂直線的に其岩脚を水中に沒し、岩壁の直下は、眞に紺碧を湛へる、而も水は飽くまでも清澄透徹を極め、岩礁に附着する鮑や海栗(ウニ)までも窺へ得る。小規模ながら、內山の衆香城、外山の萬物相的形式を呈するは、海金剛に於ける、萬物相の榮冠を戴くことが首肯れる。斷崖峽谷式に、曲折した入江を縫へば、岩蔭に天然岩壁を利用した生簀がある、長徑七八間、深さは一丈程もあらう、數百の魚が泳いでゐた、今は鯛が無くて全部鰯であつた、原氏が關係してゐる生簀といふは、此處であつた。客の註文によつては、此の

生きた魚や海栗の即席料理もするのである。

生簀の傍から、屹立した岩上に攀ぢ登つた、原氏と男の英人と予とは、上から手を引き、下では足場となつた、所謂猿式蝸附式攀登である。英人が靴のまゝ通したのは、感心であつた。岩頂高さは四五丈に過ぎぬが、海金剛の全景を、一眸に收むるには、絶好の位置である。英人は屢寫眞器を向けた、彼は又屢予が雙眼鏡を手にしては、遠望を賞讃したのである。

此海岸に於て、ヤマツヽジの赤い殘花や、ハマナスの紅花を見たが、此處にスゞランを認めたのは地勢上から頗る珍らしく感じたのである。ハマナスは、我郷國から奥羽地方の海濱にかけて蔓延し、花には芳香を有し、根皮は、絹絲の茶染料となる。秋田の八丈縞は、之を用うるとのことである。

海金剛の區域は、約二方浬に亙るといふが、天能く晴れたので、南方約二十町に當つて、五十三佛が印度から乘つて來た石船だといふ船巖や、其時巨鐘を懸けたといふ懸鐘巖など、望むことが出來た。近くには佛岩、砂工岩、松島、内州、外州などが散點する。高い島には、老松其頂を翳し、低い禿頭の島々には、鷗や海豹(アザラシ)などが、日光浴を執つてゐる。此處には、日英舟を同ふし、彼處には、鳥獸床を共にする、奇しき對照と謂はねばならぬ。

我等が舟は、老松茂れる松島を巡りて、立石里に歸着した、舟遊二時間許り、英人は、海岸旗亭に寄り、予は原亭にて、晝食をしたゝめた。

海金剛の眺望は、立石里の沿岸丘上を巡つても好いのであるが、舟で無ければ、萬物相の入江や、松島の景致を、親しく味ふことが出來ぬ。然し暗礁も多いから、海上穩かな日で無ければ、舟遊は危險である。

此海岸は、朝鮮東岸を洗つて、北走する暖流が衝着して、海水の溫度を調和するので、海水浴場に適し、又釣遊の屈竟場所といはれてゐる。

9、海金剛より溫井里へ

溫井里溫泉、嶺陽館、金剛山ホテル。

海金剛は、確かに朝鮮海岸に於ける、第一流の景勝であらう。高城の北郊に峙つ、東龜岩や西龜岩の上に立つて、展望する光景。赤壁江對岸の赤壁山下の風致。東南一里許りに聳える九仙峰に登つて仙跡を探り、永郎湖、鏡湖を脚下に瞰下し、遠く金剛連峰が雲を衝く雄姿を望み得る。由來高城一帶の風光は、著名である。されど金剛山の豪壯明麗怪奇雄大に親炙した眼から視れば、勿論比較すべき問題ではない。高橋博士が、海金剛の遊覽を略しても、彌勒峰に登らねばならぬと、勸告されたのは至當である。但山岳跋渉に疲れ倦んだものには、所謂方向變換的の慰感を與へるのである。人或は之を內地の松島に比べて云々するものがある。元來本尊の松島そのものは、瀨戸內海の大觀には、比すべくも無いのである。

高城館主人は、尙一日を高城附近の探勝に費すべく、勸められたのであるが、元來山黨の我輩は、矢張山だ、一時も早く、外金剛の山に入らうとの念に驅られ、英八夫婦と自動車に同乘し、溫井里に向ふことゝした。

自動車は、午後一時海金剛原亭を發した。予は途中停車を求めて、海岸で認めた繪葉書を、高城郵便局に投じ、高城館に立寄つて、荷物を受取つた。

自動車は、坦々たる道路を、赤壁江の支流神溪川の左岸に沿うて進んだ。左手には、外金剛連峰の雄姿を眺め、前景には、柳や赤松の河邊に連る景致は、得易からぬ大觀である。

海金剛から、溫井里までは四里弱、自動車は三十五分を費した。

英八は金剛山ホテルに入り、予は嶺陽館に投じた、豫め申込んで置いたので氣持好い挨拶を受け、室に入るや、早速浴衣に石鹸タオルまでも提供され、主婦の案內により、溫泉に浸つた快味は忘れら

れぬ。

此地の溫泉は、花崗岩を潛つて湧き出づることとて、淸澄透明は言ふまでもなく、無臭無味の鹽類泉で、溫度亦佳適である。胃腸病、神經痛、皮膚病に特効があるといはれてゐる。

浴室は、昨年の新築とて、廣く明るく、脫衣場から、花崗岩の石段十級を降つて、浴槽がある、浴槽は六尺九尺位、其緣は、花崗岩の磨き造りであるが、上部の四周は、花崗岩の丸石を積み、セメントで固めてある、浴槽の傍には、洗顏用水槽の設備もある。溫泉場に、此特別設備の無いのが多いが、閉口である。

此地は、共同溫泉浴場が、五ヶ所ある。

內地人經營の旅館で、溫泉內湯の設備があるのは、嶺陽館、常磐館だけで、金剛山ホテルには無いのである。

溫井里には、まだ電燈はない、內金剛の各地、及檢岾寺、高城も同樣石油ランプであつた。然し溫井里は、溫井川の水量落差豐富であれば、水力發電所の施設は、頗る易々たることゝ思はれる、

嶺陽館は、當地第一流の旅館であり、且つ淸潔な溫泉內湯があるといふので、予は外金剛探勝の根據地とすべく、鄕里出發前からの豫定であつた。山麓の溫泉は、實に山岳跋涉家に、多大な快感を與へる。天下の名山に附與する、此の淸澄な溫泉は、特に感謝に堪へぬのである。

嶺陽館主人沼安太郎氏は、山口縣人で、年齡五十許、夫婦とも、溫厚親切であり、女中又溫泉地に通弊なお轉婆式では無く、居心地甚だ好い。

予は海金剛の船中で、英人が齎した、朝鮮總督府調製の金剛山眞景繪圖といふを賭て、好參考品と思つたが、溫井里で買入れたと聞いたので。一浴を終り、街道散步を試みて、此繪圖並に內外金剛に關する、數種の繪葉書を購ひ得た。金剛山繪葉書の販賣店は數戶あつて、其豐富なことは、他の地方

の到底及ぶ所でないと想はれた。

予は大阪で、日本山岳會員榎谷徹藏氏の好意によつて、陸地測量部の五萬分の一圖四枚（內金剛、外金剛、海金剛、高城）を携帶して來たのだが、京城では、細川貞之丞氏の案內によつて、小林書店から、金剛山と題する地圖を購入した、これは一枚で、前記四枚分よりも、範圍が稍廣く、五色刷だけに、鮮明で見好く、且つ交通略圖を一隅に附記してあるのは便利である。矢張五萬分一圖を基礎としたので、朝鮮總督府の發行である。

繪葉書並に雜貨店の外、菓子屋が甚だ多い。自然木の金剛杖も賣つてゐる。

溫井里は戶數約六十、中內地人二十戶許り、內地人經營の旅館五戶、鮮人經營の旅館十數戶もある。嶺陽館に屢來訪された、巡査岩本氏の談によれば、溫泉地のことゝて、料理屋は割合に發展振りを示し、藝妓は、內地人五人鮮人三人程もあるとのことである。

嶺陽館は、一泊料三圓五十錢、山行には、折詰辨當料六十錢であつたが、料理は割合に佳良である。屢西洋料理も添へた。予は數日滯在の豫定であるから、投宿の際、茶代として一封を差出したが、茶代は申し受けぬ定めであるとて、固く辭したのであつた。晚餐の際、女中に少々の心附を遣つたら、主婦は罷り出で、恭しく禮を述べた。

此日は投館後、非常に餘裕があつたので、前後數百枚の繪葉書を認め、郵便局通を數回續けた、お蔭で局員は俄かに知己となり、繪葉書屋も、菓子屋も、亦隨分懇意となつた。

晚餐後、浴衣のまゝ、郊外散步を試みての歸り、悠々步を運びつゝある予は「お遊びにいらつしやい」と、艶めかしい言葉を、妓生から受けたが、これだけは、遂緣無き衆生であつた。

郊外に、甘露水といはれる、有名な泉が涌いてゐる。

此地、標高約百米、餘程暖かい。

（一 其） 剛 金 海

（二 其） 剛 金 海

夕刻、大阪鮮滿案内所の主催にかゝる、本山探勝旅行團體十人、嶺陽館に投宿した、中には七十五といふ老人もあり、妙齡の婦人もあつた。

10、溫井里より九龍淵へ

神溪寺、仰止臺、玉流洞、連珠潭、飛鳳瀑、九龍淵、上八潭。

六月十一日　曇、雨。朝溫井里六四、夕同六五。

前日豫約して置いた、予が案内者鄭聖國が來た。鄭は年齡二十四、體格强健、性質快活にして、勞を厭はぬ親切味ある、優良な男であつた。此地には、内地人で案内に從事するものも、二三人はあるが、主に鮮人の案内者で、内地語にも通じ、又内外金剛を通じて案内し得るものが多いので、此點からいへば、探勝者は先づ溫井里に入り、外金剛から始めて、後内金剛に入るのが好い樣である。開殘嶺の長い急坂は、降るのでも隨分困難だが、逆に之を上ることは、餘程の難物であるから、溫井里を根據地として、九龍淵と萬物相とを探り、溫井嶺を越えて、内金剛に入り、内霧在嶺を越えて、檢岾寺海金剛に出で、再び溫井里に歸り、連日の汗を、溫泉にて拂ふのが、結構の樣に思はれる。殊に平康長安寺間の道路が、現狀のまゝであり、又此間の自動車が運轉不明の場合に於ては、尙更そう感ずるのである。

溫井里では、案内料一日二圓、宿泊の際は、案内者の宿料は、雇主持である。

大阪團體は、草鞋だの、金剛杖だのと、ゴタ〳〵騷いでゐる間に、獨立獨行行動隨意の予は、鄭案内を促し、九龍淵を探るべく、一足お先き失敬し、嶺陽館を出發したのは、午前七時であつた。

金剛山ホテルの前を横ぎり、松林に入れば、程なく極樂峴にかゝる。滿鐵會社編朝鮮鐵道旅行案内には、「玉流洞跋涉の脚力試練を、此峠で行はされる」とあり、又或紀行には「此峠で先づ流汗一斗の苦を嘗めねばならぬ」などあつて、餘り大袈裟にいつてゐるが、溫井里からは、僅か百米の高度でも

あり、通常登山家より視れば、其名の示す通り、實際極樂峴であらねばならぬ。鮮地で峴といふは、內地の峠で、多少見通しの利く峠を意味する樣である。

極樂峴は、觀音峰と文筆峰とを連結する鞍部に當り、珍らしく赤褐色の粘土質地肌を露はし、赤松が茂つてゐる。樹間から行手を望めば、神溪寺の松林を見越しに、彩霞峰、巢仙峰の秀峰が、矗々天を刺し、金剛山式壯觀を呈するは、此日の行程に於ける、快哉の第一聲であらねばならぬ。

峴を下れば、程なく讀經の聲が聞える、こゝが神溪寺である。時に七時十分であつた。例により早速執事所に就いて、記念帖に寺印を求めた。初め普通用の紫インキ式スタンプを持ち出られたが、予が記念帖には、長安寺始め、皆正式の寺印が押されてあるので、更に印函を披いて、寺印を押された。極帖寺のは、大本山だけに、方二寸、輪廓の厚さ二分といふ堂々たる寺印であつたが、長安寺、表訓寺、神溪寺のは、方一寸五分、摩訶衍庵のは方七分といふ小形であつた。本山各寺で、使用の印肉は、多くの內地のそれに比べて、品質餘程優良で、深赤色である。住職から貰つた名刺には「金剛山神溪寺、宣守敬」とあつた。

神溪寺は、一千六百年前、新羅法興王の六年、普雲祖師の創建にかゝり、其後屢火災に遭ひ、現在のは、李朝中世の建築に屬し、大雄殿其他二三の殿閣を有するのみで、金剛四大寺中では、最も小規模の寺となつてゐる。唯大雄殿の前に立つ五層の寶塔は、創建當時の遺物で、金剛三古塔の一と呼ばれる珍品である。塔高約一丈五尺、四面各二佛像を彫刻してあるが、幾百千年の風化を蒙り、古色蒼然の觀を呈する、殊に塔面を飾るミヤマンネングサは、淋しく往時を物語るのである。大雄殿には「大雄殿」と題した、竪額が掲げてある。

寺前には、滿開の芍藥が人目を引く、長安寺、表訓寺などでは、蕾まだ固かつたが、此處の氣候は餘程暖かいことが知られる。

大雄殿の柱掛には、白地に左の紺青文字が註された。

毘盧遮那佛、　願力周法界、　弍切國土中、
恒轉無上輪。　海岡金圭鎭印

此筆者は、金剛遊覽歌の著者、金圭鎭である。

寺は觀音峰を背景とし、前面一帶は、松林を隔てゝ、紫褐色を呈する彩霞の奇峰に對し、左に文筆峰、右に世尊峰を仰ぐ、幽靜の境地ではあるが、標高低く、山尙淺い感じがする。

近年當寺の誇りの一であつた、萬歲樓を燒失した、其餘累を受けて、境內の名物蓬萊松と呼ばれた巨大な老松も殉死し、今は淋しく其形骸だけを存してゐる。

本山佛宇の火災は、其大部分は、溫突に原因すといふが、衞生的、經濟的暖室法の溫突も、其施設方法に於ては、大に研究の餘地あるものと思はれる。

對岸の動石洞は、萬瀑洞に雄渾な筆蹟を遺した、仙士楊蓬萊誕生の地である。

神溪寺から、松林の間を縫うて進めば、右手に普光庵と書いた標柱がある。

やがて急坂を上ると、左方脚下に、淙々の音を聞き、溪流は轉石の間を奔迸して來り、坂麓に激衝して南に折れ、翠谷の間に沒する、即ち神溪川である。

坂を下り、右の山腹に五仙巖を望む、路傍高さ丈餘、幅二丈許りの花崗岩面に、朱、黃、綠、紺などの極彩色を施した、彌勒菩薩の刻像がある。石面「秋風」といふ刻字は、曩きに萬瀑洞で出會つた、探檢家古川法信氏の記念として、特に予が視感を惹いた。

坂から十町許りで、一條の淸流、左方から來つて神溪川に落合ふ。神溪川の本流を、十數町遡れば群仙峽の勝があるのだ。

左方から來た淸流は玉流溪で、其入口に一廳臺がある、標高二百五十七米、觀音、玉女、世尊の連

峰、稜々たる花崗岩骨を現はして、前後左右に峭立し、金剛山的色彩を展開し始める。一廳臺の石面に「林漢相」といふ姓名を刻んである。岩壁に可憐なるカラクサザクラを見る。

一廳臺から、峽谷の終點九龍淵まで、約一里十町の間が、外金剛に於ける、峽谷溪流の風致を集めた佳境である。溪流の水量は、內山萬瀑洞と伯仲の間にある。

八時四十分仰止臺に着いた。溪流に横はつた扁平な花崗磐上に立てば、行手は奔湍雪を吐く溪谷の美觀を望み、當面には、稍不規律な柱狀節理を呈した、金昌臺の岩嶂峭立し、人は思はず足を止めて仰視するといふ意味から、此名があるのだ。崖上には、テウセンマツを主とし、カヘデ、ナラ、ニレ、ブナ、ヤマザクラ、シロモジなどの樹木を見る。オホヤマレンゲとテウセンライラックは、風のまに〳〵に幽香を送る、此谷のクロフネツヽジは、大概凋落した。

幾度か溪流を縫うて、左岸に上り、金剛門に達した、墜落した巨岩の抱合によつて出來た自然の石門で、丁度內山表訓寺前の金剛門と好一對である。石面に「金剛門」と刻んである。傍に一茶屋がある、怪しげな番茶に、羊羹を切つて添へて出した、一切の羊羹を喫し、茶代として二十錢を置いたら、羊羹代二十五錢を頂戴したいと申し出た。本山の名物朝鮮五葉松の實を入れた、松の實羊羹であつた。予は昨日溫井里で、一本十七錢で買入れた經驗があるので、唯一切を食べたのだから二十錢で充分だと思つたのである。然るに彼等は、一州を取るも誅式の筆法で請求したのだから、予は餘分を皆案內者と、傍に遊んでゐた家の子供等に分けて遣つた。內金剛では、此種の茶屋は無かつたが、外金剛では、所々に見受ける、而も十七錢の羊羹を出しさへすれば、必ず二十五錢を請求するは、彼等の內規であるらしい。

店前に、本山の鑛石を列べ置き、客の需めに應ずる。

金剛門は、七仙巖、又玉流關の名がある。此處から峽谷は、益々峻を加へ、天地は、愈々靜寂とな

る。

石逕を巡れば、水聲轟轟として、峽谷を動かすばかりの溪流に接する、大きな倒れ木を、唯一の足懸りとして、激湍を飛び渉る、前面には横に節理を有する岩嶂が峙ち、麓には、上流から曲折して來る溪流が、白玉の如く碎けて、大磐石の上に轉々として躍り、滑り落ちては、そこに碧潭を作る、是れ溪中著名の景勝玉流洞で、碧潭は即ち玉流淵である。五十疊大の扁平な磐石が、緩傾斜をなして、湍中に横はつてゐる、其側斷面に「崔松雪堂」の四文字が、鮮かな朱入りで、深く彫られてある。五六十尺の高さの岩面に「九龍淵玉流埈門」など刻まれた文字を見た。

外山に於ける玉流洞は、內山の萬瀑洞に匹敵し、金剛全山中、峽谷美、溪水美を以て推賞され、兩崖より河床まで、一大磐石の連續から出來てゐることは同樣であるが、玉流洞を作る花崗磐岩は、銀白の色更に鮮かで、遠くから眺めては、さながら雪溪を見るやうだ。水の淸冽さも亦萬瀑洞を凌駕する。萬瀑洞は、其上流に常住の寺庵があり、又內霧在嶺の通路にも沿うので、とても此處の淸冽さ純潔さには及ばぬ。玉流の名は眞に相應しい。

幾千萬年の水摩作用によつて、磨き上げられた河床の磐面や、溪中に轉々たる稜角の取れた丸味の岩塊は、略萬瀑洞と同樣だが、此處のは、比較的多少稜角を存する。

金剛門より下流の峽谷は、稍廣いが、此處から上流は頗る狹い。且つ岸側は急傾斜をなし、逕は往々四十度以上の斜面を横に通過するので、溪水中に滑り落ちる危險がある、それで磐上に數多の鐵棒を打ち込み鐵鎖を連結する所謂鐵欄干が設けられ、尙長さ三尺許りある丸太の木を、横に仕附けて足懸りの段にしたのが所々にある。丸木の怪しげな梯子もあり、一本丸木の橋もあれば、丸木二三本寄せの橋もあつて、萬瀑洞の殆ど坦々砥の如き河床磐上を歩むのとは、とても比較にはならぬ。山岳跋渉の經驗者で無くては、躊躇する所が多い。萬瀑洞には、香爐峰、香城峰、法起峰など、岸に臨んで

奇岩近く相峙つものあるも、玉流洞に於ける世尊峰や、玉女峰の支脈が、突兀峨々として、頭上左右から威壓的に迫つて來てゐるのに比すれば、餘りに優しく、餘りに明るい感じがする。內金剛を女性的とし、外金剛を男性的だと、批評する人達は、單に此峽谷だけの比較であるとせねばならぬ。若し金剛全山を普く探るに於ては、內外金剛を區分する、分水嶺を境界線とし、何れの一方が、果して男性的であり、又女性的であるかを定むるは、容易なことではない。それ程金剛山の峽谷溪流は複雜であり、峰巒山容は變幻極まり無いのである。

玉流洞から、飛湍を左に瞰下し、一嶠を遶り、鐵鎖に縋つて進めば、左方脚下には、物凄きまで紺碧の色を湛へた深潭を見る、下方を連珠潭といひ、上位を眞珠潭といつてゐる。二潭は丈餘の急湍的瀑布を以て連結さる、行手の遙か左方密林の上、銀線天壁に懸るかと疑はしむるは、飛鳳瀑の上部である、此背景は、幽凄極まる此境の景致を程能く調和する。

此二潭は、萬瀑洞の眞珠潭に比すれば、餘程小さいが、著しく銀白を帶びた兩崖よりの花崗岩は、相迫つて藥硏の樣な底を作り、其底を更に深く抉り掘つたのが二潭である。連珠潭の名は、元と二潭の總稱で、近來其上位のを、特に眞珠潭と名けたらしい。

潭の沿岸は、餘程急傾斜である、十日程前に、高城の齒科醫某が、妓生と手を連ねて、情死した所は、此眞珠潭で、眞珠潭は遂に心中潭となつたとは、案內者鄭の戲言であつた。予は此齒科醫の溺死談を聞かされたのは、此處で第三回目である。此齒科醫は、家庭の事情上、單身高城に出張開業し、一人の妾があつたが、此妾に不義の行爲があつたのを憤り、溫井里に於て、自暴自棄的流連の結果、妓生を伴ひ、玉流洞に豪飲し、醉步蹣跚、妓生と手を取つたまゝ、潭中に滑り落ちて、溺死したといふことである。當時近くに、他の人々も居たのだが、之を救ひ上げる方法がなく、見す見す溺死を遂げさせた程、沿岸の傾斜は、急峻なのである。

此變死事件は、予は高城で、高城館の女中から始めて聞き、溫井里で、嶺陽館の主婦からも聞かされ、今朝出發の際も「眞珠潭に落ち込まぬやうに御注意下さい」との戯言を受け、「妓生を連れぬから大丈夫です」と、予も笑つて來たのであつたが、今親しく此潭に臨んでは、一片の哀情を催さずには居られぬ。

萬瀑洞には、悲劇の傳説を有する鳴淵潭があるが、今玉流洞の眞珠潭には、新たに此哀劇傳説を亦後昆に殘した。岩頭の感などと、洒落た暗示を後人に與へずば幸なりと、祈るのである。

眞珠潭から、右手の岩壁を、鐵鎖によつて上り、木梯を踏んで下り、溪流を渉り、雜木林を穿つて進めば、右手には轟轟の音を立て、岩壁を躍て瀉下し、碧潭に投ずる、高さ約五十尺の舞鳳瀑がある。左手には、蒼空の岩頭から、纖々として幾十百の銀線を、小止みも無く繰り出してゐる樣なのは、飛鳳瀑で、同じ瀧壺に落下するは、異彩を放つ景趣がある。

殊に飛鳳瀑の景致に至つては、眞に奇觀麗觀の極みと謂ふべきである。四五百尺の高さを有する一大花崗岩壁の上部は、稍緩い傾斜をなすが、やがて大なる幾段層の急勾配となり、各段層更に又幾十百とも數知れぬ、横襞の節理を呈し、左右を緣どる密林は、上部に至るに從つて、漸次矮縮し、十間許りの幅に、切り明けた樣な、而も其岩面は、銀の燻しの稜襞を磨いて、稍地肌を現はしたといふ樣な、得も言はれぬ紫褐色を帶びてゐる。此崇高な感じを與へる斜面磐上の中部を、滑り落ち瀉ぎ落ちる水は、さながら無數の白龍が、珠を吐きながら天降るかと想はしむる。水量は頗る少いので、擴がつては丈餘ともなるが、狹まつては三四尺ともなる、而も水簾を透して、明に横襞を認め得るは、本瀑の特色で、水量の多からぬこそ、寧ろ幸であらう。世尊峰の一溪水が、此瀑を作つて、此處で玉流溪に落合ふのである。瀑は腰部の岩角に當り、輕く一折れするのが、鳳の飛ぶ形に似てゐるとて、此名を得たのだが、探勝者は、其腰部の岩角を往來して、一つの瀧を、頭上に見上げ、脚下に瞰下すも、

亦異數である。

飛鳳瀑の景致と相似たものを、內金剛に求むれば、黃泉江の水簾洞である、內地に求むれば、日光の白雲瀧である。されど其大觀に至つては、彼等は到底此れに比すべくも無い。唯彼等の長所は、其幽邃にあると謂はねばならぬ。

飛鳳瀑を過ぎ、嶮阻の石逕を攀ぢ、山腹を遶れば、一大磐岩の罅隙があつて「淵潭橋」の三字が刻まれてある。昔時は此岩石が、自然の架橋を成してゐたのだが、其後壞裂して、今の樣になつたのだといはれてゐる。岩角を辿り、對岸に渡り、洞窟の懷の樣な、絕壁下に達するとき、對岸には、九天より落ちて、九地を穿つ、一大瀑布と一深潭とが、眼前に展開される。是れ實に外金剛の溪流を代表する九龍淵で、瀑布は九龍瀑、又衆香瀑と稱するのである。

滿鐵京城局編、金剛山探勝案內（大正八年發行）には、金剛門より九龍淵に至る間の經路叙景に、頗る紛錯の點がある樣だが、同局編、朝鮮鐵道旅行案內附錄、金剛山探勝案內（大正十三年發行）の方が正しい。

九龍瀑は、全金剛第一の巨瀑といはれる。實に壯觀である、雄大である。されど其水量に於て、其高さに於て、其岩壁を蔽ふ樹木に於て、之を日光華嚴瀑に比すれば、遜色がある。予は曾て內地に於ける瀑布としての覇を競ふといふ、立山の稱名瀑、白山の白水瀑、及び北海道第一と稱する壯瞥瀑も睹た。殊に華嚴瀑は、前後四回に及び、季節としては、盛夏に晩秋に。時刻としては、曉景に眞晝に暮色に。天候としては、晴天に陰霧に。隨分種々の觀察を得たのであるが、綜括的の景致は、遂に華嚴瀑を推さねばならぬ。

案內者鄭によれば、九龍瀑の高さは三百尺、瀧壺の長徑は六十尺、深さ四十尺といつた。金剛遊覽歌（鮮人金圭瑱著）には、千丈白練飛流直下とあるは、素より文士の常套漢文式の形容詞に過ぎぬ。

朝鮮鐵道旅行案内（滿鐵）には、高百七十餘尺、瀧壺の深さは三十餘尺とある。又朝鮮鐵道旅行便覽（總督府編）には、直下百七十尺とあるも、本瀑は、水量が非常な增加を示した場合の外は、半ば岩壁を滑り氣味に落ち、殊に裾が折れて、そこに一つの小潭を作り、溢れて急湍となり、更に第二の深潭を作つてゐる。

水量の乏しいのは、本瀑の莊嚴味を減ずる第一缺點であるが、岩壁面の滑り落ちと裾折れとは、莊嚴味を減ずる第二缺點である。瀑上瀑下一面一枚の花崗磐岩から出來てあるは、如何にも明麗雄大な感じを與へるが、惜むらくば此岩壁を彩る樹木の乏しいのが、莊嚴味を減ずる第三缺點であらねばならぬ。

されど本瀑の長所は、大に他に存する。岩壁は花崗岩の特色として、明麗堅緻莊重の感じを與へ、水は玉女峰、毘盧峰、彩霞峰の圍める、天界の懷から漏れ來て、清冽玲瓏玉を欺き、此純潔な水を湛へた淵潭は宛乎水晶盤中綠玉を盛るといふ神秘的な光景を呈し、瀑上を威壓して峙つ怪巒奇峰は、神斧鬼鉞の極致を現出する。瀑に向つて左方懸崖には、朝鮮松や槭など、多少の蔽翳を成してあるが、右方には、極めて疎々點々として、瘦せた松の辛うじて根を岩罅に保つ景致は、清楚の感に打たれる。斯る特殊な諸點が相待つて、本瀑を靈化し神秘化すと謂はねばならぬ。

瀑に對し、右方岩壁百數十尺の高所に刻まれた「彌勒佛」の三大字は、神溪寺の發願にて、金圭鎭の揮毫にかゝり、三大字の全長八十尺餘、金剛全山中、最大の彫刻といはれてゐる。

瀑上更に神秘の境を藏する、所謂上八潭がそれである。上八潭を探るには、淵潭橋まで引返し、九井峰の密林を穿ち、崎嶇を攀登すること約二十町、九龍臺といふに達する。其處から瞰下せば、抉られた樣な絶壁の下、其底の研かれた樣な花崗磐中に、略〻圓形を成した、八個の碧潭が並列してゐる、各潭は急湍を以て連結し、次から次へと溢れ落ち、遂に九龍瀑を成すのである。

九龍淵は、有名な傳說を有する、昔楡岾寺の五十三佛と鬪つた九つの龍は、一時九龍沼に逃げ、更に此處に逃げ來て、瀑上の八潭に入つた八龍は、石を穿つて東海に逃げたが、瀑下に潛んだ一龍は、遂取殘されて、今尙そこに隱れ棲んでゐるといふのである。

予が九龍淵に着いたのは、正に十時であつた。朝來の曇天は、漸次濃度を加へ、白雲去來の間に、怪巖奇嶂は隱見し、雲霧は益〻低迷して、屢〻瀑身を橫ぎり、變幻極り無き光景は、復得難き幸運であつた。

濃霧は遂に沛然たる雨となつたので、九龍臺上八潭瞰下の豫定は、遺憾ながら之を他日に讓ることとした。

九龍瀑に對して、方二間位の茶亭がある、四方開放的の構造なので、雨は風に吹かれて、屢〻亭內の半ばを侵した。亭內數個の卓を遶つて、長椅子を列べてある。臨時出張らしい、三十前後の男子鮮人が一人居た、仲々快活で、其風采挨拶振りなど、一寸鮮人らしくも無いが、其差出した名刺に「金敬玉」とあるので、鮮人たることは疑なく、名刺の隅に「金剛山九龍淵」とあるから、探勝時期には始終出張するのであることも判つた。然し今は時期稍早く、千客萬來といふ譯には行かぬので、西洋料理用の器物なども見えたが、僅かに日本酒、麥酒の外、菓子としては、例の松の實羊羹ばかりであつた。

少々異つた繪葉書も見えたので、數葉を買ひ求め、記念スタンプを押して貰つた。其スタンプは、中央に其日の年月日を入れ、上部に「金剛之偉觀九龍大瀑」下部にローマ字を挿入するなど、內金剛には見られぬ、ハイカラ式なのであつた。

携帶した折詰辨當をしたゝめ、羊羹を切らせて番茶を啜り、九龍臺上で賞味すべく用意した干葡萄や氷砂糖など、彼等に分け與へ、一時半ばかり、神秘的幽境に談笑を試みたのも、一種の興味であつ

た。

大阪團體の先登者が二三見えたので、予は茶亭を辭し、歸途に就いた。時に十一時四十分。

雨は益盛んなので、用意した登山防水外套を着た。團體の人達は、多くは雨具の用意が無いので、樹蔭や崖下に雨を凌ぐべく、此處に二人彼處に三人といふ有樣、頗る氣の毒に見えた。我等が一廳臺に降つた時、嶺陽館から、團體の爲めに雨具を運んで來た人夫に逢つた。

雲霧去來の間に、玉流溪の仙味に浸りながら、溫井里郊外に歸着したのは、午後一時三十分であつた。

鄭案內の語る所によれば、玉流溪は、九龍淵までには、十二回の徒涉を要するとのことである。

雨はさながら盆を覆す樣に澍ぎ、電光閃き雷鳴轟き渡り、九龍淵に居殘りの龍でも、出て來たかと思はるゝばかり、物凄き天候となつた。偶金剛山ホテルの前に差しかゝつたので、奇貨措くべしでは失禮だが、雨を避けながら、見學の爲め立寄つた。

曩きに下關鮮滿案內所を尋ねたとき、同所主任鈴木豐作氏（酒田人）から貰受けた、紹介名刺を添へたので、給仕の人達は、予が外套を取つて滴る雨水を拂ふやら、湯にて足を洗つて呉れるやら、如何にも丁寧を極めた。明るい廣い應接所で、支配人和田與一氏の快活な談話に接し、參考書類も貰ひ受けた。和田氏は、始終嶺陽館に見えられるのであつた。

金剛山ホテルは、溫井里郊外の高みにあつて、右は文筆峰、左は溫井川を隔てゝ、鉢峰、大慈峰を望み、前には原野展開し、小丘起伏して高城に亙り、恰も箱庭式の觀がある。建築は、諸威チアレイ風で、特設電燈の設備あるのは、洋館としては無くてはならぬ。建築物も庭園も頻りに手入中である。

前の廣い果樹園には、桃、櫻桃、梨、林檎等の植附を見た。

海金剛と共に、朝鮮東海岸に於ける雙璧と稱せられてゐる叢石亭は、溫井里から元山に至る中程に

在る。叢石亭とは、人工的建築物では無い。庫底の港口數町に亙つて斷續する、大玄武岩から成つた奇勝である。金剛山及海金剛は、全く花崗岩から構成されてゐるが、庫底から元山にかけての海岸嶋嶼には、玄武岩が現はれ、殊に叢石亭は、最も見事な柱狀節理を呈し、或は巨人の立てる如く、或は障壁の如く連亙し、古羅馬の廢墟の樣に怪しく峙ち、或は海を抱いて彎曲し、紺碧の海は、其岩脚を洗ひ、岩上青松を翳すといふ美觀壯觀は、但馬の玄武洞や、筑前の芥屋（ケヤ）など、比較になつた話では無い。叢石亭を親しく探るには、溫井里から元山までの自動車便を借らねばならぬ。金剛山探勝案内に挿入した附箋によれば、滿鐵會社直營の自動車が、此間を定期運轉する樣にも見え、又朝鮮鐵道旅行案内には、滿鐵會社直營のは、溫井里、長箭間に止まり、元山までの間は運轉しない樣にも見えるので、之を和田氏に質したに、後者の通りである。若し一人にして此間に自動車を賃するならば、四人分の賃金を佛はねばならぬことが判つた。

又金剛山探勝案内には、長箭元山間の航路は、朝鮮郵船會社に於て、六月一日より十月末まで、一ヶ月六回以上定期運航する樣に見え、朝鮮鐵道旅行案内には、同會社は、同上期間毎日定期に一往復づゝ運航する樣に見え、是亦一致を缺くの點があるので、和田氏に質したに、四日に一回の運航であつた。然しこれは、やがて毎日となるらしいのであつた。

又溫井里、高城間。長箭間には、滿鐵會社直營の自動車は、運轉してあるが、釜山で發行した「金剛山探勝廻遊乘車船券」の賃金中に、此兩者の區間は、含み居らぬことも、亦和田氏の說明によつて明瞭した。

小雨となるを待つて、嶺陽館に歸り、溫泉に浴びて、終日の濕氣を拂つた。

大阪團體の人達は、餘程遲れて歸つて來た。此暴雨には、老人と婦人とは、隨分困られた樣子で、實に氣の毒であつた。

11、萬物相

觀音瀑、舊萬物相、新萬物相。

六月十二日　雨、晴。朝溫井里六〇、夕同六二。

暴威を逞うした雷公は靜まつたが、雨はなほ全く止まぬ。今日は、外金剛山岳を代表する萬物相を訪ふ日程である。溫井川といふ可なり川幅もあり水量も多い川を徒渉せねばならぬ。昨日來の暴雨によつて、異常な增水であることは、宿に居て、川瀨の音が喧しく耳に入るのでも判る。止むを得ずんば、入湯休養の傍、萬年筆を繪葉書に走らせやうかなど思つてゐる中、雨も止み、案內者鄭も來たので、行けるだけ行かうと、早速支度して出發したのは、七時を稍過ぎた。

予が斷行を聞いた大阪團體の人達も、今日亦同一方面の豫定なので、其案內者に命じて、予が徒渉の能否を視察させた。

溫井里の西郊、溫井川に架けた、長さ二十間許りの霞橋といふのがあつたが、昨年の洪水にて流失し、今は其再築工事に取りかゝつてゐる。

此處を對岸に渡り、川の左岸に沿うて遡る路は、溫井嶺を越えて、末輝里、化川、淮陽方面に至るので、萬物相への徑路は、亦此路に由るのである。今は河中を橫ぎり、點々配置した石上を飛び渉らねばならぬ。平常ならば、飛石は大抵水上に現はれてゐるのだが、今は水面下に沒すること尺餘に及び、而も流水矢の如く、踏み込む脛に激しては、飛沫腰部を濕ほす程である。若しも怯氣だつて脚の踏込み緩ければ、水勢に奪はれる虞があるので、思ひ切つて强く脚を投じたのである。花崗岩から成つた溪流のことゝて、增水の割合には、濁りみは僅かであつて、水中の石面を認め得たのは幸であつた。予が金剛杖は、木曾御岳よりの記念杖で、比較的長いので、溪流徒渉には便利であるが、斯る激流には、矢張脚の踏込みと同樣、特殊の使用注意を要する。

我等が無事徒涉卒業の狀況を復命すべく、大阪團體の案内者は歸つた。「彼等はとても駄目だらう」とは、鄭案内の口から漏れたのであつた。

郊外の標柱に「新萬物相二里、往復六時」と註されてあつた。

右に水晶峰、左に觀音峰を仰ぎつゝ、徑は愈峽谷に入り、氷石の美は、漸次加はつて行く、此處は寒霞溪の峽谷で、郊外霞橋の名は、此れに因めることが首肯れる。

路の肌の露はな、樹木が少い、而も隨分廣い谷道を進むに、屋大の花崗岩は、路傍に點在し、時には路身一面に亙つた岩面を踏むこともある。路を横ぎる小流も多い。

七時四十分「寒霞溪入口」と註された、白木標を路傍に見た。時に雲間を漏れた、朝日の光を受けて、觀音峰にかゝつた雲霧は、忽然鮮明極まる七彩の虹を現じ、正に天女が寶玉の胸飾を粧ふかと想はしめた。

奔湍岩を嚙んで、白雪を吐く樣な溪流を隔てゝ、觀音峰の皺襞には、數多の飛瀑がかゝり、嵯峨たる岩嶂は天を摩し、松樹は密に其間を縫うて、景致を添へるので、之を黄泉江の幽邃、萬瀑洞の明麗、玉流洞の豪壯に對し、一種雄健の感じを與へる。

途中往々二三戸許りの部落があつた、路傍觀瀑の好地點には、臨時的休憩店もあつた。卓と腰掛とが設けられ、棚には松の實羊羹、干葡萄、森永の菓子など見えたが、番人は居らぬ。鄭が傍に備附けの木鐸樣なのを叩いた音を聽きつけて、一町許りも離れた人家から、若い美人が番茶を持つて來て、羊羹を添へて出した。無論鮮人である、ビールは如何、サイダーはなどと、頻りに茶屋式女中振りを發揮した。本山茶屋の羊羹には、既に免許皆傳なので、此處では立派に、安宅の關を通過した。此瀑は溫井瀑といつた。

八時二十分、觀音瀑を仰ぎ望む地點に達した。觀音瀑は、其名の通り、觀音峰の岩壁に懸り、其形

式は、王流溪の九龍瀑に似て、水量は寧ろ大に彼を凌駕する。或は昨日雷公の援軍に接した成績かも知れぬ。其上部に、飛鳳式瀑布が、曲折數百尺を瀉下する壯觀は、得易からぬ景致である。瀑側には、松や白檜が疎らに見える。

觀音峰上の觀音石は、觀音菩薩の立像として、出來榮え良く、其右にある虎石も、恰好申分が無い。

左手を流れる谷川は、勾配漸次急を加へるので、石を嚙む淙々韡々の聲も高く、谷も追々狹まり、崖上には、赤松、朝鮮松、朝鮮樅などの針葉樹が多いが、裾を蔽ふ樹林には、ニレ、ナラ、ヤチダモ、カヘデ、イタヤカヘデ、ヤマザクラ、ウハミヅザクラ、アカシデ、エンジユ、サハグルミ、カシハなどの闊葉樹を見た。ミヅナラは內金剛にも見た、カシハは內霧在嶺の東側から、ポツ〳〵目に入つたが、此處には隨分夥しい。種類の多い此闊葉樹林は、實に秋を彩る取り〴〵の好資料たるを想はしめる。

濃紫紅色のテウセンハギや、暗紅色のテウセンウツギも咲いてゐた。こゝのウツギは、內山のそれに比べて、花色は頗る淡い。深綠の葉蔭から、紅蕋白葩の雅致を呈するオホヤマレンゲも見參に入つた。

オホヤマレンゲの產地としては、大和大峯山（オホミネサン）が名高い。毛利梅園の百花譜に、此事を載せ、白井博士の紀行にも、大峰山彙中の佛生岳（ブッシヤウ）で、頗る廣い區域に亙る該純林に接したとある。予も其山彙を跋涉の際、山上岳（サンジヤウ）から彌山（ミセン）に至る間にも、隨分多く目に入つた。大山蓮華の名は、本山の名に因んだのであるが、大峰山下の入達は、白蓮華といつてゐる。予は今金剛山に入り、全山到る處の溪谷に於て其美觀に接し、其芳香に浴するを得たのは、終生の印象であらねばならぬ。此地の人達は、山木蓮といつてゐる。

谷川の音に和する鶯鳴を聞きながら、密林を縫うて坂路を登り、九時「萬物相入口」と書いた木標

を見、同二十分、牙の様な圓錐形の巨巖の麓にある、萬相亭に着いた。途中二三の臨時的休憩所もあつたが、皆無人であつた。萬相亭主人は內地人で、全山中、內人經營唯一の茶屋である。復例の羊羹を食べ、番茶を啜つた。此處から溫井川の本流に沿うて進めば、約十八町にして、溫井嶺の頂上に達するのである。

白ペンキ塗の標札に、金剛山保勝會の名に於て、左の揭示を見た。

舊萬物相　二町　　新萬物相　十町

奧萬物相　十八町

溫井嶺ヲ經テ長安寺　八里

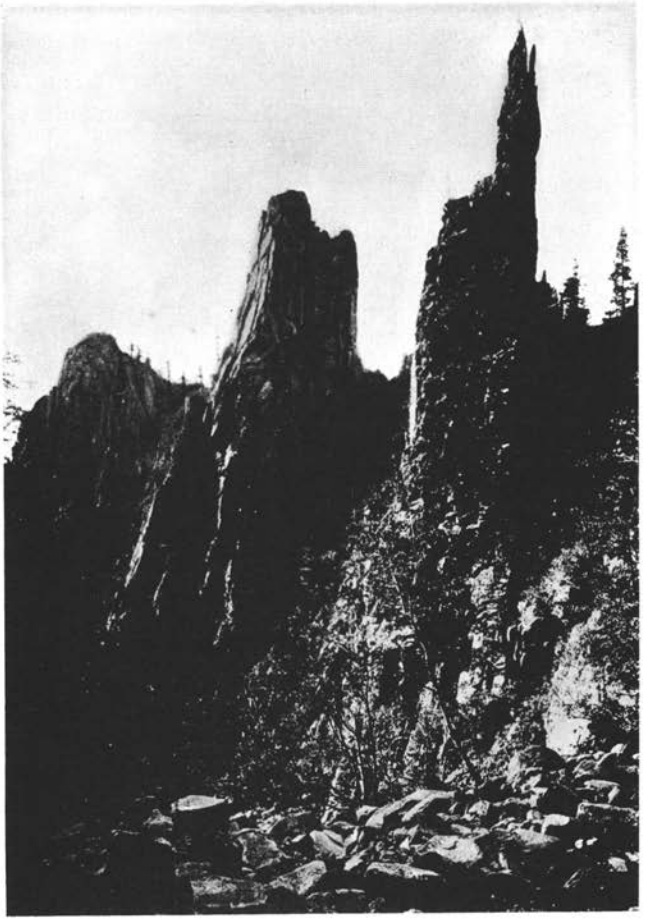
萬相亭から、溫井嶺道を進むこと三町許り、一峰を迂迴すれば、所謂舊萬物相に出るのであるが、我等は、萬相亭の屋外四阿式の休憩所に憩ふこと十分許り、捷路を取り、累々たる轉石を踏んで進んだ。

十時舊萬物相の奇岩、三仙巖といふが鼎立する所に着いた、殆ど垂直線的側面を作つて、矗立十丈許り、傍には其形から名けられた鬼面巖がある、岩頭の所謂鬼面は、大きな口を開いて大空に咆哮する様、夕陽斜めに之を射るとき、實に物凄き獰相を呈すといはれてゐる、鬼面巖の名が、餘り俗氣であり、且つ獰猛味を感ずればとて、近頃奇面巖とも書いてある。三仙巖は、實に優秀な岩嶂である。

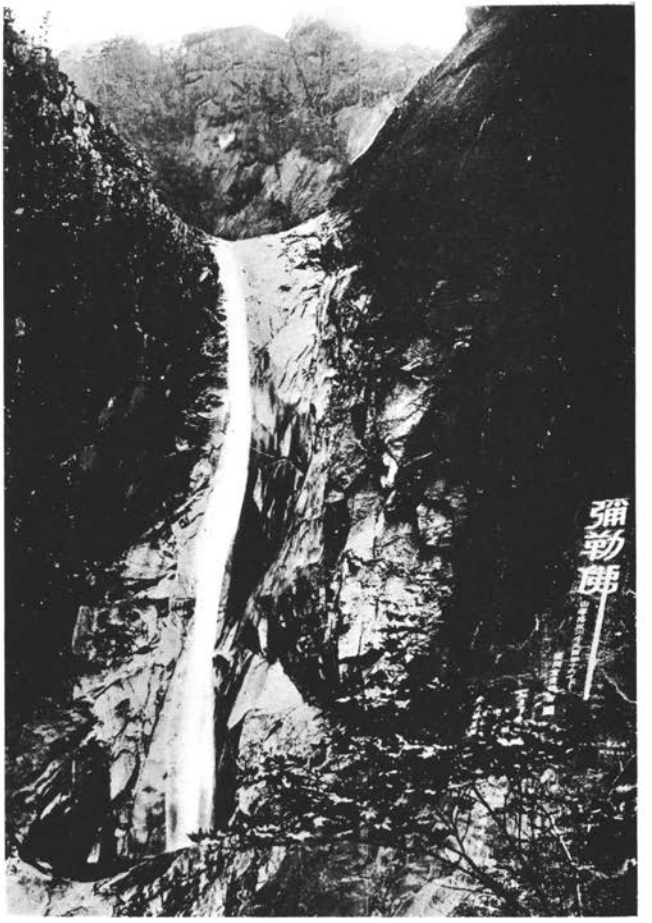
鄭は、萬相亭に煙草入を忘れて來たとて、取りに戻つた。予は留守仕事として、鐵欄に賴り、三仙巖の一つに攀ぢ登つた。密林に裾つけられた溪谷の前後左右は、銀光燦然たる劒戟を並べ立てた様な、所謂新萬物相、奧萬物相の怪岩奇嶂簇立し、例によつて、千古磨き上げられた。花崗岩の白き河床を、珠玉を吐きながら瀉ぎ下る溪水を、見上げ見送る眺矚は、既に仙境に入つた心地する。

三仙巖及附近にて、目に入つた植物には、ギバウシユ、ミヤマキンバイ、カラクサザクラ、テウセ

外金剛萬物相三仙巖



外金剛九龍瀑



瀑上岩嶂を點綴せるは概ね朝鮮松

ンキンレイクワ、テウセンウツギ、テウセンライラックなどがある。隱仙臺で目に入つたタカネキスミレの一品を、復此處でも見た。

三仙巖上には、瘠せた朝鮮松が點綴する。

三仙巖右手の山上に、馬岩といふのがあるが、其恰好如何にもと首肯れる。

やがて鄭が歸つて來たので、新萬物相に向ふべく、三仙巖脚から溪流に降つた。三仙巖を仰ぎ賞し、或は三仙巖上から、當面の怪巒奇峰を眺瞰する景致を舊萬物相と稱し、萬物相を探勝する普通の人達は、此處だけで引返すので、路は甚だ明瞭であつたが、此處から新萬物相へは、路の形など殆ど無いといつてよい。殊に此溪谷には、二三の輻射谷があるから、案内者の必要がある。

三仙巖脚からの下りは、數十尺の部分が、甚だ急傾斜で、且つ珍らしくも緻密な赤色粘土を現はし、雨後のことゝて、滑りに滑つて閉口した。

溪流に下つてからは、可なりに急な花崗磐岩の河床を踏んで遡るのであるが、幾度か急湍を縫ひ、時には全く湍中を逆進するので、噴雪湍中更に雪を飛ばす有樣、壯觀といはんか、悲劇といはんか、飛沫は容赦なく、腹部までも濕ほした。此處の磐面は、急勾配である上に、幾分水垢の氣味があるので、護謨底足袋を穿いた予は、上りは辛うじて無事であつたが、歸途の下りには、屢〻湍中に尻餅春いたり、鄭案内者に支へられて、危く顚倒を免れたこともあつた。護謨底の滑りを防ぐには、藁繩を趾裏から甲にかけて結ぶとよい。これは雪途、護謨靴に施すものが多いのである。鄭は朝鮮式の草鞋であつたが、滑りを防ぐには、藁製のが好い。予は以前、足蹠の當りが柔かいので、布製や麻製の鞋を、特に調製したこともあつたが、前者は泥濘附着の憂があり、且つ兩者とも、頗る滑る憂があつた。

急湍を右に見、溪流と別れて、路の形が有るか無いかといふ崖側を上つた。非常な急峻で、岩角、木の根、灌木の枝、草株などが、辛うじて手がかりとなるのである。兎角して、玉女峰の絕頂に近い

小さな臺上に着いた、安心臺といつてゐる、時に十一時二十分である。先づ一と安心といふ處、漂う（ダマヨ）ライラックの香に浴びながら、前面には、玉山劍峰の美術を展開する、天界の食堂にて、辨當をしたためた。時に咸鏡南道のものだといふ二人の男が上つて來て、暫く休み、頻りに鄭と談話を交換し、手近にある朝鮮松の毬果二三を採り、一と足先き登つて行つた。

此處から先きは、金剛杖は寧ろ邪魔となるので、安心の出來る岩間へ、一時預けとし、やがて安心臺を辭し、新萬物相の展望臺といはれる玉女峰へと歩を進めた。安心臺上から數十間は、稍下り氣味で程なく岐路となる、直進すれば奥萬物相に達するので、小さな標柱に「奥萬物相路」と書いてある。新萬物相へは、左折直ちに懸崖を攀ぢ登るのである。

朝鮮鐵道旅行案内（滿鐵京城局編）には、「奥萬物相は、其直路に當り、新萬物相へは、途中から右折するのである」とあるが、これは左折の誤りである。同書は、予が手に入つた參考書中、最近（大正十三年一月二十日訂正再版）の發行であり、其附錄金剛山探勝案内には、金剛山附近圖、金剛山域圖、内外金剛眞景繪圖、寫眞版等澤山添へ、記事内容亦頗る豐富精細で、好個の參考資料として、推重するのであるが、往々此種の誤りを見たのは、所謂玉に瑕と思はれた。尚其二三を擧ぐれば、内山「萬瀑洞と八潭」の部に「若し此處から右して香爐青鶴兩峰間の溪谷を遡れば、青浩淵（青壺淵）を經て」とあるが、右は左の誤りである。「内霧在嶺越え」の部に「楡岾寺の手前、數町の處から左折すれば、八町程に船潭萬景洞の勝地がある」とあるが、左折は右折の誤りである。外山「九龍淵と八潭」の部に「飛鳳瀑を過ぎて右岸に渡り」とあるが、右岸は左岸の誤りである。其他、流れを遡る人からいふ左手右手を、川の左岸右岸と錯誤した點も、往々認めたのである、案内者附きなれば、殆ど考慮の必要もないが、單獨旅行者が、此記事を唯一の指南とする場合には、究地に陷ることが無いとも限らぬから、一寸附記したのである。尚序でにいへば、朝鮮鐵道旅行便覽（朝鮮總督府編、大正十

二年十二月二十五日發行）「萬物相」の部にも、天女峰頭から下つて、右に折れ、奥萬物相に至る、といふ樣な記事があつたが、この右は左の誤りである。

玉女峰の懸崖を攀ぢ登る麓の左手に當つて、自然の岩窟がある。靈泉がタク〳〵と滴り落ちてゐる。怪しげな針金を賴りに、殆ど懸垂的に登るのだから、握つた掌は赤くなるが、命の綱なれば、痛さなどは問題では無い。「近頃探勝の繁昌につれ、新萬物相にも、極めて稀に、女學生の案内もすることがあるが、此針金昇降の藝當を、下から見上げては、何かの御開帳は見物である」とは、鄕案内の笑話であつた。險山跋渉の女人にして、體操服のやうに、袴の裾に括りがあるか、若くば猿股を用ひぬとは、不用意千萬といはねばならぬ。十間許りもある針金登りの藝當を演ずれば、頭上から威壓する樣な巨岩に撞着する、而かも僅かに身を横たへて通過し得る、自然の石門で、此處を潛れば、天地は忽ち開け、當面には驚くばかり鮮かな深谷を隔てゝ、千山萬岳は、怪を競ひ奇を爭ふ景致を呈する、之を裏萬物相といつてゐる。石門の壁面には「金剛第一關」の大文字が刻まれてあつた。金剛山には、金剛門といはれる自然の大石門は、各所にあつたが、其標高や、其環境の關係上、此處の石門は、如何にも崇高な天界の關門らしく首肯れる。白ペンキで、岩面に「元中七十人」と書いてあるは、元山中學の學生七十人が登山した記念らしい。

石門を潛つて、眼前に展開する奇觀、既に言ひ知れぬ驚異に打たれるのであるが、而も我等の頭上には、更に矗々として聳え立つ、玉女峰の絶巔を仰ぐのである。此絶巔を極むるには、尙も針金に縋つたり、脚下には所謂千仞の壑を瞰下しつゝ、懸崖に蝸附して、歩一歩と進めたり、更に三四尺の距離もある岩頭から岩頭へ飛び越えねばならぬ。眞に一歩誤れば、此身は微塵といふ危險を感ずるのである。

多くの紀行に、此峰頭に登つて、心臟の鼓動が止まぬとか、足が震へて直立することが出來ぬとか、

見えるのに徵しても、此境地に臨んだ一般登客が、如何に恐怖に打たれるかを察するに足るのであるが、唯予は自らも不思議に感ずる程、斯る至險の境に臨んで、前の人達の樣な、餘りに恐怖的心狀を起さぬは、或は數十年來、山岳跋涉の體驗的習性であるかも知れぬ。

案内者の語る所によれば、新萬物相を探るものは、安心臺まで登つて引返すか。左なくば金剛關を打止めとするのが、多いらしい。望軍臺鐵鎖の不完全なことは、前既に之を述べたが、それでも此處のに比べては、樂であつた。毘盧峰の金銀梯の險は、稜角を有する累々たる巨岩の上を、次から次へと飛び登り、踏み越えるので、耐久的體力を要するが、然し垂直線的懸崖を、攀登する樣な危險は、比較的少い。玉女峰頭は、金剛山中危險の極みであると思はれる。

鄭は危險の地點に際しては、始終親切に注意助力するのであつた。我等が難關難所を無事通過し、玉女峰の絶巔に立つたのは、正に十二時であつた。五萬分一圖によれば、標高九百四十三米とあるから、鄭が三千百十二尺と告げたのは、正確であつた。

絶巔に突起した岩面に、草書で「天仙臺」と題し「金圭鎭書」と刻んである。最近に於ける金氏の筆蹟は、本山の各所に、著名な石刻として遺るであらう。

玉女峰絶巔に於ける眺矚が、所謂新萬物相である。西北五峰山（一二六三・七米）から、東方勢至峰（一〇四一）を經て、文珠峰（九〇六）水晶峰に亙り、矗々として鋭く天空を衝く、怪岩奇嶂は、遠く近く相重疊密植すること幾千萬、或は百錬千磨の寶劍を立てた樣な、或は神仙の手に成つた玉山晶筍を並べた樣な、而も其裾から皺襞へかけての闊葉針葉樹の粧ひ、其莊嚴、其威靈の感に打たるゝこと、予が未だ曾て遭遇せざる所である。殊に觀者が少しく位置を轉換したり、或は天候の變動によつては、千變萬化端倪すべからざるの景觀に接するのである。此景觀を叙するに、或人が「白骨蒼空を衝くと」比喩したのは、餘りに俗味であり、或人が「重疊波濤の如し」と形容したのは、餘りに平凡

に過ぎる。

五峰山より勢至峰に亙れる複鋸齒的の連峰は、更に細別して、無涯峰、釋迦峰、天柱峰、晩霞峰、鬼峰、三尊峰、羅漢峰などの名稱がある。

玉女峰を中心とする四周の峰巒は、風化作用を受くること最も著しく、所謂神斧鬼鉞の極致を呈し、其垂直線的岩側は、眞に人をして、天柱峰の名の、單に形容詞的美稱ならぬを首肯せしめて尙餘りあをる思ふのである。

內地に於て、此大景觀に比すべきものを求むるなどは、素より問題とならぬ程隔たりがあるが、强いて之を擧げたならば、妙義山と立山の劍嶽であらうか。されど妙義山は、餘りに規模が小である、而も集塊熔岩から成り立つた、其山相色彩は、脆弱であり陰氣である。劍嶽に至つては、約一萬尺の天空に聳え立つので、流石に崇高な感じはあるが、花崗岩質より成るといふ其岩面は、餘りに黝暗色を呈して、淸淨の感じが乏しい。予は始めて金剛山に入つて、白皚々たる岩嶂を遠望した時、其光澤色彩は、花崗岩の劈裂岩面が、眞肌其まゝを現はすものかと思つた程、銀白色であつた。されど毘盧峰に登り、其金梯銀梯を彩る、金銀の化粧は、天つ乙女が、幾千萬年の技巧を凝らした、地衣菌の賜であることを親しく認めて、一入感に入つたのであるが、萬物相の天界に於ける岩嶂のそれは、更に又幾段の莊嚴鮮麗さを加へるのである。殊に雲霧去來の瞬間、薄雲を透した日光の投射する時、そこに最も鮮麗な銀白色を呈する。而も此岩壁を粧ふ千古の白苔こそ、朝暉夕陽に映じては、淡紅、淡紫、紫紺、紫褐の光彩を現じ、金剛山特徵の岩石美を發揮するのである。

西南は、脚下斷崖幾千尺の深谷を隔てゝ、觀音連峰に對する、此深谷は、即ち溫井嶺に通ずる徑路に當り、針葉闊葉の混淆樹林は、鬱蒼として深い廣い谷を埋め、鮮かな新綠の大觀は、內山白雲臺のそれをも凌ぎ、更に錦繡織り成す、紅葉期の絕大美觀を偲ばしめる。

玉女峰は又天女峰の名がある。其名既に優雅であるが、玆に相應しい傳說を有する。天女粧浴の石壺といふのがそれである。之を觀るには、絕頂に突起した岩に抱き附き、裏萬物相方面の深谷に向つて、上體を伸し、思ひ切つて俯瞰せねばならぬ。鄭は萬一を慮り、予が脚部を握り、自らは更に岩根にしがみ附いて呉れた。所謂石壺は、百餘尺の直下に當り、平滑な磐上に、順序正しく三個相並び、殆ど圓形な自然の窪みである、大なるは五尺餘、小なるは一尺餘とのことで、餘り深くも無いが、どんな旱魃でも涸れぬ靈水といはれ、鮮人達は、之を飲めば難病を治する効ありと信じ、萬難を忍び、危險を冒し、此水を齎すとのことである。三個の石壺の外、尙缺損した樣な小壺が、二個ほど見えた。

玉女峰は其名に相應しい、尙一つの優しみを有する、四周の峰巒皆其絕頂鋭き劍戟狀を現ずるに對し、獨り玉女峰は、其頂上稜角の取れた丸味の突起を呈する、而も其岩壁には、清瘦楚々たる朝鮮松や香檜に伍して、僅かにシロシヤクナゲ、ゲンカイツヽジ、テウセンライラック、テウセンキンレイクワ、カラクサザクラ、ヒメアヤメの點々たるは、正に是れ天女の簪か笄かと忘はしめる。

玉女峰を擁する四周の峰巒は、其標高に於て、或ものは肩を並べ、或ものは見上げ、又或ものは見下すといふ、所謂參差嵯峨たる景觀は、玉女峰頭からの眺矚が絕好の位置と謂はねばならぬ。若しも玉女峰頭の標高が、群を拔くこと毘盧峰の樣であつたならば、展望の偉大は加はるべきも、眺矚の美觀奇觀は、却て低減するであらう。

玉女峰を中心とする、所謂新萬物相の大景は、之を內山望軍臺上に比べて、其山相の著しく鋭尖的垂直線的を呈するは、確かに男性的である。されど內山にも亦此種男性的を發揮するものがある、衆香城の奇嶂がそれである。毘盧峰の金銀梯下より禮讃する所謂衆香城の一萬二千菩薩の靈境を更に擴大したのが、新萬物相の大觀大靈境であらねばならぬ。新萬物相に遊ぶものは、眞に我即菩薩の境に

入る心地がする。

玉女峰の絶巓は、常に風が強い霧が深い日が多いといはれてゐる。此日寒靈溪の入口では、雲間を漏るゝ旭光を見たのであつたが、朝虹は雨の兆といふ諺に違はず、山頂を去來する濃霧は、遂に雨となり、風亦俄かに加はりたれば、眺瞰三十分許り、惜しくも天仙臺上を辭して、下山の途に就いたが、風雨は益激しいので、金剛第一關内に避くること數千分、小雨となるを待つて、例の針金降りを演じ、少からず溪流の滑りに惱まされ、三仙巖脚赤土急坂の難所を避け、河床傳ひに萬相亭に出で、休憩した。

我等が安心臺に降り着いた時、大阪團體中の若い元氣な人達が五人上つて來たのに逢つたが、殘りの人達は、舊萬物相だけで引返し、萬相亭に休んでゐた。今朝の暴流を冒し、婦人が此處まで奮發されたのは、感心のものであつた。

午後三時三十分嶺陽館に歸着した。溫井里郊外、溫井川の飛石渉りは、歸りには減水の爲め、平易極まるものであつた。

四時頃から、空は霽れたので、郊外散歩を試みての歸り、金剛山産物陳列所といふを觀た。黑水晶、長石、蛇紋岩、並に此等を材料とした、印材、硯、文鎭などの文房具、朝鮮松實（百匁二十五錢）、松の實飴、松の實羊羹、繪葉書、金剛山眞景繪圖、菊池幽芳著金剛山探勝記など陳列され、即賣もしてゐたが、小規模で、品種亦貧弱であつた。

12、鉢峰　水晶峰

六月十三日　晴、雨。朝溫井里五八、夕同六〇。

鉢峰（ケチホウ）は、全金剛中、特異な山相を呈するからとて、岩本巡査から勸められ、鄭案内も亦探勝の價値を力説し、尙水晶峰は、自分が全く開山の元祖であるから、序にと附加するのであつた。

此日天氣も漸く霽れ上つた模樣だから、普通探勝客が足を入れぬ、否殆ど其名すら知らぬ、鉢峰と水晶峰とを探るべく、午前六時半、溫井里を出發した。

此日大阪團體は、楡岾寺を經て、內金剛に行くとて、鄭聖國を案內とすべく、交渉があつたが、鄭は既に予が案內をすること二日といふ親みもあり、且つ彼は予が山岳趣味に共鳴し、予が山岳跋涉に多年の經驗があるのに安心の點もあるらしく、大阪達の方を拒絕し、予が案內をすることにしたさうである。鄭は內地語に熟達し、內外金剛を通じての案內者としては、第一流株である。彼は數日前、露人英人の案內もしたとのことである。

溫井川を渡り、爪先上りの畑道を進んだが、不圖顧みれば、對岸に聳ゆる觀音連峰は、今や旭光に映じて、淡紅紫色を呈し、峰頭には幾層の迷雲搖曳し、崇嚴極り無き光景に接し、非常な快感に打たれた。それで早速鄭を走らせて、元山から出張してゐるといふ剛明寫眞館主明元を招いた。溫井里には、此外尙一人、京城から出張してゐる寫眞師もあるが、明元は屢予が宿に來訪したこともあり、且つ技術も上手だとのことであつた。

間も無く、寫眞師は來て撮影して呉れた。此時予は、何か手に持つ記念品として、當時本山に特殊の美觀を添へてある大山蓮華をと思つたのであつたが、生憎附近には見當らぬので、止むなく、朝鮮萩を左手に、金剛杖を右手にしたのであつた。觀音峰の名を負ふ山は、全金剛中には、三四に止らぬが、此處のが規模最も雄大、其最高點は、一千百三十二米を有し、且つ此の撮影の背景とした緣もあるので、予には最も親み深い印象を與へたのである。時に午前八時であつた。

此處からは、右手に近く大慈峰（三六二米）を仰ぎ、僅かに認め得る山逕を辿つて、淺い谷に入るのであるが、臍以上にも達する灌木雜草は、左右から遠慮も無く朝露を注ぐので、先きに立つ鄭は、兩手に棒を揮つて、之を打ち拂つた。

八時三十分、水簾洞式の瀑下に着いた、五十間許りに亙つた、三十度位の斜面花崗磐上を、幅十尺許りの溪流が瀉ぎ下り、瀑腹に赤松の老樹が翳しある風致は、亦棄て難い趣があつた。まだ名が無いから予は水晶瀑と命名したい。此溪水は、水晶峰に發するのである。

此邊には、アカマツに伍して、クヌギ、ミヅナラ、カシハなどの闊葉樹が多い。テウセンキスゲ、キバナノナンテンハギ、及コオニユリ、キキャウの蕾尙固いのを見た。土人はキキャウの塊根を食用とすることを、鄭は語つた。

左に水晶、右に鉢の峰頭を望みつゝ、殆ど路形も無い溪流に沿うて遡るに、母岩の分解によつて生じた、不規律的結晶の石英が、點々所々に見えた。往々採集者の掘つた穴もあつた。

上るに從ひ、楢や赤松も追々矮縮し、且つ點々疎生するので、邪魔にはならず、無二無三に、峰頭目がけて突進し、鉢峰頂上に達したのは、九時三十分であつた。標高四百八十九米と註さる。

鉢峰は、其名の通り、溫井里方面から望めば、宛然鉢を伏せた樣な山容を呈してゐる。今頂上に登つて見るに、極めて緩傾斜な隆圓狀で、長徑數百間に亙る一枚岩が連續して、層々段階をなすこと、丁度極めて扁平な鏡餅を、漸次下層ほど大形に、幾層にも積み重ねた恰好は、一見、數囘に亙つた熔岩流の累層を瞰下す觀を呈する。岩面は暗灰色を帶び、米大、豆大位な石英の突起が、一面にあるので、滑るといふ心配は無い。土壤は無いから、全然樹木も草木も無い樣だが、極めて稀に、其窪みにテウセンキンレイクワとシキンカラマツの一品や、小形な莎草科禾本科の植物を見た。稍北方に片寄つて、高さ三四尺の赤松が數株、淋しげに立つのが、特に目を引いた。

標高の低い割合には、眼界頗る開け、南西には彩霞峰、毘盧峰、觀音峰、近く西北には水晶峰、千佛山（六五四米）を望み、海金剛や、長箭港內の船舶など、一々指點すべく、近く遠く渚に寄する白波の景致を眺め、脚下を瞰下せば、溫井里の部落には、白い亞丹屋根が多いのに對し、獨り金剛山ホ

テルの赤塗化粧が、特に目に着く。

山相既に甚だ異觀を感ずるのであるが、茲に更に不可思議な現象が三つある。

一枚式に連續した頂上の岩面上に、幾十百といふ數多の潴水孔の散在するのが、不可思議其一である。內山水簾洞にある洗頭盆や、外山九龍沼にある所謂九龍が潛み隱れたといふ岩穴は、內壁螺旋狀を呈するので、流水作用の結果といふ想像もつくが、此處のは、宛も石工が鑿り掘つた石臼式で、彼の新萬物相玉女峰下に於ける、天女粧浴の石壺と、其規を一にするかと思はれる。我鄉國の苗場山(ナヘバサン)や飯豊山(イヒデサン)上に、數多い所謂御田式の潴水が、腐植土質の輪廓を有するものとは全然趣を異にする。從て御田式池畔に、殆ど普通な附き物である、食蟲植物のモウセンゴケは、此處には之を產すべき餘地が無い。孔は不規律な圓形が多いが、形は一定してゐない、廣さは、大なるは二十尺餘にも達するが小なるは僅かに數寸である、深さ二尺以上のものは殆ど無い、又潴水を見ぬのは殆ど無い。此狹い淺い草氣も無い石壺の水中に、サンセウカジカ(黑魚)の棲息するのが、不可思議其二である。

サンセウカジカは、我鄉里金倉山(カナグラヤマ)の溪流にも產し、土人はセンガンムシと稱し、古來痔の藥として珍重され、炙つて食べるが、生きたまゝ呑むのが、最も有效だとされてゐる。諸國山中淸列な溪流には、多く見るので、今此處で目に入つたのは、敢て珍品とするのではないが、唯其棲息狀態を奇異とするのである。孤立的な一枚岩から成つた隆圓狀の山頂、而も直徑二三尺、深さ五六寸にも足らぬ小さな石壺の水中にも棲む、彼等の生活狀態こそ、不思議とせねばならぬ。斯る小量の壺水だから、旱魃には涸れるであらうが、彼等は如何にして此處に生々持續するのであらうか。又彼等の祖先は、何處から來たのであらうか。距離は餘りに有り過ぎるが、彼等は霖雨を利用して、南方水晶溪流か、若くば北方錦城溪流から、攀登的移住したのと想像するより、外は無いのである。

サンセウカジカは、其形キモリ(蠑螈)に酷似して稍小さい、背は黑褐色である、箱根の溪流に產

するものは、下腹が赤いといふが、我金倉山のは、此處のと同じく灰白色である。

此一種に、サンセウウヲ（鯢魚）がある。中國地方の深山に產し、大なるは七八尺にも達し、水陸兩棲動物で、十分成長の後は、主に陸上生活を營むのであるが、サンセウカジカは、殆ど水中生活をなすのである。

小形な石壺の潴水に、蛙の棲息するのが、不可思議其三である。此蛙は、予が內山水簾洞で、始めて見參に入つた、背は玄綠、腹は深紅であつた蛙と同じものであつた、突いても容易に動かぬ遲鈍さである。草木も無ければ、從て殆ど昆蟲の見舞も無からうが、彼等の食糧問題は、不思議であらねばならぬ。壺水中に蝌蚪の見えたのは、此蛙の兒であらう。

頂上は、勿論雄大とか、莊嚴とかいふ感じを與へる境地では無いが、登るには、さほどの困難も無く、標高の割合には、眺望が廣い、一枚磐岩で土氣が無いから、到る處に胡坐も出來れば、仰臥して日光浴も出來る。家族的遊步場にも、團體的歡樂場にも、頗る優良な山頂だと思はれた。他日溫泉の繁昌につれ、此處は好個の散步場となるであらう。

頂上の岩面に「鉢峰、南江書」と刻まれてあつた、一字方尺五寸位であらう。

十時十分、水晶峰に登るべく、鉢峰の頂上を辭した。隆圓狀の岩面を下れば、連續的な峯傳へであるが、路の形は殆ど無い。水晶峰攀登の山邏は、予が案內鄭君が、一昨年村費六十圓と、人夫二十人の補助とを得て、始めて開いたのだといふから、鄭君は、實に本山の開祖である。今此開祖を案內とするは、一種の快感を覺ゆるのである。

巨大な岩壁の裾を巡つて、幅三尺許りの小溪流が、右手から落ち來るのに逢つた。時に十一時である。水晶峰の頸部に當り、如何にも淸冽な水であるから、此處で辨當をしたゝめた。クロフネツツジは花旣に凋落したが、テウセンウツギ、テウセンハギは花盛り、オホヤマレンゲは此處でも亦芳香を

天界食堂に漂はすとは、感謝の至りである、休憩三十分の後、急崖攀登に取ッ掛つた。木の根、木の枝、岩角にすがり、僅かに鉈目を入れた一本木の梯子を攀ぢ、十一時五十分赤晶門に着いた。半圓形を成した自然の石門で、門の內面高さ約二十尺、幅二十尺餘、金剛山中予が見た石門中では第一に位し、其整然たることは、小豆島(シヤウドシマ)裏寒霞溪の石門と、出來榮が甚だ似てゐる。但彼は集塊熔岩、此は例によつて花崗岩である。

門前に峙つ巨岩を對面石といつてゐる、對面石の稱呼は、神佛禮拜の各靈山には、隨分多いのである。

山頂近くに、天門と稱する自然石の小門を見る。附近には赤松もあるが、朝鮮松の老樹が疎らに點在する、杜松も見えた。予は深山に入り、此種針葉樹の靈香に接するとき、こよなき快感を覺ゆるのである。

其他目に入つた植物には、キバナノシホガマ、ミヤマアマナ、及ミヤママンネングサとタカネキスミレの一品などある。ミヤママンネングサは、葉が非常に細く尖つてゐる。

十二時十分、水晶峰絕巔に着いた。標高八百六十三米である。

本山頂上の構成狀態は、全く鉢峰と同一である、唯傾斜の度が稍急なのと、南寒霞溪に臨む方面が稜角は丸味を帶びながらも、絕壁斷崖的を呈し、幾分の凄味を感ずる。鉢峰に比すれば、遙かに高いので、展望は頗る雄大である。鉢峰を瞰下せば、本山を卓とし、彼は宛然椅子といふ式である。西方は脈絡文珠、勢至を經て、五峰山には續いてゐるが、其間險絕を極め、到底縱走的峰傳へなどは、出來さうもない。

本山にも大小數多の石壺があるが、潴水の無いのもある。又潴水には、サンセウカジカも蛙も見なかつた。

鉢峰と水晶峰とに登つて、此石壺を實見したならば、彼新萬物相に於ける、天下一品と謳はれた、天女の化粧壺も、驚異の價値が減ずるのであるが、然し彼此共に、其成因は、矢張奇しき現象たるを失はぬ。

劍戟を並べ立てた樣な鋭尖極まる萬物相の山脈が、此處に至つて、俄然其稜角を失ふのみか、正反對に極めて平和な鈍隆圓狀を呈するは、是亦金剛山中の別天地として、驚異に値すべく、如何に本山地域が、複雜變幻を極むるかを想像するに足るのである。同時に予は玆に、多くの探勝者が、內金剛を女性的とし、外金剛を男性的なりと批評するは、甚だしき小局部皮相的の觀察であると思ふのである。

鉢峰では、僅かに一ヶ所だけ、石刻の文字が目に入つたが、水晶峰は、最近の開山だけに、全然認めなかつた。

水晶峰頭に於ける展望中、偶長箭港方面から、空高く翔け來た二羽の鶴を見たのは、予が鮮地に入つて鶴に接した始めてである。

岸打つ白浪を背景とした悠然たる鶴の姿、彼が瞰下す銀線の川、綠玉の丘、正に仙境一幅の畫圖たるを想ふのは、獨り彼れのみには止らぬ。鶴の行方を眺めて、ふと目に着いたのは、波濤の如く起伏展開する丘陵色彩の著しい相異であつた。長箭灣東南岸を緣どる丘陵が、非常な赤い肌を現はすに反し、大慈峰の北に連る丘陵は、特に白い肌を見せ、此等の丘陵が、殆ど皆禿頭的地肌を呈しながらも、而も其麓から皺襞に亙つて、綠鮮かな刺繡を施すは、一異彩であつた。

開山の祖鄭君は、此山頂の最高突起を、降仙臺と命名したと語つたが、內山衆香城奧にも、此名があつた。

此日は珍らしい快晴なので、水晶峰頭悠々展望を縱にし、我等は遂に、文化ならぬ天化の花崗岩製

安樂椅子に仰臥して、鵬々たる日光に浴し、一萬二千菩薩の仲間入をしたのであつた。

午後一時三十分、水晶峰上を辭し、今日の點心食堂の溪流まで降り、其處から、登りとは徑路を變へ、否路形なき、松林檜林草藪を貫通し、鄭案内の所有といふ馬鈴薯畑に出た。

歸途山腹崩壞部に、往々黑水晶、長石の巨晶が露出するを見た。

やがて溫井里に入り、鄭案内の宅前を通るとき、彼は其妻君を呼んだ。白衣黑裏の若妻君は、一寸緣先まで出たが、予を見ると、羞かしげに微笑を浮べて、匆々姿を消した。

予内金剛跋涉中、案内黃福天に、現今に於ける普通鮮人の結婚年齡を問ふた。彼自らは二十五の時妻は十八歲で、結婚したと告げた。今日案内の鄭聖國にも、亦途中此の問を發した、彼自らは昨年二十三の時、妻は十八歲で、結婚したと告げ、其虛僞でないといふ現證を示すべく、彼は此處で妻君を呼んだのであつた。一場の喜劇であらねばならぬ。現今男子は二十歲以上、女子は十八歲前後で、結婚するのが普通であり、又女增の結婚は、殆ど無いと、彼等はいつたのである。

田舍に於ける鮮人は、大抵結髮であるが、予が案内をした黃も鄭も、皆斷髮であつた。

午後三時、嶺陽館に歸着した。偶復俄かに雷雨があつたが、一足のことで、此悲劇を免れた。

13、再び萬物相へ

六月十四日　晴、雨不定　朝溫井里六二、夕同六二。

今日は、曩きに天候の爲め、取り殘した、九龍瀑上の神秘境、上八潭を探らうか、或は再び萬物相を訪はうか。此の二つの問題は、予が腦裡に折衝した。今日は朝かち、降りみ降らずみの天候であるから、若し大雨ともならば、淵潭橋から九井峰に向ふ、灌木密生帶の攀登は、殆ど不可能なのと、且つは上八潭を瞰下する、九龍臺上の景致が、比較的小局の感じあるべきに對し。萬物相が、奇絕怪絕莊嚴雄麗變幻無量の感を與へたのは、予をして遂に再び後者を訪ふべく、決定せしめたのである。

萬物相は、一昨日行程の復習のみならば、案内者の必要は無いが、今日は奥萬物相にも、足を入れる考であるから、鄭を伴ひ、午前八時、溫井里を出發した。

途水晶峰を仰ぎ、昨日に於ける、頂上悠遊の快感を喚起した。山腹に、庇の形までも整ふた、自然的岩窟が見えたが、正に神仙の宮かと疑はしむる。

途中花崗岩塊中を、大縱貫する白色の石英脈を見た。

三仙巖まで驀進したが、雨が隨分降り出したので、萬相亭に引返し、大に休憩した。亭の主人は、內地人でもあり、且つ予が再び萬物相を訪ふといふ熱心にも感じたらしく、款待頗る勉めた。主人は青森縣人で、馬渡在彰といひ、兄は東京にて、官に就き、姉も東京に在住するとて、其送り越した書東や書籍など示した。年齒は二十五前後で、相當の素養もあるらしく、言語應接振りなど、落ち着き味ある男だが、如何なる事情があつて、此幽境に入り、茶屋營業に從事するのか、彼は唯精神修養の爲めだといつて、餘り多くを語らなかつた。

萬相亭と密接して、鮮人の家屋が一二ある。

此處で辨當を認めてゐる中、雨は止んだので、新萬物相に向ふべく、正午萬相亭を出發した。偶釜山高瀨會社員岡治政平（原籍滋賀縣）といふ、四十五歲許りの男が、一人の案內を連れて來た。聞けば舊萬物相だけで引返し、新萬物相は斷念して、溫井里に歸るのだとの事であつたが、予これから再擧新萬物相に向ふと聞いて、廻れ右し予と同行した。

十二時五十分、新萬物相天仙臺に着いた。我等が安心臺に上つたとき、今まで濛々として咫尺も辨ぜぬ濃霧が、一陣の風に吹かれ、忽焉として去つた一刹那、前面に展開された、勢至峰の怪岩奇嶂は吾人をしてアッとばかり快哉を呼ばしめたが、惜しくも濃霧の幕は、忽ち復此仙境を閉ぢて了つた。然るに我等が玉女峰頭天仙臺に上つた時、霧は再び散じて、五峰山から、勢至、文珠に亙れる連峰の

銀劍王笥は、矗々天を衝き、雪よりも白き雲の海は、谷々を埋め、我等は眞に俗塵を脱し、雲上菩薩界に入る心地した。予は數十年來の山行に於て、此時ほど莊嚴威靈の感に打たれたことはない。雨空を冒し、濃霧を衝いて、此擧を決行した予は、唯々天祐として、一萬二千菩薩に感謝するのであつた。岡治君は、予によつて、此偉觀に接し得たことを非常に喜び、これで金剛山探勝の物語りも出來るとて頻りに予に感謝するのであつた。

雲は吹き去り吹き來り、四周の谷々は、忽ち綠鮮かな刺繡を見するかと思へば、忽ち復白雲の海となり、雲上に峙つ怪岩奇嶂は、屢〻雲間を漏るる日光を受けては、或は玲瓏玉をも欺き、或は煌燿白銀の如く、忽ちにして復淡靄の綾羅を纏ひ、或は明或は暗、忽ち濃、忽ち淡、變幻萬化の妙を極めた。我等は天仙臺上の眺矚を縱にすること數十分。玉女峰を辭し、左折して山懷を辿り、奥萬物相に向つた。

奥萬物相は、五峰山と勢至峰とを連結する鞍部に當る羽衣峰を攀ぢ登るのである。玉女峰道の岐點から約八町といはれてゐる、山峯隆起甚だしき截斷的を呈し、尖嶂簇立怪奇を極める。頂上は、新萬物相よりも高く、反對の方面を瞰下すと、長箭港は、手に取る樣に近く、渺茫たる碧海を望み得る長所はあるが、所謂萬物相連峰の眺矚は、玉女峰に一籌を輸するを感ずる。此處から山裏に下り、溪谷を辿り、長箭に出る路は、最近の發見にかゝり、岩嶂や峽谷や瀑布など、頗る優秀の趣を呈するとのことであるが、餘程險阻らしいのである。

奥萬物相には、世界的珍品の松葉百合（マツバユリ）があるが、蕾はまだ固いのであつた。このものは、溫井嶺上にも多いと聞いた。

二時三十分、奥萬物相を辭し、五時溫井里に入り、裏路から、金剛山ホテルを訪ひ、嶺陽館に歸着した。

外金剛玉流溪連珠潭　　潭の一部最下方に見ゆ

外金剛奥萬物相遠望　　林樹は概ね朝鮮松、白樺、楓の混淆林

岡治君は、前日からの宿である常盤館に入つた、明日は元山に向ふとのことである。外金剛は、比較的交通上の便宜があるのと、溫井里に溫泉があるので、大抵外金剛の探勝だけで、打切るものが多い樣である。

此夜、案内鄭君は、記念として予に贈るべく、自分が曾て本山各所から採集したといふ、黑水晶の巨晶や長石の數塊を持參した。予は同君を煩はして、木函を作り、小包郵便に附した。

予は、京城で始めて鵲を見たのであつたが、溫井里には、餘程多い。烏は、楡岾寺から京城に出る途中で、僅かに目に入つたが、他では見なかつた。

予が鄭君と談話中、程遠からぬ所に、樂器の音に和する歌聲が聞こえた、朝鮮妓生のそれであつた。歌詞の意味は、素より予には判らぬが、歌曲は何となく哀調に感じた。朝鮮の大鼓は、一面は牛皮、他の一面は鹿皮で張り、一は鈍音、他は鋭音で、相調和するものだと、鄭君は語つた。

又同君の語る所によれば、金剛山域では、各所重石の產出は多いが、一時盛んであつた、三井鑛業部の、タングステン精鍊は、今は全く休止してゐるとのことである。

冬季に於ける、溫井里の積雪は、四五尺位であるが、金剛山中には、丈餘に達する所もあるとのことである。

京釜、京元兩沿線とも、各所にポプラとアカシヤが、割合に多く見えたが、溫井里邊にも亦ぽつぽつある。これは自然生では無く、滿目荒凉たる鮮地の野に、俄か作りの衣裳を供給すべく、總督府が特に擇んで、此兩種の栽培に努力した結果であるとのことである。殊にアカシヤの速成的樹性は、燃料に窮する、鮮地目下の急を救ふに適すべく、一方其落葉は、地味を肥沃にするの效があるであらう。

14、溫井里より元山へ

六月十五日　少雨。朝溫井里六五、夕元山六〇。

予は、內金剛の探勝には、始終晴天に接したのであつたが、外金剛に出てからは、快晴一日も無かつた。然し殆ど豫定行動の妨害を受けぬのみか、場合によつては、却て特殊の景觀に接し得たことは大なる幸福と謂はねばならぬ。唯予は、彌勒峰の攀登を果さなかつた遺憾が、始終腦裡を去らぬのに、溫井里で、同峰頂上の優秀な繪葉書數葉を手に入れてからは、益〻此念を深刻にした。溫井里から楡岾寺までは、一日で行ける、楡岾寺を根據として、彌勒峰の昇降は容易である、要するに溫井里を基點とすれば、往復三日でよいのだから、若しも天候にして見込立たば、決行せんと待ち構へてゐたが、此日の朝は、小雨尙止まず、全く梅雨然たる模樣に對しては、萬物相再擧の轍も踏み兼ねて、千秋の憾を遺しながら、遂に十有餘日の親しみある、金剛山に別れを告ぐるの止む無き次第となつた。

予が溫井里に入つてから、間も無いことであるが、手首と足首とに、小さな腫物が出來、晝はさほど苦にもならぬが、就蓐後の痒みに堪へ兼ねて、屢搔いたのが祟りをなし、初めは粟大であつたが、追々小豆大、大豆大となり、突起の頭部は、半透明の奇狀を呈した。予はまだ疥癬の體驗が無いので、若しも宿屋寢具の關係から、それではないかと、宿の夫婦にも質したが、疥癬ならば指間や股間の樣な、皮膚の軟かい部分に、必ず密生するのに、予のはさうでも無いから、疥癬ではなからうとのことで、病名は遂に不明である。溫泉の効力によつて、治癒を祈り、勉めて入浴もしたが、何等の効果が無い、痛痒は益募るばかりで、搔痕往々壞決を生じた。予が彌勒峰の決行を鈍らせた、一つの原因とはなつたのである。

溫井里には、醫師は無い。長箭には櫻島といふ醫師のあることは、宿の主人から聞いたので、歸途治療を受けることゝした。

此日嶺陽館前、自動車上の客となり、館主夫婦や、番頭や女中達から、丁寧な見送りを受け、午前

九時三十分溫井里を發し、溫井橋を渡り、高城道と別れ、左折すると、左方近く道に迫り、形によつて其名を得たる鷹岩（二五五米）といふを望み、同五十分長箭に着いた。溫井里からは二里二町である。

腫物診察治療を受くべく、直ちに公醫櫻島友次郎氏を尋ね刺を通じた。氏は予が名刺を見るや大に驚き「まあお上りなさい、お待ち申した」と、一方ならぬ歓待振りに、予も亦驚き、之を質せば、數日前の新聞紙上によつて、予が金剛山探勝の日程から推測して、萬一の面會を得ばやと、心待ちに待つてゐたとのことである。予が日程が新聞紙上に現はれたとは妙だ、之を知つてゐるものは、總督府の細川氏の外は無い筈である、或は氏が特に新聞社に投書して、予が旅行先で、何等かの便宜に接する樣、好意的に圖つたのではあるまいかと想像した。後京城に入り、此事を氏に質したに、果して其通りであつた。氏は予が金剛山入りを、全朝鮮の新聞社並に內地有數の新聞社に投書したとのことである。

櫻島氏の診察により、南京蟲の螫毒であると判つて、其治療を受け、痛痒は立どころに去つて了つた。此被害の局部が、シャツ、ズボン下着用以外であるから、武裝のまゝ寢に就いた、摩訶衍庵か、極帖寺で螫されたものらしい。

櫻島氏は、山岳趣味を有する元氣者であり、且つ當地青年會長の任に就かれ居ることゝて、予に一日の滯在を强ひ、青年會員に對し、一場の講演をと求められたのであつた。予は此思はぬ光榮感謝に堪へぬが、平地に降つては、悠々と日を送り得ぬ身なれば、固辭したのである。

汽船の出航までには、尙時間があるので、氏の宅に於て、晝飯の饗にあつかり、其愛藏の銘刀や、珍らしい朝鮮昔時の節刀や、書畫など觀た、後庭には、金剛山から齎したといふ、眞柏、香檜、一位、杜松、石南などが、植込まれてあつた。氏の卓上には、大山連華の生花があつたが、氏は此學名を予

に質されたのである。南京蟲の紹介によつて、此快男子に接す、奇遇と謂はねばならぬ。氏は、治療代を固辭して受取らなかつた。

氏は、奥萬物相から長箭に降る、溪谷の優秀を力說し、且つ其宣傳に努力してゐることなど話された。

街頭の掲標に、左の如きものを見た。

長箭より萬相溪　一里半
奥萬物相　一里半
名所　神仙峽、　舞神岩、　萬相溪經由　五里半
虛空瀑、　望洋臺、　青嵐瀑、
奥萬物相。

朝鮮郵船會社の所有に屬する、辨天丸といふ、百七十噸の小蒸氣船が、長箭埠頭を離れたのは、午後三時であつた。

山には脆からぬ予ではあるが、海には兎角船暈に惱まされるので、六十錢の增金を投じ、二等客室に入つた。例の特別切符は、汽車汽船通じて三等賃金であるからである。二等室には、予の外某會社員と云ふ、洋服着た若い男が一人だけであつた。

叢石亭の沖合を通過する際、雨は止みたれど時既に暮色蒼然、且つ稍隔たりがあるので、雙眼鏡によつて、僅かに其概景を窺ふことが出來た。

夜の十時三十分、汽船は元山港に着いた。俥を賃して、海岸通愛媛館に投宿した。

元山は、京元線の終點、咸鏡線の起點に當り、更に平元線（平壤元山間）の計畫もあり、日本海岸の重要地點を占め、近頃敦賀との間四百七十浬に、定期航路も開始されたことであれば、裏日本海岸中央部邊から、金剛山に向ふものゝ爲めには、頗る便宜である。

現今人口約二萬八千中、內地人約八千、外人約六百といはれてゐる。

附近には加藤清正が築城した望德山がある。

15、結　論

四季の風色、山容溪態、跋涉の難易、高山植物。

金剛山は、四季に於ける風景の特徴を意味すべく、金剛、蓬萊、楓嶽、皆骨の名稱を有するが、予は、新綠の刺繡を彩る六月上旬と、紅葉の錦織り成す十月中旬とが、探勝の最好期と思ふのである。前者は、全山到る處滿溪に匂ふ大山蓮華の雪葩芳香や、淺綠深綠の樹下を紅化する大櫻草や、絕巔の岩壁を飾る雲衣霧餐のヒメアヤメ、テウセンキンレイクワを始めとし、其他數多の所謂高山植物の美觀に接し得べく。後者は、天高く氣淸く、展望をして益雄大ならしめ、本山特有の水石美は愈其明麗を加へ、針葉樹の玄綠と相待つて、本山紅葉美をして、眞に天下無比の大景を現出せしむるのである。夏季の探涼には、長安寺、摩訶衍庵を可とすべく。冬の銀山碧空に峙ち、滿山の闊葉樹は、悉く其衣裳を脫し、所謂皆骨の靜寂を呈するは、正に禪味三昧に入る人達の擇ぶ所であらねばならぬ。

予は、本山紅葉期に於ける、優秀第一は、外山新萬物相の玉女峰と、內山白雲臺とを推さねばならぬと想ふのである。兩者皆溪谷極めて深く、多種多樣の闊葉樹に配するに、針葉樹を以てし、四周の峯巒岩嶂奇妙壯麗を極むるからである。內山の望軍臺、外山の隱仙臺は、之に亞ぐであらうか。予は所謂浩然の氣を養ふべき、天界の宿泊所としては、內山にては、衆香城裏の須彌庵、望軍臺の絕嶺に近い兜率庵。外山にては彌勒峰の頂上に近き中內院を擇びたいのである。無論糧食、防寒衣携帶の必要がある。

（兜率庵は、大正十三年十月、山火事の爲め、燒失したのは、惜しいことである）。

山體垂直線的銳尖的岩嶂から成る、所謂男性的の山相を呈するは、外山新萬物相を第一とし、內山

衆香城之に亞ぎ、外山彩霞峰、內山燭臺峰など、又之に亞ぐであらう。望軍臺上は、稜角幾分の丸味を帶びてあるから、前記諸峰に比すれば、女性的であると評するものもあるが、畢竟金剛山彙中に於ての比較評語である。若しも一の望軍臺を拔いて、之を內地諸山の中に投じたならば、其垂直線に近い側壁を有する、所謂斷崖絕壁的奇嶂を呈するは、斷じて女性的なりとは、言ひ得ぬのである。

予に、比較評語を用うるを許すならば、全金剛中で、女性的峰巒としては、外金剛の鉢峰と水晶峰とを擧ぐるに、躊躇せぬのである。

峽谷に於ても、外金剛玉流溪は、溪流を載する河床が、藥硏の樣な、急勾配を呈するばかりでなく、兩岸の岩壁や、壁上から威壓する怪岩奇嶂は、之を內金剛萬瀑洞に比すれば、一方性的の感じはするが、然し萬瀑洞を構成する、兩岸の岩嶂は、之を內地の溪谷に比すれば、必ずしも女性的なりと評することは出來ぬ。唯瀑布に至つては、水量が乏しいので、眞に鞳鞳天地を振憾する底の壯觀を呈することの出來ぬは、止むを得ぬことである。

要するに、本山の名山たる所以は、岩石美にある、溪水美にある、草木美にある、而も特殊の傳說美、建築美が加味して、更に之を偉化し靈化するのである。

內地に於て、稍金剛山に似奇つたものを擧げたならば、妙義山である、神懸山である、耶馬溪である。されど妙義山には、溪水の殆ど觀るべきものが無い。神懸山は、規模餘りに小である。耶馬溪は峽谷餘りに開放的粗雜的である。而も三山は皆殆ど集塊熔岩、凝灰岩より成り、黝暗色を呈して陰氣である、土氣色を帶びて、脆弱の感じが伴ふ。殊に花崗岩中を滲出し來る、玲瓏玉の如き純潔な、金剛山の溪水に對しては、三山は到底比較すべき限りではない。

予は、九州に於ける峽谷としては、耶馬溪よりも、寧ろ球磨の溪流を推賞するのである。其開放的な點に於ては、耶馬溪に類するも、石灰岩より成る岩嶂は、比較的明麗な感じを與へ、其溪流は淸く

且つ雄大な快味を覺えるのである。

內地の峽谷として、幽玄凄壯の極致を呈するは、越中黑部峽と、紀伊の瀞八町であらねばならぬ。されど花崗岩から成つて、規模雄大な水石美を呈するは、木曾川上流の溪谷を推さねばならぬ。夏でも寒い、其木曾御嶽山を背景とする。鞍坡峽は如何にも豪壯である。木曾山林を繞る、寢覺床は如何にも明麗である。木曾棧の名殘を存するあたり、當盤橋の景勝や。須原、坂下間の水石美紅葉美は、如何にも優秀である。其水量の多いのは、遙かに金剛山の諸溪流を凌駕するも、唯兩岸を擁する怪岩奇嶂の、比較的乏しいのが遺憾である。

近き將來に於て、鐵原から金剛山麓まで、電氣鐵道が開通したならば、探勝順序として、內金剛を先きとすること、或は便利かも知れぬが、現今の交通狀態としては、多くの事情は、外金剛の溫井里を始終點とすること、便宜の樣に思はれる。殊に此地に涌く清澄な溫泉は、天與の美祿であらねばならぬ。唯此の場合、溪流に於ても山相に於ても、豪壯雄偉を極むる、外金剛の代表的大景たる九龍淵、新萬物相に接した眼を以て、次いで內金剛の代表的大觀たる、望軍臺や、萬瀑洞を觀たならば、其軟かみ其明るみを呈するそれだけ、物足らぬ感じがするであらう。之を補充調和するには、展望の偉觀全山を壓する毘盧峰か、山巔の奇岩全山に比なき彌勒峰に、攀登するを要するのである。

予は、屢〻金剛山跋涉に關する、難易の質問に接するのであるが、金剛山は難くもあり又易くもある、と答ふるより仕方がないのである。金剛山は、峰巒溪谷複雜を極むるので、普く之を探らうとするには、十數日を費すも、尙不可能である。普通人のまだ探らぬ神秘境としては、溫井嶺の北方に千佛洞、西南方に九成洞がある。其他人跡未到の險阻な境地が、尙甚だ多いのである。

されど特殊趣味目的を以て探檢するものは、例外とし、普通老若男女、各其體力に應じて、所謂金剛式景致を味ひ得るのである。內金剛に於ける正陽寺の展望や、萬瀑洞の觀賞。外金剛に於ける玉流

洞や、舊萬物相の探勝は、足弱き老人でも女子でも、甚だ容易である。此點からいへば、金剛山の探勝は、誰にも勸め得るのである。

金剛山には、高山にて、最も普通的に目に入るハヒマツとガンカウランとが無い。然し本山名物の朝鮮松、朝鮮縱、香檜、眞柏、杜松などが、之を補つてゐる。

尙本山を裝飾する植物として、特に人目を引くものを擧ぐれば、ヒメアヤメ、マツバユリ、テウセンキンレイクワ、オホサクラサウ、スズラン、テウセンライラック、ゲンカイツヽジ、クロフネツヽジ、オホヤマレンゲなどである。

五、元山より京城へ

釋王寺、三防峽。

六月十六日　曇、晴。朝元山六八、夕京城八〇。

午前十時五分、元山發の汽車に乘り、十一時釋王寺驛に着いた。驛の西北四十五町、雪峰山には、李朝太祖の創建にかゝる釋王寺がある。李成桂（太祖）潛邸の時、神僧無學、王の夢を釋き、冥驗を告げたといふ意を取つて、寺名としたとのことで、堂宇の宏壯美麗を以て著はれてゐる。

高山驛前の標札に「三防の幽峽南一哩半、紅葉美、天然ラムネあり」など書いたのが目に入つたが、やがて金剛山式の小溪流に接し、十二時十五分三防驛に着いた。此邊は、表裏朝鮮を區劃する脊梁山脈即ち大白山脈に當り、昔時三關防を置いた處といはれてゐる。

峰巒重疊、溪水斷崖の下を繞る、所謂三防の幽峽は、其水石美と、紅葉美とは、小金剛峽谷を偲ばしむる。

驛前に涌き出る炭酸泉、所謂天然ラムネを試みんとて、先を爭ふ乘客の下車に、我も仲間入りして、

大に飲み、水筒にまで詰め込んだ。此日は頗る暖かいのと、時恰も午時のことゝて、渴を醫すべく、仲々の繁昌雜踏であつた。此處を藥水溪といつてゐる。但此の天惠のラムネは、加賀白山のそれに比すれば、稍々劣る樣味はれたのである。

驛の西北一里、麻桑山中に、直下百四十餘尺といはれる、三防瀑を藏するとのことである。

九個の隧道と、十數個の橋梁を渡り、左折右曲幾十回、千尺の深谷、溪流雪を吐く峽谷十哩の間、耳目應接の遑がない。大山蓮華の淸き姿は、亦此境をも飾つてゐる。

朝鮮線中の最高地點といはれる、二千七呎の標示を見、劍拂浪(ケンフツラウ)驛に達する。驛は一千八百四十七呎の高距を有し、朝鮮線停車場として、最高地點を占め、盛夏蚊帳の必要がないとのことである。此邊の山麓にも、大山蓮華の開花を見た。

午後四時四十五分、倉洞驛東、夕陽に映ずる銀白の尖峰、天を刺す光景に、金剛山氣分の名殘を留め、五時四十分京城着、二見旅館に投じた。

六、京城より安東へ

六月十七日　快晴。朝平壤七二、夕安東八〇。

予が朝鮮入りは、金剛山探勝が主眼である、否全部である。金剛山を辭した予は、元山から一路釜山に歸る豫定であつたが、「朝鮮に入つて、半島最舊の王都であり、日淸戰役の記念地である平壤を見ぬは、遺憾である。我國領土內第一の鴨綠江鐵橋を渡り、接壤地安東の現況を視察せぬは、是亦遺憾の極みであるから、是非此が旅行に二日を投ぜよ」と、總督府細川氏から、懇切な勸告があつたので、如何にもと同じ、十六日夕刻、京城二見館で入浴し、晩餐をしたゝめ、京義線汽車に乘り込んだのは午後十時五十分であつた。

偶平壤に出張すといふ、總督府員が隣席したので、種々の便宜を得た。汽車が平壤に着いたのは、十七日の午前五時十七分といふ、快晴の曉天であつた。

予が平壤見學に費す豫定時間は二時三十分である、此地には電車はあるが。途中まごついて、豫定列車に乘り外づしてはといふ心配があるので、總督府員の周旋により、直ちに人力車を賃し、停車場通りを貫いて、大同江畔に出で、大同門、練光亭を見、乙密臺の麓で、車から降りた。車夫君は、永く此地に住んだ內地人であるので、空車を挽きながら、仲々能く說明して吳れた。

浮碧樓、玄武門、牡丹臺、箕子廟など觀、史蹟の都、風光の都を一巡りして停車場に歸つた。

汽車は午前七時五十分平壤を發し、午後四時十八分、新義州驛に着いた。

予は、鴨綠江の鐵橋を見學し、徒步安東に入るべく、新義州に下車したのである。

橋は、新義州から、對岸安東に架設し、長さ三千九十八呎。中央に鐵道軌條を敷き、兩側に幅八呎の步道を設け、橋桁十二連、中程三百呎の橋桁が、一日四回開閉し、江上舟行の便を圖つてゐる。鐵橋は、目下警官及武裝兵士が配置され、橋上往來の人達は、少しも步を留めることを許さぬ程警戒嚴重を極めてゐる。

予は、橋詰の監視所に就き、特に橋梁見學の許可を受け、警官の案內にて、橋桁開閉の實況を視察した。監視所主任から貰つた名刺には、

新義州警察署勤務、安東警務署勤務、
鴨綠江鐵橋兩岸警察官派出所主任、
朝鮮總督府道巡査兼關東廳巡査　　鈴木友義

とあつて、實に足引の山鳥の尾よりも尙長い肩書である。江を隔てゝ、此方では警察署といひ、彼方では警務署といつてゐるのである。

鐵橋を渡れば、予が足は既に國外滿洲の地に入つたのである。同時に予が懷中時計は、此地の標準時として、一時間後らさねばならぬ。

早速安東警務署に就いて、附近の情況を質問した。目下安東には、痘瘡患者五十六名あるとのことで、市街情況の視察は、危險地帶を避くべく、署長からは特に一名の案内巡査を附けられた。

支那人街、朝鮮人町、日本人街を巡り、安東館に投宿した。

安東は、人口約十二萬を包擁し、内地人は、約六千五百あるが、最近に於ける貿易額四千三百餘萬兩、對外貿易は、殆ど新市街の日本人が掌握し、對内取引は、主として支那人が占有すとのことである。

晩餐後、日本人の建てた安東神社に參拜し、停車場前の廣場に差し掛つた時、偶鴨綠江東の山の端を離れた十五夜の滿月は、皓々として綠樹を照らし、巍然として峙つ安東ホテルの窗ガラスに映じ、街頭高く低く遠く近く輝く燦然たる電燈の光、月光を浴びて天空に描く安東富士(元寶山)の光景は、異境に遊ぶ予に、忘れ得ぬ快感爽感を與へたのであつた。

七、安東より、釜山、下關へ

六月十八日　晴。朝安東七〇、夕京城七八。

驛内稅關檢査所から、手荷物の檢査を受け、安東驛午前九時五分發の汽車に搭じて、京城に向つた。こゝの改札鋏は、車中で受けるのであつた。

乘客は、白衣の鮮人が最も多く、青衣の支那人之に亞ぎ、内地人は最も少かつたが、京城に近よるに從ひ、漸次内地人の數を增した。予は茲に各驛昇降の際に於ける一現象に、少からぬ刺激印象を得たのである。朝鮮人を一喝して、其坐席を讓らしめ、自らは其處に廣い席を占めて、足を伸ばすやら、

横臥するやら、傍若無人の振舞をなすにも拘らず、日本人（內地人）が乘り來ては、其支那人なるものが、態度一變、注意を待たずして、自分の方から席を改めるのである。殊に彼等が、妙齡な朝鮮婦人に對しては、輕侮惡戲的擧動を弄して、平然たる有樣は、民族的實力の發露といはふか、國威的心理狀態といはふか、それにしても、今や我版圖にある鮮人の現狀に對しては、一掬同情の涙なきを得ぬのである。

嶺美驛東、一里程隔てゝ、ピラミッド式の整然たる美しい山がある、附近の山々、多くは皆赤い肌を現はす中に、獨り此山ばかりは、綠鮮かな衣を纏つてゐる、其背景には、鋸齒式の岩山がある、而も日光が其落着味ある代赭色の岩面に映じて、紫紺色を現じ、眞に山紫水明の觀を呈する。偶降り立つ數羽の鶴、水田に働く白衣の鮮人、此の對照、此の光景は、正に吾人を畫中に惹き入れ、詩境に遊ばしめるのであつた。嶺美とは實際相應しい名である。

食堂に於て、晝食として、ライスカレーとコーヒーとを取つた、廣軌式列車の食堂とて、廣くもあり、設備も整ひ、頗る快感を與へる、前者は三十錢、後者は十錢である。卓上には滿開のッヽジやバラが飾られてあつた。

此日車中は、八十五度以上の溫度であつたので、客室に賣り歩く、アイスクリームは大繁昌であつた。これは食堂部と同じく、滿鐵會社の直營で、價は一個二十錢、品質は甚だ優良であつた。

開城附近、總督府の經營に屬する、朝鮮人蔘の栽培を見た。人蔘の最も珍重されるのは、山地の自生品で數十年生のものであるが、これは容易に得られぬので、今は各地の畑で培養し、收穫までには、六ヶ年を要すとのことである。

午後九時三十五分、京城着、二見旅館に投宿した。本館は、予が始めて入鮮の日から、金剛山の歸り、滿洲からの歸りといふ、前後數回に亙つて宿泊したのだ、主人も番頭も女中も皆熟知となり、且

つ屢總督府の細川氏が來訪されたので、追々予が待遇に敬意を表した、此日の投宿は、深更であるにも拘らず、予が歸京の時日を知つて居た番頭は、停車場まで出迎へて呉れたのである。

六月十九日　快晴。朝京城七〇、夕釜山八〇。

此日予は、午前七時十五分京城發の汽車で、釜山に向ふので、早起朝食をすまし、館前に逍遙した。偶細川氏は、予を見送るべく來館し、特に記念として予に贈るべく、齋藤總督閣下の揮毫を請ふて持參されたのは、感謝に堪へぬ所であつた。閣下の揮毫は、額面とすべき紈地に「協力以資文化 旱水齋」とあつた。

午後六時五十分釜山着、松井旅館に投宿した。

釜山は、朝鮮開港場の第一に位し、最近の輸移出入總額は、一億五千餘萬圓、人口七萬八千中、內地人三萬五千を算し、主なる工業、商業は、內地人の經營に屬し、市街は純然たる內地風であるから、此地に於ては、全く朝鮮的情趣は、味はへぬ程、內地化してゐるのである。

龍頭山公園にある龍頭神社は、二百四十餘年前、對馬の國主宗氏を祀れるもので、內地人の鮮地に祀られた神社としての最初のものである。市街東端の龍尾山には、加藤清正を祀る社がある。

六月二十日　快晴。朝釜山七六、夕下關八〇

關釜連絡船は、每日朝夕二回運航し、釜山からの發船は、午後九時三十分、午前十一時であるから、予が昨日の釜山着は、夜航には間に合つたのであるが、全日乘車の疲れもあり、曩きに下關から朝鮮入りは、夜航であつたから、今度は晝間にしたいのと、且つは釜山の情況を視察せばやと、此處に宿泊したのであつた。

此日朝、松井旅館を辭し、筋向にある郵便局に就いて、小包郵便物を發送し、市內を散步し、停車場貨幣交換所に就き、貨幣の交換を受けた。我國の貨幣は、鮮內は勿論、滿鐵沿道には、通用するの

であるが、朝鮮には、別に朝鮮銀行發行の貨幣があるので、予は途中釣錢として受取つた、紙幣銀貨を、今此處で日本貨幣と交換したのである。鮮内に、此複雜した貨幣の流通を見るのは、甚だ不便であるから、緊急整理の必要を感ずるのである。

釜山驛と棧橋との間は、上屋續きになつてゐて、其處には、繪葉書、雜誌類を始め、バナヽ、アップル、ネープルなどの果物や、麵包、饅頭其他種々の食品雜貨の賣店が並んでゐる。

午前十一時、釜山棧橋發の連絡船昌慶丸に乘り込んだ。

關釜連絡には、景福、德壽、昌慶の三船が、交替運航するので、各三千六百餘噸を有し、元と此間の百二十一浬を運航するに、十一時を費したのであるが、今は晝間は八時、夜間は九時に短縮した。尙輻輳の場合には、右三船の外、新羅丸、高麗丸、多喜丸が、不定期に運航することゝなつてゐる。

予は往復とも、昌慶丸に因緣があつたので、係員から記念帖に、船印を押して貰つた。

此日は快晴であるので、始終甲板上で、讀書や展望に耽ることが出來た。對馬沖の通過に方り、「此日天は晴れたれど波高し」といふ、舷々相摩の激戰當時を偲ぶには、餘りに波は穩か過ぎた。

午後七時、下關棧橋着、川卯旅館に投宿した。

予が朝鮮行は、豫期以上の好果を得て、茲に無事本州の地に歸着したのである。予が今回の山岳巡禮は、近畿から四國に渡り、其代表的高山である劒山（ツルギサン）、石槌山（イシヅチサン）を探り、九州南端を打切りとして引返し、中國を通過して歸鄉する豫定で、鄉里出發に差迫つてから、旅行日程を高頭仁兵衞氏に示し、其批判を求めたのである。氏は旅程を通覽し、「四國位は何時でも行ける、且つ其交通機關が現在まだ不備なので、二山如きの跋渉にも、十數日を費す有樣であるが、今回は之を略し、代りに朝鮮金剛山を以てするも、日數に於ては大差が無い、他日朝鮮行を特に企圖することは、容易では無い」と、切に金剛山行を勸告された。予は曾て、氏が愛藏する、高島北海揮毫の金剛山眞景十數葉を觀たこともあ

り、菊地幽芳著金剛山探勝記を讀んだこともあつて、非常な憧憬を有することとて、早速同意決行したのであつた。

茲に鮮地から歸着するに當り、氏が厚意を永遠に記念し、且つ予が此行に、多大の援助便宜を與へられた、佐藤國二郎、佐藤鑑治、安達寅松、新野亮太郎、丸田鶴太郎、榎谷徹藏、細川貞之丞、高橋亨、乾供太郎諸氏に對し、深甚の謝意を表するのである。(終)

本稿を終へた時、偶南京蘇によつて、奇遇を得た、金剛山麓の醫師櫻島友次郎氏より、同山の珍品、否世界的稀品とする、松葉百合數莖の寄贈に接し、奇緣の感に堪へぬので、茲に之を附記する。(大正十四年四月二十三日)

參考圖書

圖書名	發行所	著作者
五萬分一圖四枚	陸地測量部 定價七二	朝鮮總督府
金剛山 特殊地形圖 內金剛、外金剛、海金剛、高城。	陸地測量部 四〇	同
金剛山眞景繪圖	滿鐵京城管理局 五〇	同
金剛山交通略圖	同	
朝鮮案內	同 二、〇〇	同
朝鮮鐵道旅行案內	大阪朝日新聞社 一、五〇	朝鮮總督府
朝鮮鐵道旅行便覽	洛陽堂 一、一〇	菊地幽芳
朝鮮金剛山百景	京城滙東書館 四〇	金圭鎭
金剛山探勝記		
金剛山遊覽歌		

大正十四年九月發行

金剛山探勝案內	滿鐵京城管理局	朝鮮總督府
朝鮮の風習	二五	同
朝鮮に於ける施設一班	滿鐵鮮滿案內所	東京丸ノ內ビル
鮮滿支旅行案內	同	同
鮮滿支旅程と費用概算		
列車時刻表 朝鮮線	滿鐵會社	

雜錄

○神懸山

一、緒言

内地に於て、強ひて朝鮮金剛山に類似するものを求めたならば、先づ指を妙義山、神懸山、耶馬溪に屈するのであるが、如何に量屬目を以てしても、金剛山の岩石美、溪水美、樹林美、建築美に加ふるに、其全體の規模が雄大莊麗を極むるのに比べては、三者は到底比較すべき問題では無いのである。

今三者について吟味するに、岩石の峻峭奇拔は妙義山を擧げ、岩嶂溪谷の地域長さに亙り、流水の多量であるは、耶馬溪を推さねばならぬ。三者中、規模は最も小ではあるが、而も岩石美、溪水美、樹林美に加ふるに、蒼海杳渺の展望を兼ねたる點に於て、神懸山は最も金剛山に近いではあるまいかと、予は評するのである。

全山花崗岩から構成された金剛山に對し、三者は皆火山岩主として集塊岩であり、時には凝灰岩をも交へるので、陰氣脆弱の感じもするが、神懸山は其上部は火山岩であつても、基部が花崗岩であるは、それだけ亦金剛山に近いと謂はねばならぬ。彼の大阪築城に用ひた花崗岩の巨石は、此處から採集したのだといはれてゐる。

近頃耶馬溪、豪溪、寒霞溪（神懸山）を、關西の三溪と稱する樣になつた。耶馬溪が賴山陽の美文によつて、海内第一といふ看板を揭げ、鐵道省の旅行案内からも、亦大々的宣傳の殊遇を受け居るにも拘らず、同案内は、豪溪、寒霞溪に對し、僅かに數行を貸すのみとは情無い。

豪溪は、隨分水量もある槇谷（マキダニ）川の兩岸を壓して欹立した岩嶂が、花崗岩から成り立つてゐるので、頗る明麗な感じを與へるが、規模が餘りに小であるを遺憾とする。

先年予が姉、小豆島（セウドシマ）八十八ヶ所の靈場を巡つて歸り、寒霞溪の美觀を激賞し、此世ながらの極樂

淨土であると語つたことがあつた。素より經歷狹い女人のことでもあり、且つは靈場巡拜を主眼とする人達の觀察でもあれば、實際は如何のものにやと想つた。岡本黃石曾て寒霞溪に遊び、風景佳絕眞に天下に冠たりと嘆賞し、左の詩がある。

愈出愈奇千百峰、一峰一步換形容、神鑱鬼斧冠天下、耶馬溪山黴笨庸。

今回親しく之を探つた予は、此詩に左袒し、妙義山よりも、耶馬溪よりも、將た豪溪よりも、大に神懸山を推奬するのである。無論此天下とは內地天下である。

二、山名

古事記に、二尊國土を生成し給ふ段に、小豆島（アヅキシマ）（今セウドシマ）の名が見え、應神紀に、天皇本山に御狩獵あらせられし時、斷岩嶮絕の處、鉤（カシカケヤマ）を懸けて登らせ給ふたとある故事により、鍵懸山の名が起つたともいひ、或は神懸山といふは、神は尊稱なり、懸は驅と國音相通ず、獵驅の意なりと說き、舊は鉤掛、鍵懸、神驅等種々の假字を記したのであるが、天保年中、貫名海屋此勝を探つて、浣花溪と撰名し、岡本黃石は閑佳溪と題し、明治十一年成嶋柳北は、本山移文を、朝野新聞に揭載し、其文中に「鍵懸山一名神翔、又神馳」と記し、同年藤澤南岳、寒霞溪の雅字を撰定してから、大に世に通用される樣になつた。然し斯く雜多に流れては、遂には靈域の故事を湮滅するの虞があるとて、神懸山保勝會では、本山溪口に「神懸山名稱辨」と題した石碑を建て、名稱の由來を刻んである。陸地測量部の製圖には、山體を嶮峭山、景勝溪谷を神懸谷と記してある。

浣花溪、寒霞溪などは、無論耶馬溪に對しての撰名であらうが、豪溪も舊は合谷（ガウタニ）といつたのを、亦此例に依つて、今は「ガウケイ」といふやうになつた。

三、山域、景勝

神懸山は、東西約二里、南北一里餘に亙つてゐるが、從來普通人の探勝する地域は、神懸澤に沿うて、頂上の所謂四望頂に登り、再び同じ道を降るのであつて、明治の初年、中桐星岳八景の勝區を選んで世に公にしたが、後更に四景を加へて十二

景とし、其勝區も幾部は變更し、命名も亦屢々修正が加へられた。

此經路を表神懸と稱し、四望頂より東南に向ひ更に右折して降る經路を裏神懸又東神懸と呼ぶのである。明治四十一年縣庫の補助を得て、大に山路を改修したので、表裏とも路幅八尺許の大道となり、交通頗る容易となつた。

表神懸の西に、忠六谷といふのがある、峽谷幽邃岩嶂奇峻、亦賞すべきものもあるが、此經路は頗る惡い、之を西神懸と稱する。

近頃神懸山保勝會では、山本梅崖に囑し、中溪（表神懸）に准じて、東西兩溪にも、各十二景を撰定したが、強いて十二を拾はんとしては、所謂牽强附會の嫌があらう。

中溪に於ける十二景を左に記す。

通天窓（テンノゾキ）、索麪流（ソウメンナガシ）錦屏風（ベウブイハ）、列筆架（フデタテイハ）、老杉洞（スギノホラ）、蟾蜍嵓（ヒキイハ）、玉筍峰（タケノコイハ）、層雲壇（クモノカケハシ）、荷葉嶂（ハスイハ）、烏帽石（エボシイハ）、女蘿壁（ツタイハ）、四望頂。

强いて三字に制限し、且つ漢語式に囚はれたので、頗る感じの惡るのがある。「列筆架」は筆立岩、「烏帽石」は烏帽子岩といつた方が、餘程感じが好いではあるまいか。尙序でにいへば、東溪の「香螺巖」は法螺貝岩、西溪の「樹天矛」は鋒岩としたい、無論一例に過ぎないのである。

四、神懸山へ

五月六日（大正十三年）朝七時四十分、岡山發の汽車に乘つた予は、宇野より連絡船によつて、十時三十分高松に着いた。

此日は栗林公園を觀、屋島に源平の古戰場を訪ふて高松に宿し、翌日小豆島に渡り、神懸山を探る豫定であつたが、餘りに快晴なので、若しも翌日天候不良となり、神懸行に故障を生じてはとの懸念も起り、俄かに日程を變更し、牛窓汽船會社の八千代丸といふ小蒸汽船に乘り、午前十一時三十分高松を發し、午後一時小豆島吉ヶ浦灣頭土庄の棧橋に着いた。

土庄は人口六千許の小都會ではあるが、小豆郡

衙の所在地として、所謂島の都である。本島は醬油釀造を以て著れ、到る處大規模の會社があり、年產額二百萬圓に上るとのことである。

棧橋際にある、究屈な茶店に就き、一杯十錢といふ鮨にて晝食に充て、二時三十分自動車に乘り、三時廿分草壁町大字上村高橋旅館に着いた。土庄より約四里である。自動車の運轉助手は、本館の息子であるので、好都合の點もあつた。

頂上四望頂までは約一里、而も路は非常に良好であると聞いてゐるので、荷物を旅館に託し、携帶した測量部の五萬分一圖と、此地で購入した寒霞溪名勝案內繪圖とを便りに、直ちに單身神懸山に向つた。

五、神懸表谷登り

高橋旅館より一町許りの岐路に「左神懸表景往道。右裏景弁十八番靈場石門復道。」と書いた標柱が建てられ、神懸保勝會の名に於て、「溪山の施設並に賣店其他の行爲に關し、御氣附の點を忌憚無く御高示御投書下さい」との掲告に、投書函を備へてあつた。

近來景勝各地に、保勝會なるものは、澤山見受けるが、有名無實か、或は美名無力のが多い中に、此處のは宣傳にも努力し、施設保護にも、頗る實力あるを認めた。神懸山保勝會は、明治三十一年の設立で、四十三年財團法人組織となり、景勝主要な地域約四十町歩は、其所有に屬し、且つ一百町歩は、風致保安林となつてゐる。

岐路の左を取れば、神懸川に架けた遊仙橋があつて、橋詰には、もみぢ屋、一福などいふ茶店が見える。

遊仙橋から緩かな坂路となり、キツネアザミ、レンゲサウ、キンバウゲ、ホソバルリサウなど咲き亂れ、藤花も所々溪流に紫の影を漂はしてゐる、又路傍にも、山林中にも、隨分櫻樹の植附を見たが、こは保勝會の事業で、將來益々本山の春色を彩る好資料ととらう。

「鹿猿禁獵區 農商務省。」「樹枝草苔を伐採するものは處罰せらるべし 小豆島分署。」などの告示があつた。

山中カシ、コナラ、クリ、カキなど多いが、柿

と栗とは、特に植栽して、鹿猿の食糧に供する爲とのことである。林中に白花のミヤマハンシヤウヅルを見た。

四時二十分、花崗石作りの美麗な絢海(ケンカイ)橋といふに着いた。橋名は、本山の宣傳施設に盡瘁した醫師中桐星岳の名を取つたので、長約五間幅九尺、欄干に擬寶珠など設け「明治四十四年一月竣功」と刻んであつた。

橋畔の大岩石上に「神懸山名稱辨」の石碑がある、花崗岩を用ひ、高約四尺幅六尺許、頗るの長文で、末尾に「明治三十一年一月三日、鐸姫、中桐儉吉謹撰」とある。

橋向に、高四尺許の標札に「里程。老杉洞へ三町、層雲壇へ十二町、四望頂へ十九町。(參考。四望頂マデ普通時間約五十分ヲ要ス。)」とある。是亦花崗岩の石材を用ひてあつた、無論皆本山の產であらう。十二景中、右里程表に三景だけ掲げてあるが、實際最も優秀と思はれた。

間も無く紅雲亭に達する、亭は公衆の休憩に提供すべく、明治七年中桐星岳の建てた草堂であつたが、大正九年保勝會にて改築したとのことである。

亭下に索麪流の景がある、長十間許りに亙る岩床上を滑り降る溪流の下部に、深潭を湛へてゐる。左手に、岩嶂の洞穴より天空を窺ひ得る通天窓がある。

此處より、神懸澤の溪流を縫ひつゝ、所謂中溪(即表神懸)の狹き谷間を辿るに、カシ、シヒ、ナラ、カヘデ、トサミヅキなど、常綠落葉の混淆樹林翁欝として茂つた裡に、山椿の紅花や、コレンゲウの黃花が、ぽつ〳〵見參に入るのである。

左に錦屏風の勝がある、垂直線的側面を有する岩嶂横廻し、さながら連幅の大屏風を展開した樣で、岩面に纏綿した薜蘿は、晩秋には錦繡織り成す美觀を現するであらうが、今は唯一株のツヽジが、所謂紅一點の趣を呈するのであつた。

獲物や來れと待ち構へた樣な蟾蜍嵓を左に、林を拔き出た筍の樣に、尖つた玉筍峰を右に見、招仙亭に着いた。東に層雲壇の巨嶂を仰ぎ、西に老杉洞の洞窟を見、眼界は漸く開けて、眺矚の佳境

に入るのである。

層雲壇は、安山岩の板狀節理を呈する樣、恰も層々相重なる雲の如く、老杉洞は、洞窟を有する巨岩を繞つて、昔時は老杉欝々林を成したのださうだが、今は僅かに數株を存するだけだ、而も闊葉樹林の裡、暗褐色の岩嶂を擁する其玄綠の色彩は實に本山中の一異觀である。洞窟前に一株の槭樹を翳しあるは、秋季更に一美觀を添へるであらう。

亭の下方路傍に、畫帖石といふのがある。層雲壇式節理を呈し、略々長方形を成すので此名を得、舊は十二景の中に參加したのだが、餘りに小規模で物足らぬ感じがあるので、今は除名されて、列筆架が代用されたとは情ない。全山殆ど集塊岩であるのに、比較的緻密組織の板狀節理を有する本石や層雲壇は、たしかに人目を引くのである。

招仙亭は、大阪商船會社の寄付にかゝり、景勝地點の指示石標には「大阪わらじ會」と刻んである。招仙は商船と發音相通ずるから、命名したものらしい。

亭側の茶店に就いて、名物神懸饅頭やネープルなど喫べ、神懸山保勝會の發行にかゝる神懸山志繪葉書など買求めた。お蔭で茶店の婦人からナハシログミの紅果累々たる一枝を貰ひ、道すがら口にした。此グミ、土人はサヽボ又ゴエビといつてゐる、本山には所々に認めた。

付近の岩面には、ミヤママンネングサ、イハヒバ、クリハラン。高き岩上には、赤松、杜松などが疎點する。

荷葉嶂、烏帽石、女羅壁等を瞥見し、五時三十分四望頂に達した。

木標に方位を示し「海拔五百六十米突餘　大正十一年十一月十二日」と註してある。

又花崗岩作りの扇面形標札には「里程。東石門ヲ經下村（シモムラ）へ十五町、下村港へ三十三町。參考。東石門ヲ經下村マデ普通一時十五分ヲ要ス。」とあつた。

四望頂は、露出した岩面直徑約五間、前面即ち南方は、深谷の裡、岩嶂簇立し、矮松は其頂を飾り、カヘデ、ナラ等は、其裾を纏ひ、秋期に於ける紅葉の美觀を偲ばしめる。殊に谷間の彼方に展

開する内海灣は、波靜かにして鏡の如く、灣内の辨天島、灣口の櫛現崎など、歷々眸子に入り、後方即ち北方は、瀨戸内海を望むことが出來る。唯東に星ヶ城、西に御前ヶ丸の高き山々があつて、四望開豁とは言ひ得ぬが、展望の偉觀、溪谷の美觀は、全山を壓し、正に十二景中の王者である。

昔は應神天皇の御巡幸を蒙り、近くは攝政宮殿下、同妃殿下の御登覽を辱うした本山は、至大の光榮と謂はねばならぬ。

頂上には、公衆の休憩に供する無名亭がある、又茶店があつて、繪葉書や本山に關する圖書や菓子など販賣してゐる。予は例によつて記念印帖に捺印を受けた。夕方であるのに妙齡の女子一人だけゐるので、「夜分はどうするか」と聞いたら、麓の里に降ることもあるが此處に泊る方が多い」といつた、「然らば私は、是から星ヶ城に登るのであるが、暗くなつたら泊めて下さい」といつたら、彼は唯笑ふばかりであつた。

安政二年來遊した俳人可大が書いた「初しくれ猿も小簑をほしけなり」の芭蕉の句を刻んだ石がある。本山名物の猿公に對しては相應しい。

四望頂より稍東方の高みに、「長西君義擧碑」といふのがある、明治四十二年頃、本山全部を外人に賣却せんと企てたものがあつた。草壁の人、長西君英三郎義憤の餘、竊かに鉅資を投じ、保勝會の名の下に之を買取せしめた。而も君は未だ曾て之を口に出さぬとは、眞に見上げたる義人と謂はねばならぬ、保勝會の此建碑、亦實に其德を永遠に傳ふるのである、碑銘に

積而散、散而宜、默不語、恬如遺、山之秀、人之奇、勒于石、垂來玆。

大正四年十月三日　神懸山保勝會長森遷撰書

六、星ヶ城の大觀

四望頂の東約二十町にして、星ヶ城山がある、測量部五萬分一圖によれば、八百十六・六米、島内第一の高峰である。興國元年佐々木信胤城を築き遙かに吉野朝に應じた古跡を存する、時は既に入日に迫つてはあれど、古忠士の靈魂を弔し、且つは山上展望の壯觀に浴せばやと、四望頂を辭し急速力を以て林中の道を貫き、裏谷道と別れ、左折

芝生の急斜面を駈け登り、六時三十分其頂上に達した。

星ヶ城の山頂は、四望頂に比すれば、標高遙かに高いので、四顧視界を遮るものが無い。南は近く讃岐阿波の山々より、東は遠く淡路島、北は播磨備前に亙り、近く遠く瀬戸内海に散點せる島又嶼、岬又灣、其間を縫ふ帆船汽船、其壯觀大觀は、到底口之を語ることも、筆之を描くことも出來ぬ、小豆島の眞價を探らうとするものは、必ず足を星ヶ城山頂に運ばねばならぬと、予は極言するのである。

展望に飽かぬ予も、時既に暮色蒼然たるに驚き全速力を以て駈け降り、足音に驚き逃げ避くる鹿にも猿にも目を呉れず、東溪石門を通過する頃は既に人色を辨ぜぬ暗みであつたが、幸路身の白きを便りに、生路の夜行にも踏み迷はず、七時三十分高橋旅館に歸着した。

此夜此旅館に宿つた巡禮五十人許りもあつて、所謂御詠歌なるものを聞かされたが、四望頂に於て四五人連れの巡禮達が唱へた御詠歌の、山々谷谷に響き渡つた其餘韻は、亦く予が鼓膜を衝動するやの感じがあつた。

七、再び神懸山を見舞ふ

昨日午後の三時半といふに、予が敢て神懸山の探勝を斷行したのは、翌日に於ける天候の惡化を氣遣つたからである、若しも翌日に於て、天候尚不良で無くば、再擧を企てる胸案であつた。偶予と相客となつた人に、醤油取引の關係上、始終當旅館に來宿するといふ岡山縣人奥山古兎三といふものがある、又隣室に宿つた人に、三井物産會社員といふ、これも岡山縣人の近本與一（兒嶋郡興除村）其從弟の近本藤太郎といふものがあつて、皆翌日を以て神懸山探勝の目的であつた、近頃西溪の雄大を賞讃するものがあるから、先づ以て之を試み、次に中溪東溪に及ぼすべく、相談忽ち一決した。

七日拂曉天を窺ふに、薄靄は神懸山頂を包んではあるが、東天紅を呈し、薄青空の模樣であるから、今城松藏といふものを案内とし、六時三十分高橋旅館を出發した。松藏は七十歳といふ老人で

あるが、嬰鑠たる元氣者であつた。

紅雲亭より程なく「左西溪道」といふ指導標がある、左折小溪流に沿うて登つた。

所謂西溪の十二勝は、例によつて洗心淵、彩霞嶂、騰空馬などいふ、六かしい新式か將た舊式かの撰名では、松藏老人知らう筈もなく、唯先頭に立つて進むばかりだ。溪流岩を嚙む急湍もある、落ちて瀑となり、湛へては潭を作るもある。峭拔幾十仞稜々たる岩骨を露はすもある。岩嶂の規模は、中溪のそれをも凌ぎ、殊に最奥に鎮坐する天柱峰は、西溪の覇王なりとのことではあるが、全體峽谷頗る狹く、屢溪流を縫うて徒渉するの煩は尙忍ぶべしとするも、登るに從ひ、殆ど路の形さへ辨じ難く、左右から蔽ひかゝれる灌木雜草は、遠慮も無く面を打ち、或はスヽキに指を傷け、或はアザミ、イラクサに手甲を刺され、其困難一通りではない、且つあたら怪岩奇嶂も、概ね樹林に蔽遮されて、觀望を妨げられること夥しいので、一行遂に斷念し、進行約四十分にして引返し、中溪に向つた。

中溪、東溪は、既に予が昨日の經驗區域に屬し、且つ大道坦々砥の如しとは言ひ兼ねるが、好道實に易々たるもので、案内者の必要も無いから、松藏老人を歸し、我等四人は悠々半日の敬意を本山に表することゝした。

近本藤太郎君は、最年若きことゝて、沿道到る處大に活動を發揮し、老杉洞に攀ぢ登り、洞窟内を探檢し來り、「靈山に對し失敬ではあるが、或は昔時山賊の住家ではあるまいか」など語つたのである。

招仙亭側の茶店や、四望頂の茶店の婦人達は、予を見覺え居て、「復御登山ですか、昨日は有り難う、どうぞお休み下さい」と、笑顔で迎へ呉れた。頂上には、登客の記念撮影に從事する、臨時出張寫眞師もゐた。途中巡禮の幾組にも逢つた。

八、神懸裏谷（東溪）降り

予が昨日に於ける東溪の通過は、夕闇に駈足なので、始ど何等の印象も無い。今日頂上に登つた頃、靄は殆と消え失せたが、一體に薄曇りとなり、星ヶ城山頂の展望は、到底見込みが無いので、之

を略して東溪を降つた。

右手に獅子蹲踞の狀に似たとて、雙獅子と名けた奇岩がある。左に說明を待つまでも無く、それと氣附く松茸岩があつて、舊は八景の一にも數へられたが、餘りに小規模なので、今は東溪十二景中から省かれて了つた。

降るに從ひ、谷は頗る開け、溪流の音淙々として耳に入る所、左方に爛錦溪がある、舊紅葉溪といつた、予は寧ろ此通俗名稱を取りたい。本山闊葉樹林中には、比較的カヘデが多いが、此溪谷は殊に夥しいので、此の名を得たのである。

半腹邊に、呼猿洞と名けた一大石門がある、西石門に對し、東石門といつてゐる。石門內側高約五丈、幅三丈許、其衡左右隆起して門柱式を成してゐる。妙義山石門の粗大不恰好なのに比すればこゝのは餘りに優秀である。岩面イハヒバ夥しく、黝暗色の集塊岩を飾る好個の化粧である。

附近には、ハコネウツギ、シモツケ、アケボノツヽジの開花を見た。ナハシログミが多い。

石門を降ると、左手の大なる岩壁洞窟內に、八十八ヶ所靈場中の十八番地藏菩薩の堂がある。傍に茶店も見えた。

此處から奔湍雪を噴く溪水に沿ふて降ると、龜の形に似た巨鼇岩、法螺貝の形其まゝの香螺嵓などある。所謂十二景中に屬する。香螺嵓は、岩體頗る大きく、螺旋狀に漸次上部は細くなり、基部貝蓋に當る部分に孔口を開くなど、其出來榮申分無く、造化の妙巧眞に驚嘆に價する。石門、香螺嵓は、正に東溪に於ける奇岩の誇とせねばならぬ。

香螺嵓の彼方に、突兀たる岩嶂連續するものは所謂飛霜劍の勝である。

程なく右手に湯ノ谷池がある、直徑百間許、惜しい哉池畔を緣どる樹林も無ければ、池中に散點する奇岩も無いので、靈域を更に靈化する力無きを遺憾とする、池畔にアキグミを見た。

十一時三十分高橋旅館に歸着した。

此日午後一時、草壁發の自動車に乘り、同五十分土庄に到り、二時三十分尼崎汽船會社の正宗丸（百五十噸）に搭じ、高松に着いたのは、正に四

時であつた。正午頃から天候漸次惡化し、海上波頗る高く、昨日甲板上で見惚れた、屋島山、五劍山の佳景も、今日は全く霧中に葬られ、高松上陸の頃からは、遂に降雨となつた。神懸山探勝日程を變更して一日繰上げたのは、非常な幸であつた。

九、尾　言

瀨戸內海の美觀は小豆島にある、小豆島の美觀は神懸山にある。神懸山の美觀は四望頂にある、而して其壯觀大觀に至つては、遂に星ヶ城山を推さねばならぬ。所謂寒霞溪だけの景觀は、美は即ち美なるに相違無いが、遺憾ながら集約的狹局的の嫌がある。星ヶ城絕巔の大景と相待つて、玆に優に妙義、耶馬を凌駕すと謂はねばならぬ。

神懸山保勝會が、本山三溪に於て、各十二勝を撰定したのは、宣傳上或は指示上已むを得ざるに出たのかも知れぬが、自然の大景を鑑賞する人達には、殆ど沒交涉である、否寧ろ牽强的究屈的の惡感を與へるではあるまいか、殊に名稱に强ひて雅字否難語を用ふることは、餘りに價値無いものではあるまいか。然し必要とならば、予は寧ろ十二などといふ數には拘泥せず、通俗的平易的に而も最も印象を深からしむべき名稱を撰びたいと思ふのである。

近頃耶馬溪が、遊客をして「來て見れば」の感を起さしむるを氣にし、頻りに其支溪所謂新耶馬溪を賞揚宣傳するので、神懸山保勝會でも、亦之に鑑みてか否かは別問題とし、最近頻りに西溪の景觀が甚だ雄渾であるとの宣傳に努力する樣だが、予が觀た範圍に於ては、東溪は豁然として氣持好く、且つ岩石の奇觀、溪流の壯觀を感じたのである。而して四望頂は、三溪を通じて帝王の位置を占むるのである。

本山探勝の最好期は、十一月中旬に於ける紅葉期といはれてゐる。

一〇、附記　通路、案內料、參考書。

小豆島に渡る航路は、東方よりするものは、大阪又は神戸から坂手に、西方よりするものは、宇野又は高松から土庄或は汽船によつては內海又は坂手に上陸するのである。

予が照會に對する、小豆郡役所よりの回答を左

に記す、

一、高松棧橋よりは

午前七時發　土庄棧橋督
同　九時　同
同　十二時半　同
午後　二時　土庄ノ吉ヶ浦着（巡航船）
同　四時　土庄ノ吉ヶ浦經由内海淀泊（神懸山麓）
午後六時以後ニ於テ高松ヨリ坂手直航船二回アリ（二時間半ヲ要ス）
何レノ汽船モ高松ヨリ土庄へ一時間半、土庄ヨリ坂手へ一時間半ヲ要ス。

二、宇野港よりは、

午前七時及午後一時ノ二回（巡航船）土庄棧橋着（航海二時間半）
土庄ヨリハ神懸山麓草壁マデ乘合自動車ノ便アリ。

三、案内料は草壁町にては一日一圓八十錢乃至二圓五十錢、坂手村にては二圓乃至三圓とす。

（附記）右回答以外に小蒸氣船の航通がある。

（大平晟）

參考圖書を左に記す。

日本山嶽志　高頭式編纂
大日本地名辭書　吉田東伍著
大日本地誌　山崎、佐藤編纂
測量部二十萬分一圖　德島
同　五萬分一圖　神懸谷、内海灣。
小豆島御案内　神懸山保勝會
神懸山志　同
神懸山寒霞溪名勝案内繪圖　神懸ホール組合
小豆島實測旅行案内地圖　大森國松
寒霞溪表裏二十景案内眞圖　同
小豆島靈場案内　靈場會
鐵道省旅行案内　博文館
其他

（終）

○朝鮮金剛山の施設に就て

△朝鮮總督府鐵道局幷に滿鐵京城鐵道局へ意見書提供

（大正十四年四月二十日）　大平晟

謹啓小生は、山岳跋渉を繼續すること、茲に三十有餘年、昨年六月上旬、貴地金剛山に入り、其探勝に十二日を費し、眞に天下の名山として、其絶景に感歎した次第であります。殊に貴局の編纂にかゝる、朝鮮鐵道旅行便覽、朝鮮鐵道旅行案内、

金剛山特殊地形圖、金剛山眞景繪圖等、好箇の參考資料を得たことを深く感謝致します。今紀行執筆に方り、偶〻氣附きしまゝ、甚だ失禮ではありますが、小生の希望數件を開陳し、御參按に供したいと存じます。

一、展望の雄大莊麗、全山に冠たる、內金剛の望軍臺、及外金剛の玉女峯には、其絕巔に近き所に施設しある、現在の鐵鎖は、其構造甚だ不完全で、危險の虞がありますから、小判形連鎖式に改造して欲しい、長さは各約十數間であるから、其經費は、至極輕少と存じます。

二、金剛山中、緊要岐路には指導標、景勝地點や古蹟などには、概說的揭標の施設を望みます。

三、風致保存上、或る地域の樹林伐採を禁止するは、無論必要ではありますが、尙望軍臺、玉女峯、毘盧峯等の山巔を飾るヒメアヤメや溫井嶺、奧萬物相の頂上にあるマツバユリの如き珍稀の植物は、濫採の爲め、滅絕するの虞がありますから、其保護法を講じて欲しい。

四、溫井里に於ては、比較的案內者を得ること便利ではあるが、長安寺には、缺乏の憂があるばかりで無く、弊害も伴つてありますから、案內者の養成と共に、其取締方法を設けて欲しい。

五、叢石亭探勝の爲め、溫井里、元山間に、定期自動車の運轉施設を望みます。

△右に對し、同月廿七日付、總督府鐵道局、滿鐵京城鐵道局營業課長より、左の回答に接した。

拜復金剛山施設に關する本月二十日付貴翰拜誦、御開示の事項は、早速金剛山保勝會、其他所管個所に傳達、御高敎に添ふ樣、取計可申、尙貴見中の一部は、左記の通り、其後施設の整ひ居るものも有之候間、御了知被下度、此段御回答旁々、御懇切なる申告に對し、謹で謝意を表し候。

記

一、內外金剛主要地點に、指導標並に名札標百

餘本建設せり。(昨年六月末)

二、高城、溫井里、元山間には、毎日一回定期自動車相互に運轉す。(昨年七月上旬)

△附記

高城には、從來彌生商會の營業に屬する自動車があつて、毎日數回高城、溫井里及長箭間を往復するが、それ以外の地點には、特別註文が無ければ運轉はしない、從つて賃金の不廉は、言ふまでもない。前記回答第二項によれば、滿鐵會社直營の定期自動車が、溫井里、元山間に運轉するやうになつといふから、玄武岩の壯觀を極むる叢石亭を觀覽する人達に取つては、至大の便利となつた譯である。

雜報

○アルプス登山道路

梅谷知事が日本アルプス開發策としてのいはゆるアルプス登山道路改修問題は、爾來東京營林局との間に交渉懸案となつてゐたが、愈機熟して今回營林局は本縣知事の要望を容れて具體的に實現さるゝことゝなつた。右につき東京營林局の田中技師は二十二日正午出縣梅谷知事を訪問した。知事は直に細川内務部長、西ヶ谷林務課長、淺見土木課長を知事室に集めて、田中技師と共に登山道改修上につき種々打合せをした。改修せんとする路線方針については豫て本縣から第一、第二、第三の三案を作成して營林局に提示してあつたが、營林局はその三案につき攻究の結果第一案である

上高地より岳川、南穗高、北穗高を經て槍ヶ岳に至る。

右第一案を先づ第一着手として採擇し、これを改修することに今回決定したので、今夏登山の利便に資する關係上、取急ぎ七月までに實地踏査をして八月末迄には工事を完了する豫定をもつてこれが準備に着手する。右に要する經費は、五千圓乃至一萬圓の見込であつて、經費一切は農林省に於て負擔支出し、縣費を要せざることゝなつてゐる。尚改修工事については現在の林道を改修し、林道のなき箇所は僅な步道を開修するに過ぎないので、從つて費用も期間も至つて少くてすむ譯である。この改修上本縣では營林局の方針に協力し、この際一氣呵成的に實現に努力する筈であるが、この登山道實現の場合は登山利便に資するところ極めて大なるものがあるであらうとみられてゐる。尚梅谷知事は右改修より進んで他に及び、漸進方針をとつて改修問題を解決し、理想とする日本アルプスの一大縱走道路實現に今後力瘤を入れやうと意氣込んでゐる。（四月廿三日信濃毎日新聞）

○秩父宮三峯御登山

【秩父特派員電話】十一日朝山の宮を御迎へする秩父町は全町を擧げて悦びに充たされ、打續く秩父山脈は五月の日に榮えて紺碧の空には一片の雲もなくまれに見る日本晴に町民は朝からそはそはとして御着の時間を待つた、秩父驛から秩父神社までの沿道兩側は在鄕軍人、青年團、小學生徒等約三千名が三十分前から整列した、午前十時三十分薄空色の霜降に中折姿の殿下は秩父驛ににつこりと御立ちになつた、感激は出迎への町民の絕頂に達した、殿下はその間を極くお氣輕に大股で驛前に立たれ、自動車に召されて秩父神社にお向ひになつた、青光る大銀杏は鬱蒼として繁り、五百年を經た欅はさは〳〵と鳴る。殿下は一の鳥居で自動車から御下車園田社司の案内でそのまゝ本殿に御參拜された、ほの暗い神殿の前に吾等の青年秩父宮が直立された時社殿はすつかり緊張した、參拜が終ると殿下は休憩室にお入りになつて、秩父小學校高等科二年生富田文子（一四）同新井光子（一四）のお給仕で畫食を召上り直に三峰神社に向はせられた。秩父町を離れて約一里半の道

をはさんだ五月の新緑はしたゝるばかりで颯爽たる微風に殿下はその日に焼けた御頰を撫でさせられ御快げに陪乘の渡邊御用係に話しかけられる、町を離れて約二里自動車は危險な秩父連峰の中腹を縫うて走る。今日は特別に山になれた秩父自動車店の伊藤運轉手が運轉の光榮に浴したが、神橋（大輪）に着するに從つて道は益々急で山角はまるで切落した形だ、しかし山は奇岩の間に蘊々たる杉林あり蜿曲たる松樹あり千古の大自然をちつと見詰めて來た大椋樹あり正に天下の奇勝である、「素敵だれ！」と殿下は秩父連山の雄大と壯麗と且峻險に始終お愉快げに微笑をおたゝへになつて居る、午後一時四十五分神橋へお着きになり、こゝで自動車をお降りになつて山岳家槇有恆氏を同伴して三峰神社に御徒歩で向はせられた。

【秩父特派員電話】秩父宮殿下は秩父連山の險をよぢて午後三時四十分三峰神社に御到着遊ばされた山麓から五十二町約二時間を要してゐる。殿下にはいさゝかお疲れの樣子もなく却つてお伴の人々がまゐつてる樣子を見て「おいどうした」などゝおやゆ遊ばす程であつた。本殿に御參拜になると直ぐ傍の神樂殿では直に神子舞と大和舞とが始まる、森々たる大杉の靜寂を破る舞樂、それに連れて舞ふ四人の裝束した村の娘、此の神さびた光景に殿下は暫く御興深く御覽になつた、其處から測候所を御視察の上豫定を變更されて直に妙法ヶ岳の奥の宮に向はれた、此の頂上からは埼玉、群馬の連山が起伏して一望のうちに見ゆる、殿下は非常にお喜びになつて地圖をお擴げになり一一指呼されて「あの山は何か」などとお附きの者にお尋ねになる。午後四時半神社にお歸になり夜は榊の間にお休みになつた、十二日は午前八時御下山御歸京の豫定である。

【秩父特派員電話】十二日朝の輝かしい太陽が三峰神社の青さびた屋根に映へる海拔千百米突、攝氏七度の山上の空氣はしみるやうにすんでゐる、秩父宮殿下には午前六時御起床直ちに洋服に御召替の後槇氏等と御一緒に神社附近のこんもりとした杉林を約三十分ばかり逍遙された武甲山を越えて彩繪のやうに高篠山を望む邊重疊たる山脈はしん〳〵と山の中に居る氣分を味はせる、所々には八重櫻もさいて居る、殿下には午前七時半御朝食、神樂殿で催された神子舞を御覽になり八時半下山の途に就かせられた、鳴く音とり〴〵の山の小鳥は朝の樹間にまるで奉送の曲を奏するが如く囀づる、九時四十分大輪御着自動車で影森に、こゝからお徒歩で二十八番橋立觀音堂後の大岩壁の下にある鐘乳洞に成らせられた、眞暗い洞窟一町半の間には佛陀の立像の如き岩がある、あるひは乳房のような鐘乳石が下つて居る變つた有樣は殊の外殿下のお氣に召したらしい、洞窟を出て秩父水道貯水池を御視察になり秩父織物同業組合へ臨の後、十二時十分秩父神社社務所に御着になつた、午後五時十五分上野驛着御歸京の豫定である。（五月十三日東京朝日新聞）

○ローガン征服

【ヴアンクーヴア特電】（十五日發）一九二二年英領コロンビアのラーチヴアレーでカナヂイアン・アルバイン倶樂部がキャンプを開いた時トロント大學のエー・ピー・コールマン博士が主唱し、

エー・オー・ホエーラー氏その他が特別委員となつて準備を進めたエー・シー・マツカーシー等八名のローガン山登攀の壯擧は去る五月廿日にアラスカのコートヴアから出發して、一行中六名だけが遂に絕頂を極はめて下山したとの電報が來て當地の新聞をにぎはした。一行はエー・シー・マツカーシー氏等八名であつたが二名は落伍した、なほ前記四人はカナダ人で、殊に一名は當市在住者といふところから一層市民の注目を惹いた、これが動機となり當地では今更のやうに本社登山隊一行の壯擧に多大の興味を持ち、在留同胞は何れもその成功をいのつてゐる。因みにマーカーシー氏は一九一三年當時ローキー山中のロプソン山を征服した知名の山岳家である、（七月十六日東京日日新聞）

○會員通信

△この冬は大町、關、赤倉あたりで極めて平凡なる飴ン棒おどりをやりし外、何の收穫もなく過ぎ、折々耳にする學校連中の壯擧を羨やみ居るのみに候。四月に入り十二日美ヶ原の吹雪を賞し、十九日、鹿島から矢澤の北の尾根を祖父岳へ日歸致し候。祖父の日歸りは十四日、濱田の一行の登りたるあとを追ひたるもの。美晴に後立山、立山の壯觀を心ゆくまで嘆賞いたし候。鹿島の村より輪樏にて參り、尾根へ出てから樏を脱つて樂に歩き、矢澤の頭から二ツ目の突起の手前からまた樏を着け申候。雪は頂上近くの外はザラメ雪、午後には大分もぐるやうに候。去年の木曾駒以來久振りにて高い山に登り、時候外れのアルプスは中々面白きやう思ひ候。日歸りが何よりに候。鹿島を午前五時半に出發、正午頂上、午後一時出發、三時半歸着。七時大町發にて歸松。一寸思ひ掛けぬ拾物に候。（四月　藤島敏男）

△五月十日青木湯に泊り、額田敏氏に會ひ、翌十一日共に鳳凰山登山致し候。精進瀑上「ガレ」の邊、前夜の降雪が二、三寸、障子岩から殘雪深く、室ノ平まで約三尺、平は最深くして、これより賽ノ河原下までは約四尺、軟雪にて歩行困難に候。三月中の降雪多量によるものと愚察仕候。岩小屋は全たく埋もれ、その下手に底雪崩の跡あり。午後一時二〇分地藏佛、同三時二〇分北御室に泊り候。翌朝午後五時三〇分下山にかゝり候も、雪質に變化を見ず。鳥居峠を踰え、韮崎驛發午後三時四四分にて歸京仕候。次に、同卅日本澤に參り、翌卅一日硫黄岳登山致し、茅野に下り、即夜歸京仕り候。殘雪量は廿年來との事にて、東は本澤、西は夏澤温泉の近くに及び、雪質は鳳凰に等しく覺え候。（五月　岩井三郎）

△雪の祖父岳に登り下廊下兩岸の山々の雪姿に接しても何となく物足らぬ心地致候まゝ、久戀の越後會津方面に志し、計畫通り守門淺草、御神樂の三山に攀ぢ、想像以上の積雪と、複雜なる山谷に驚嘆致候。利根川水源の山々にも劣らざるべしと思はるゝ數も雪の爲め今尚全く閉息し居り、殆んど思ひ通りに旅程を終了し欣びを禁じ得ざるもの有之候。

五月十日　柏原——黑姫登山——戸隱中社泊。
十一日　中社——飯綱登山——長野。
十二日　長岡——栃尾町——芳ケ平泊。
十三日　守門登山——五味澤泊。
十四日　淺草岳登山——入叶津——蒲生泊。

十五日　蒲生――本名村――三條泊。
十六日　御神樂岳登山――室谷泊。
十七日　室谷――津川。

山頂に立てる日は三日とも快晴にて、駒、中のあたりより奥上州、會津、日光裏、那須方面まで無數の山岳を望み、此方面に對する執着益深きを覺え申候。（五月二十日藤島敏男）

△本月二十三日御坂山塊の中大石峠（新）以東を志し、午後十一時半飯田町發、翌朝午前五時上吉田着。直ちに船津に向ふ、途中殘雪美しき富士及周圍の展望にすつかり眠氣も醒めて、五時四十五分湖畔の「見晴し」と云ふ家にてお茶漬をかつ込、六時二十分乘船、七時五分大石村着、大石峠（新道）に向ふ。途中分岐點を誤つて右に取りし爲、道なき急傾斜の岩尾根に到達して、其處を喘ぎ〳〵「ミツケ」の頂上より僅か峠寄の處に出て、山頂に到着せしは九時三十五分、大石村より二時間半を費し申候。

同所は此山塊切つての好展望臺なりと會員沼井氏の言はれし如く、其廣大なる眺望に見惚れて暫し去り兼申候、殊に目下附近は岩櫻と躑躅の花盛にて、其美しさ言はん方なし。

河口湖も玆より俯瞰したる景色が最佳き樣に感じ申候。約三十分間展望に耽りし後、湖畔の村々て稱して居る立派な「山嶺道路」を黑岳に向ひ、やがて十時三十五分樹林に圍まれたる一等三角點に到着仕り候。十一時三十分同所を出發し、十二時御坂峠に出て、午後一時半八丁峠着、二時清八峠、四時笹子着、五時三十九分同驛發の列車にて九時頃歸京仕り候。（五月廿六日　神谷恭）

△水沼から赤城に登りました、御山躑躅の眞盛りなのを霧の晴れ間に愛てつゝ鳥居峠に上り切ると、六沼かけて、白樺だけ輝いてまだ全くの冬木そのまゝでしたが、ハヽメの田樂は甘い夕食でした、テニスコート工事中の湖畔亭泊。（五月二十八日）

昨日の雨を恐れて何處にも登らず早起舟を湖心に浮べて山々を眺め、澁川へ下る筈が、霧の爲めに笠輪に下り、それからまた牧場を二つ越す路の迷ひ方で、やつと鮎の飛ぶ坂東橋へ出たのが午後十二時半、伊香保香雲館泊（五月二十九日）

榛名湖に行き雷雨に逢ふてまた伊香保泊。（五月三十日、松宮三郎）

會報

○第十八回大會記事

大正十四年五月三十一日午後七時から芝區高輪南町三十番地調和道協會に於て、本會第十八回大會を開き、左の講演があつた。

日本に知られざる國々（幻燈使用）　名譽會員　志賀　重昂氏

講演に入るに先だち、幹事槇有恒氏は、最近の登山界に對する感想として、登山の流行と共に各地に大小無數ともいふ可き程山岳會やうのものが存在することを說き目的を同じくするならば此等の會は出來得べくば、各自獨立して行動するよりも、互に聯絡をとりて或る一の會の一部として又は其下に協力して働くやうにしたいものであると述べ、昨今各階級の間に廣く行はれんとする氷雪又は岩登りに就ての感想を語られた。

會場が暗くならぬ中は幻燈映寫に不適當な程明るいので、時間が遲れた爲に志賀氏の幻燈說明は、少しく簡略された氣味があつたのは遺憾であつたが、歐洲大戰後に於ける世界强國の政策より說き起して、將來の世界は唯だ石油戰あるのみと斷じ、メソポタミヤを世界の河中島なりとし、其處に石油の大爭奪戰行はれつゝある所以を明にし、油斷大敵どころか、石油がなければ國が立ち行かぬから、油斷國斷であると論じ、轉じて海外に於ける日本人の發展に言ひ及ぼし、日本人の知らない國にも日本人が行つて何か仕事をしてゐると勵聲一番、それより二百餘枚の幻燈に就て、獨特の頗る興味ある說明を下し、最後に山岳會の講演であるからとて、十數枚のアルプスの寫眞を見せた。これは勿論純然たる山に關する講演ではないけれども、主として南米、阿弗利加、亞細亞に亘りて、氏の實地視察された地方のことであるから、何人も知つてゐて爲になる講演であつた。當日の來會者は會員外を合せて百餘名であつた。

○第二十八回小集會記事

大正十四年六月二十一日午後一時半より麹町區紀尾井町皆香園に於て、木暮幹事司會者として開會、左の講演があつた。

加奈陀ロッキーに就て　木暮理太郎氏

幹事槇有恒氏が一行五名と共に加奈陀ロッキー登攀の爲出發したので、先づ其事に關し前後の事情を明にし、次に加奈陀ロッキーの位置、疆域、廣袤、山群等に就て概略を述べ、其探檢登攀の歴史を略説した。

赤谷川上流の山々　武田久吉氏

清水峠から三國峠に至る上越國境山脈中、主として巨流利根の一支川である赤谷川本流の水源に蟠る山々に就て、大正十一年春及び大正十四年四月下旬から五月上旬に亘る實地踏査を經とし、其折聞見する所を緯として、山貌地形等を説明し、陸測五萬の地圖に無名の澤や山の名を確め、誤つてゐるものを正されたのは、例により鮮明な多數の寫眞と共に會衆の興味を唆る講演であつた。

當日の來會者は高畑棟材、吉田次男、沼井鐵太郎、岩井三郎、茨木猪之吉、酒井忠一、岩永信雄、大熊保夫、堀龜雄、牛奥富昌、辻莊一、石川孟範、山田應水、林邦彦、柴山乙彦、小松喜一、戸澤英一、中島清、岡田喜一、山口成一、矢作太郎、杉浦晋、磯貝藤太郎、村形吉富、越智主一郎、野口末延、田澤昌介、吉田直吉、本多友司、松井幹雄、村越匡次、瀨戸强三郎、松本善二、武田久吉、冠松次郎、木暮理太郎、鳥山悌成、高頭仁兵衞の三十八氏にして、外に會員外來會者二十三名であつた。

○槇幹事のロッキー登山

幹事槇有恒氏は細川護立侯及び東京日々新聞社の援助を得て、會員橋本、早川、岡部、波多野、三田の五氏と共に加奈陀ロッキーに登攀す可く、六月十九日午後三時バリー丸にて加奈陀に向ひ横濱を出發した。一行の目的は加奈陀ロッキー中にて嶮峻の名あるアルバータの處女登山を行はんとするのである。アルバータは加奈陀ロッキー北半部

の略ぼ中央に位し、百二十方哩の面積を有するコロンビヤ氷野の北端にあつて、高距は一萬一千八百七十四呎であるから、高さの點では加奈陀ロッキー中にも之を凌ぐものが五つか六もある。然し未だ誰れにも登られてゐない程峻嶮な山である。曾て加奈陀山岳會の連中が登攀を企てゝ成功しなかつた。一行はこのアルバータに最初の登攀を試み更に二三の峯にも登る筈である。從つて出來ることならガイドなしに登りたい希望であるが、これは先方へ到著して見ての樣子で、希望通りに行かぬかも知れぬと思はれる。孰れにしてもこの登山隊が齎らす總ての體驗は日本の山岳界に於ける貴重なる資料といはなければなるまい。其詳細は他日誌上で發表することにする。

○會務報告

大正十四年六月十七日午後一時本郷區駒込蓬萊町三十一番地「山岳」編輯所に於て臨時幹事會を開き、左記五人の入會を許可す。

橋本靜一、早川種三、波多野正信、岡部長景、三田幸夫。

出席幹事　高頭、冠、鳥山、木暮、槇(委任)。

大正十四年六月二十一日午前十時、麹町區清水谷皆香園に於て幹事會開催、入會申込者の詮衡を行ひ、入會を許可せられたる者八名。

田中興市　廣瀬潔　頭井豐二郎　三好毅一
綱島次男　岡田喜一　增井經夫　吉澤一郎

出席幹事　高頭、冠、鳥山、木暮、槇(委任)。

○交換及寄贈圖書目

岳の友　第一年四號
ツーリスト　第十三年第二號、第三號
ステップ　創刊號
山とスキー　第四十八號
關西時報　四十四號
アルカウ趣味　第十二年第一、四、五、六號
山岳時報　五年九號、六年一、二、三、六、七號
(城南山岳會)
山嶺　第四卷三、四、五、六、七號
(東京野步路會)
山の響　第二、三號　(阪神トキワ會)

日本アルプス登山要項(大正十四年度信濃山岳會)
日本南アルプス登山案內　(菅原村强力組合)
富士山の自然界　(山梨縣廳)
六甲—摩耶—再度山路圖　(直木重一郎)
山嶽　第三號　(大和山岳會)
工業原料用鑛物調査報告　第二十、二十一、二十二號　(地質調査所)
山　第一年第一號　(甲斐山岳會)
Club Alpino Italiano, Anno XLIV-Num. 1, 2, 3, 5.
" , Anno XLII-Num. 11, 12
" , Anno XLIII-Num. 1.
Rivista del Club Alpino Italiano, Vol. XLII-1923
Bollettino del Club Alpino Italiano, Vol. XLII-Num. 75.
The Bulletin of the Geographical Society of Philadelphia, Vol. XXIII-No. 1.
Trail and Timberline, No. 77, 78, 79, 80. 81, 82.
Revue Alpine, Vol. 24 No. 4. Vol. 25 No. 4. Vol. 26 No. 1.
Colorado Chautauqua Bulletin Vol. XIII No. 1, Vol. XIV No. 2, 3, 4.
The Prairie Club, Bulletin, No. 143, 144, 145, 146, 147.
La Montagne, 20ᵉ Année No. 177, 178, 179, 180, 181, 182.
Bird-Lore, Vol. XXVII No. 1, 2, 3.
The Scottish Mountaineering Club Journal, Vol. 17 No. 99.
18. Jahresbericht des Akademischen Alpenklub.
The Mountaineer, Vol XVII No. 2, 4, 5, 6, 7.
Die Alpen, 1-No. 1, 2, 3, 4, 5, 6.
Canadian Alpine Journal Vol. XIV, 1924.
Svenska Turistföreningens Arsskrift 1925.
Atlas över Sverige del III.
Svenska Turistföreningens Cirkulär No. 44 1925.
Supplement to Trail and Timberline.
The Seventeenth Annual Record of the Ladies' Scottish Climbing Club.
The Geographical Journal Vol. LXIV No. 2. Vol. LXV No. 2, 3, 4, 6.

大正十四年九月發行

Sierra Club Circular, Number 12.
Butlleti Excursionista de Catalunya, Any XXXV Num. 356.
Natural History, Vol. XXV No. 2.
Alpine Journal No. 230.

○本會規則拔萃（大正十三年九月改正）

第二條　本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス。

第三條　本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ。

第五條　本會ハ會長ヲ戴カス幹事若干名ヲ置キ、一切ノ會務ヲ處理セシム。

第十條　本會會員ヲ別チテ正會員及名譽會員トス、名譽會員ハ幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セラルヽモノトス。

第十一條　正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所、姓名、年齢及び職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス（入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ）

第十二條　入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス。

第十三條　入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費ヲ添（拂込マルベシ。

第十四條　正會員ハ會費年金參圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付スベキモノトス。（以下略）

現任幹事（八名）

藤島敏男　冠松次郎　木暮理太郎　槇有恒
六鶏保　高田達也　高頭仁兵衛　鳥山悌成

評議員（十八名）

小島久太（在桑港）　武田久吉　梅澤親光　高野鷹藏
近藤茂吉　中村清太郎　三枝守博　辻本滿丸
田部重治　山川默

及ビ現任幹事八名。

訂正

第十九年第一號四十二頁挿入の「尾瀬沼北岸の濕原と森林の接觸點に於てシロシヤクナギとアシと混生する狀態」と題する寫眞版は誤て上下の向きを轉倒せり、深く其疎漏を謝す。

同一三六頁十九行　常任評議員とあるは評議員の誤り。

大正十四年九月二十五日印刷
大正十四年九月二十八日發行

【定價金壹圓貳拾錢】

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

發行所　新潟縣三島郡深才村深澤　日本山岳會

東京市芝區高輪南町三十番地
日本山岳會會計取扱所
振替口座東京四八二九番

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

著作權所有

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XIX 1925 No. 2